

国際日本文化研究センター第4期機関拠点型基幹研究プロジェクト  
「国際日本研究」コンソーシアムのグローバルな新展開——「国際日本研究」の先導と開拓  
キックオフシンポジウム

# 日本文明の再構築 岩倉使節団 150 周年に寄せて

Edited by TAKII Kazuhiro

瀧井一博編

国際シンポジウム 54

International Research Center  
for  
Japanese Studies

国際日本文化研究センター

国際日本文化研究センター第4期機関拠点型基幹研究プロジェクト  
「国際日本研究」コンソーシアムのグローバルな新展開——「国際日本研究」の先導と開拓  
キックオフシンポジウム

# 日本文明の再構築

## 岩倉使節団150周年に寄せて

Edited by TAKII Kazuhiro

瀧井一博 編

国際シンポジウム 54

February 17–19, 2023

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

© 2024 International Research Center for Japanese Studies  
Online edition : ISSN 2434-3145

All rights reserved by the International Research Center for Japanese Studies.  
No part of these proceedings may be used or reproduced without written permission,  
except for brief quotations embodied in critical articles and reviews.

First edition published in 2024  
by the International Research Center for Japanese Studies  
3-2 Goryo Oeyama-cho, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192 Japan  
Telephone +81-(0)75-335-2222 Fax +81-(0)75-335-2091  
URL: <https://www.nichibun.ac.jp/>

## 序

本書は、2023年2月17日から19日にかけて国際日本文化研究センター（以下、日文研）を会場にして開催されたシンポジウム「日本文明の再構築——岩倉使節団150周年に寄せて」の各パネリストの報告の筆記録を一冊にまとめたものである。収録に際して、編集上の必要最低限の修正を施したが、大きな内容上の改変はしていない。このような編集方針のもとで、報告の文字起こしの収録を御快諾くださったパネリストの皆様にもまず篤くお礼申し上げたい。また、本シンポジウムは「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で実施し、企画と実施には岩倉使節団米欧亜回覧の会の協力を得た。感謝の至りである。

本シンポジウム企画の趣意については、本書に収められた拙稿で述べてあるので、そちらを御参照いただきたい。ここでは、シンポジウムを終えた今抱いているいくばくかの感慨を記しておこう。

このシンポジウムのタイトルとして、「日本文明」と掲げた時、「さすが日文研」との快哉の声がいくつか耳に届いた。戦後、日本文明論が盛んに論じられた時期があった。それは、戦後の復興と高度経済成長を達成した自信に裏打ちされて、日本の独自性を歴史的に弁証するという背景があったように思う。だとすると、日本文明を論じる根拠は今や霧散したのではないか。われわれが生きているのは、戦後の成長神話など過去の栄光としてもはや振り返る余裕すらなくなった停滞と喪失の時代と言っているからだ。このシンポジウムには、日文研が幹事を務める「国際日本研究」コンソーシアムにも呼びかけて、若手のパネルを組むなど次世代研究者の積極的な参加を心がけたが、彼らにとって「日本文明」というワードがどのように響いたのかは、残念ながら決して定かではなかった。

実際、シンポジウムのなかでは、ディスカッションの場において、「文明」を問うことへの懐疑的な声も聞かれた。Civilization という語への日本的偏愛が指摘されたり（ピーター・コーニツキー）、「そもそも」史観と「たまたま」史観という表現で日本の近代化の必然性と卓越性を相対化する視座が唱えられたりした（五十嵐恵邦）。それぞれ傾聴に値する見解であり、日本文明を論じる時に重々肝に銘じておく必要がある。

そのうえで、なぜ日本文明なのか。それは、日本という単位が世界を構成するひとつの要素とアクターとして現に成立しているからである。企画者として考えたのは、日本とは何かということではなく、日本に何ができるかということだった。より具体的に言えば、内外に張り巡らされている様々な関係性の網の目のなかで、日本がどのような位置と状況に置かれており、それに何が期待されているのか、また何をなすべきなのかと

いう問いである。そのような課題は、田中明彦と酒井啓子両氏の基調講演でまさに突きつけられたものである。

以上のような見地に立てば、岩倉使節団 150 年を掲げた本シンポジウムにおいて、単に 150 年前の岩倉使節団という歴史イベントにのみ焦点を合わせるのではなく、日本研究の国際的関心を代弁する様々な報告がなされたことは、主催者として大きな喜びだった。なかでも、引き揚げ文学や沖縄社会のような周縁から日本を問う研究成果が披露されたことは特筆されよう。

岩倉使節団は、150 年前に西洋文明を受容しようとして欧米諸国を回覧した。それは、見渡せない世界地図のなかでの自らの立ち位置を知り、新しい社会のあり方を構築しようとした試みだった。150 年が経ち、日本が直面しているのは全く別の課題である。だが、日本を成り立たせている関係性を読み解き、それに即応した社会のかたちを樹立する<sup>コンステイテューション</sup>という課題は同じだろう。最大の違いは、日本を自己目的化せず、むしろ世界における日本の需要を探求して、日本を人類的な問題と取り組む道具とすべきころではないか。次なる岩倉使節団とは、そのような課題探求のための知的冒険の旅であり、このシンポジウムがそのためのキックオフであったならば、企画を立てた者の一人としてこれに勝る喜びはない。

最後になるが、シンポジウムの実現のために抜群の事務能力で準備と運営を支えてくれた佐々木彩子氏を中心とする日文研研究協力課国際研究推進係の皆様およびプロジェクト研究員の坂知尋、西田彰一、藤本憲正（現日越大学講師）の各氏に深甚な謝意を表したい。西田氏は本報告書の編集でも、細心の注意を払って尽力してくれた。心より感謝申し上げたい。本書に何か不手際が残っていたとしたならば、それは编者である瀧井が負うものである。

2023 年 8 月

瀧井 一博

# 目次

序	瀧井一博 … 3
<b>第1部 岩倉使節団研究の今</b>	
丁抹国撫蘭仙 ——明治初期の日本と小国デンマーク	ピーター・コーニツキー … 9
ハンチントン『文明の衝突』再読 ——岩倉使節団150年と日本文明の行方を考えるよすがに	瀧井一博 … 22
岩倉使節団の意味を問う	小野博正 … 27
岩倉使節団150年に寄せて ——米欧亜回覧の会が取り組んできたこと	泉三郎 … 32
●パネルセッション「岩倉使節団再考」	
工部省と岩倉使節団	柏原宏紀 … 36
「文明の落差」克服ののちに——岩倉使節団以後を顧みる	牛村圭 … 42
記録の文体——選び取られた漢文訓読体	古田島洋介 … 49
<b>第2部 令和の岩倉使節団——自由で開かれた国際社会への貢献</b>	
●パネルセッション「異文化接触と文化創造——古今東西からの岩倉使節団」	
琉球／沖縄における死の文化の創造	越智郁乃 … 59
明治留学生の史的先例としての遣唐使と中世留学僧	榎本渉 … 66
幕末維新期の異文化接触と岩倉使節団 ——イギリス訪問と教育視察を中心に	太田昭子 … 71

●若手研究者セッション「国際日本研究の課題と方法」

日本文学を題材とするアクティブラーニング

——インターネットを活用した国際的な学術コミュニケーション

ダマソ、フェレイロ・ポッセ … 81

使節団の多角化——現代の国際日本研究の新たな流れ

ニコラス・ランブレクト … 89

奪衣婆信仰の展開——境界と衣服

坂 知 尋 … 95

新たな国際秩序と日本の役割

田 中 明 彦 … 100

第3部 日本文明の再構築——文明多極化時代の国際日本研究／国際日本学

グローバル関係学から見た「国際日本学」の役割

酒 井 啓 子 … 117

●座談会〈抄録〉「日文研が語ってきた文明／語っていきべき文明」 … 131

劉 建 輝 (司会)

井 上 章 一

タイモン・スクリーチ

安井眞奈美

戦 暁 梅

総 括

フレデリック・クレインス … 145

プログラム

… 148

執筆者一覧

… 150

## 第1部

### 岩倉使節団研究の今



# 丁抹国撫蘭仙

——明治初期の日本と小国デンマーク

ピーター・コーニツキー

今回のシンポジウムに当たり、『米欧回覧実記』を改めてめくってみて、私がどのような印象を受けたのかと言えば、どう見ても岩倉使節団の日程が実に忙しく、眩暈を覚えるぐらいであったということである。使節団のメンバーたちは、かなりのエネルギーや辛抱が必要だったのではないかと思いついた次第である。

なぜそのような日程にならなければならなかったのか。それにはいろいろ理由が考えられるが、目的地の多さが第一だろう。アメリカや、ヨーロッパの列強国イギリス、ドイツ、フランスだけでなく、ロシア、当時成立したばかりの統一国家イタリア、それからスウェーデン、デンマークにまで足を運んだわけである。それから、各国内でも目的地は多種多様で、病院、政府、博覧会、軍事・産業施設、銀行、郵便局と数え上げれば切りがない。つまり、各国の社会全般が回覧の目的となっていたので、必然的に忙しい日程になったと言えるのではないだろうか。

しかし、使節団がなぜ小国デンマークにまで足を運んだのか。わざわざそこまで行かなくてもよいのではないか。デンマークと言えば、現在はアンデルセンの童話とかレゴやサッカー選手などが、我々には非常に連想されやすい。ただ、小国デンマークと言っても、その我々のイメージが明治初期の段階でのイメージとかなり違うことに注意することが大切である。そのため、「小国デンマーク」と言うことが適当であるのかという疑問が当然出てくる。

まず1810年代まで遡ってみよう。その当時、デンマークはまだ数多くの植民地を所有していた。しかし、1814年に、ノルウェーがデンマークからスウェーデンに引き渡され、また1845年にセランポールとトランケバルというインドのデンマーク領がイギリスに売却され、ニコバル諸島が1868年にイギリス領となった。そのため、岩倉使節団のヨーロッパ巡覧の段階では、既にデンマークのアジア植民地はなくなっていた。

久米邦武は、そのような事情を十分に理解し、その概要を『米欧回覧実記』のデンマーク概観で詳しく述べている。久米は同箇所、フェロー諸島、グリーンランド、アイスランド、西インド諸島がデンマーク領であったことに言及している（1917年に西インド諸島が、1944年にアイスランドがデンマークの支配下から離れ、2024年現在ではフェロー諸島とグリーンランドのみがデンマークの自治領となっている）。そのため、当時、明治初期の

事情を考えると、岩倉使節団がデンマークへ行ったのはそうおかしなことではなかったのではないと思われる。つまり、デンマークもイギリスやフランスと同じように植民地を支配していたことは事実で、日本側もそれがわかっていたわけである。

岩倉使節団のデンマーク訪問の背景には、もう一つ考慮に入れなければならないことがあると思われる。日本とデンマークとの国交のことである。慶応3(1867)年に日丁修好通商航海条約が締結されて、それは幕府が外国と結んだ最後の条約となった。翌慶応4年には、横浜、函館、長崎、兵庫、大坂にそれぞれデンマークの領事館ができ、領事自体は最初オランダ人が務めていたものの、横浜の領事館は慶応4年版の『横浜明細全図』に初めて現れ、デンマークの国旗も描かれた。

実は、国交ができる前にも、デンマーク人は既に幕末の日本でかなり活躍していた。日本在留の代表的なデンマーク人はフレデリック・クレブス(Otto Frederick Krebs)という人物で、彼は生まれがデンマークであるが、高校を卒業してからスコットランドへ渡り、造船技師の教育を受け、それから幕府がスコットランドに蒸気船を3艘ほど注文したときに、クレブスが技師として、その一つに乗って来日した。その後、どういうわけかクレブスは国に帰らないで、アメリカのウォルシュ兄弟が日本で経営するウォルシュ商会に就職して、一生懸命に日本語を学ぼうとしたわけである(長島2007、398-401頁)。

三菱の創立者岩崎弥太郎が、当時ウォルシュ兄弟と頻繁に取引をしていたので、それがきっかけでクレブスは岩崎と知り合いになった。岩崎の日記を見ると、クレブスの名前が頻繁に登場する。明治6(1873)年5月にクレブスは三菱に入社して、鉾山機械方監督の肩書を得た。年間給料が300円で、当時としては非常に高い給料であった。後にクレブスは三菱の5人の取締役のうちの一人となった。非常に派手なキャリアと言わなければならないが、実は明治初期の三菱では数多くの外国人が働いていて、その中でもデンマーク人が特に多かったのである。それはおそらくクレブスの影響ではないかと考えられる。かいつまんで述べれば、岩倉使節団が明治6年4月にデンマークに足を踏み入れた時期までに、日本とデンマークとの国交は既に出来上がっていて、日本国内においてもデンマーク人が活躍していたということである(鈴木2000、9、14頁。三菱社史刊行会1979-1982、第1巻、162頁)。

次に、岩倉使節団のデンマーク訪問について簡単に説明したい。実はコペンハーゲン大学の長島要一先生が既に発表されたように、岩倉使節団のデンマーク滞在については、デンマーク国立文書館の資料や当時のコペンハーゲンの新聞などが『米欧回覧実記』に出てこない面白い事情を明らかにしているので、しばらくは長島先生の研究成果を踏まえて話を進めていきたい(Nagashima 2003, Nagashima 2012, 長島2007)。

使節団は、北欧、ロシアの訪問に際しては、使節団全員ではなく、たった11人しか参加しなかった。そのうち3人が留学生で、彼らは英語、フランス語、ロシア語の通訳として参加していたので、実際のメンバーは8人であった。使節団はドイツ北部の港町キールから、夜行の客船でデンマークに入国し、わずか5日間だけコペンハーゲンに滞在し

て、それからスウェーデンへ渡った。なお、イギリス、ドイツ、アメリカ、フランスなどと違い、日本人留學生がデンマークに居残ることはなかったので、一見すると小国デンマークはあまり重要視されなかったようであるが、果たして本当にそうだったのであろうか。その問題はしばらく置いて、まず使節団の行動を見ていこう。ちなみに、『米欧回覧実記』の記録は、当時のコペンハーゲンの新聞などの資料とつじつまが合わないところがあって、それはほとんどの場合、久米邦武の記憶違いではないかと思われる。

まず、明治6年4月18日に使節団がコペンハーゲン駅に到着して、ジュリエス・フレデリック・シック (Julius Frederik Sick) というデンマーク人が出迎えた。このシックという人物は、もともとデンマークの外交官で、明治3 (1870) 年にデンマーク国王の書簡を日本まで持っていき、明治天皇に謁見した際に天皇に手渡している。このことは、国家レベルでの接触も一応できていた人物ということを物語っている。それだけでなく、シックはデンマーク有数の電信会社と深い関係を持っていて、デンマーク型の富国強兵策を提唱していた。そのことについては後述する。

翌19日に使節団はデンマーク国王のところに行った。そして、フォーマルな国王謁見晩餐会が開催され、それから別の場所で国王・王妃夫妻と使節団の間で30分ほどの会話の時間があり、それがとても楽しかったと、珍しくも久米は『米欧回覧実記』に書いている。

しかしながら、それと比べても20日の行動のほうがずっと重要だったのではないかと私は思っている。20日は、まず博物館訪問である。デンマーク国立博物館では、最初にデンマークの植民地グリーンランド、アイスランド、フェロー諸島などの陳列品を観察し、結果としてデンマークが単なる小国でないこと、それからデンマーク本土にない資源がグリーンランドなどに豊かにあることを使節団が確認している。

次に、博物館の日本ギャラリーの方を見学すると、そこには陳列品が驚くほど多くあったと、久米は『米欧回覧実記』に書いている。それらは瀬戸物とか漆器、鎧、版画などで、香港在住のデンマーク総領事のブロックという人物が、幕末に手に入れたものということである。それらは今でも陳列してあるが、その真ん中に徳川家の三つ葉葵紋がついている豪華な乗り物があり、博物館に慶応3年に収蔵したという記録が残っている。それはおそらくパリ万国博覧会と関係があると思われるが、詳しいことはまだ資料が出ていないのでわからない。

そして同じ20日のことであるが、夜は使節団がコペンハーゲン市内の証券取引所の中にあった大北電信会社の本部を訪問し、その後、証券取引所の会場で晩餐会が開催された。それは、日本にとってもデンマークにとっても非常に有意義な機会だったと言わなければならない。大北電信会社と日本との関係についてはこれから詳しく話すが、その前に使節団の日程に戻ろう。

21日には使節団が軍事施設を観察したが、『米欧回覧実記』の22日の項目では、久米はデンマークでの観察経験を踏まえて、小国は独立を守るために軍事力が必要だと結論

づけている。国際政治の中、日本の事情も念頭に置いて、そのように書いたに違いない。そして、22日に市内見物をして、最後の23日に連絡船に乗ってスウェーデンへ向かって出発し、岩倉使節団のデンマーク訪問が終わったのである。

さて、20日の晩餐会のことに話を戻すが、晩餐会の場所は証券取引所で、同じ建物の中に大北電信会社の本部だけでなく、デンマークの最初の投資銀行の拠点もあり、それから晩餐会の担当者はカール・フレデリック・ティットゲン (Carl Frederik Tietgen) という人物だったのである。ティットゲンが担当者になったのは偶然とは考えられない。ティットゲンとはいかなる人物なのかと言うと、イギリスのマンチェスターで5年間ほど総合商社に勤務してから、帰国後卸専門の商社を設立して成功し、1857年にはデンマーク初の投資銀行の取締役になった。その後、明治元年に大北電信会社を設立したが、1870年代に砂糖生産会社、ビール醸造会社などいろいろな会社を設立して、とうとう当時のデンマーク産業界の大物となったというわけである。

さて、ここで大北電信会社のことを少し取り上げたい。大北電信会社設立の1867年の暮れに、会社がロシア政府からウラジオストクまでの電信線の建設及び運用の許可を受け、早速電信線を建設した。それから、1870年1月に大北支那日本拡張電信会社という支社を設立して、今度はウラジオストク—長崎間、及び長崎—上海間のケーブル敷設に取りかかった。つまり、デンマークの大北電信会社が、日本とヨーロッパを結ぶ電信ケーブル敷設を担当したわけで、それは経済的また政治的に大きな意味を持っていたのである (長島1995)。

先ほど述べたように、使節団のデンマーク入国のときに迎えに行ったのはシックという外交官であった。彼は大北電信会社の代表として、会社の電信線がロシアを横断してウラジオストクまで届くように、ロシア政府と交渉し、結局、許可をもらったのである。つまり、デンマークの外交官がデンマークの民間会社の代表という役割も同時に果たしていたのである。これは少々おかしなことであるが、これでヨーロッパと東アジアを結ぶ電信線の建設は、単なる民間業者の事業にとどまらず、国家レベルでの事業でもあったということが明らかになっていると言えるであろう。

その後、シックは大北支那日本拡張電信会社の理事長となった。シックが来日した目的は、前に言及したように、国王の書簡のポストマンという役割もあったが、実は、日本政府と交渉して電信線が問題なく日本まで届くようにするといった仕事のほうがメインだったのではないかと私は考えている。

シックは明治3 (1870) 年6月に来日したが、最初から外交官の仕事と並行して大北電信会社の代表としても動き始めた。まず、大北電信会社の事業のことを説明した書簡を外務省へ送り、外務省に面会を依頼した。その後、交渉が始まった。面会には、日本側から、初代外務卿の沢宣嘉、及び参議の寺島宗則が出席していたが、電線施設についての交渉はかなり長引き、結局3ヵ月間もかかってしまった。

沢と寺島は、国際電線が日本まで届くということ自体には非常に積極的な立場をとっ

ていたが、当然日本の権利を守らなければならないという必要性も強く感じていた。だから、許可を与えるには与えるつもりであったけれども、同時に日本における会社の権利を最小限にしようとしていた。この問題を解決するのに相当時間がかかり、衝突もあったが、結局9月末に契約が成立した。

もともと外交官のシックが同時に自国の会社の代表をするということは、当時、寺島もそれに対してかなり疑問を感じていたようである。寺島はイギリス公使のパークスに相談してみたが、それは契約署名式の後のことで、もはや遅かった。これはずるい話であるけれども、パークスもシックと秘密裡に相談していたので、パークスが寺島の立場をサポートするはずがなかったのである。寺島が疑問を感じるのは当たり前のことであるが、結局、彼はまだ外交経験が足りず、列国の外交官にだまされる余地がまだ十分あったと言わざるを得ないのである（川野辺 1993）。

それは別として、契約が明治3年末に成立し、翌明治4（1871）年に上海と香港を結ぶ海底電線が開通、それからウラジオストクと長崎を結ぶ海底電線、また長崎と上海を結ぶ海底電線がそれぞれ敷設され、明治5年元日に長崎とヨーロッパを結ぶ電信線が開通した。結局、大北電信会社の事業は成功を取めたのである。

さて、繰り返しになるが、岩倉使節団が明治6年に大北電信会社の本部を訪れたのは、その2年前の明治4年に大北電信会社と明治政府とが契約を結び、明治5年元日に長崎を通して日本が国際電信ネットワークに入ったという事実を踏まえてのことであった。

『米欧回覧実記』に、久米邦武はデンマークのことを次のように書いている。「我が日本へも条約し、上海と長崎との海底線を設けたるほどなれば、その盛んなることを想像すべし」。今まで見てきたように、大北電信会社は日本でも活躍するようになったわけであるが、ケーブル敷設と電信経営は、当時として大事業であったに違いない。その大事業を発展させるために、大北電信会社はデンマークで人材を集めて、十数人の若い男性をイギリスへ派遣している。そして、イギリスで電信業の英語の訓練を受けさせてから、デンマークの軍艦に乗せてロンドンを出発した。

その軍艦はトルデンスキョルド（Tordenskjold）号と言って、3艘のケーブル敷設船と一緒に、デンマークの船として初めてスエズ運河を通過して、上海に向かった。上海で、若いデンマークの技師たちはケーブル敷設の仕事で多忙だったようであるが、1871年の4月18日に、ようやく上海―香港間に敷設した海底ケーブルが開通した。そして、彼らは上海ですることがなくなったので、日本へ派遣された。

大北電信会社が敷設したケーブルが一旦長崎に届くと、日本と中国、ヨーロッパを結ぶ電信のコミュニケーションが始まる出発点となった。長崎の拠点は電信の設備や、電信受け入れの事務所だけでなく、デンマーク人の電信技師が生活する宿舎も必要となった。そのために文久3（1863）年に長崎に建設されたベル・ビューホテルの用途を変更して、長崎の電信局を兼ねる宿舎となった。その後、大北電信会社は長い間長崎で活躍していて、戦後になっても連合軍の最高司令官の命令によって、会社の拠点は相変わらず

長崎になっていた。

こうして大北電信会社は日本でいろいろ活躍していたのであるが、時期としてはまさに岩倉使節団がデンマークを訪問した時期と重なるわけである。そこに注目していただきたい。『米欧回覧実記』や岩倉使節団の動きにあまり集中し過ぎると、知識や情報の流れが一方通行のようなものに見えるおそれがあると私は考えるのである。

先ほど述べたように、岩倉使節団の行動や『米欧回覧実記』の記録を見ると、イギリス、フランス、ドイツなどと同じようにデンマークにも日本の資料が既に博物館に陳列してあったり、日本に足を踏み入れたことがあるデンマーク人も相当いたり、また日本にデンマーク人が100人ぐらい住んでいたりしていたわけである。なお、久米邦武もある程度そのような事実を認めていた。言い換えれば、情報と知識が一方通行になっていたわけではないのであるから、ここで岩倉使節団から目を離して、むしろ日本におけるデンマーク人の活躍、それからデンマーク人による知識の追求と生産に焦点を絞って話を進めていきたい。

さて、前に言及したように、長崎の元ベル・ビューホテルには、大北電信会社の若いデンマーク人の技師たちが十数人住んでいた。その技師たちの中に一人、非常に優秀な人物がいた。その日本語能力、またその学問のレベルを考えると、あの有名なイギリス人のアーネスト・サトウと匹敵するくらいの人物だったと言っても大げさではないと思われる。

その人物とはウィリアム・ソフス・ブラムセン (William Sophus Bramsen) である。彼は、どのようなきっかけがあって日本にたどり着いたのか。また、なぜ日本学に挑戦したのか。それから、彼の知識と情報の収集方法の裏にどのような問題が隠れているのか。まず、その経歴を見ておこう。

ブラムセンの父は冒険家のような人で、若いとき海外で数年にわたって実業家をし、それから帰国して、1864年に新デンマーク火災保険会社という会社を設立している。長男のウィリアムも冒険的な性質だったようで、ある日、大学の学生食堂で「俺は中国へ行くよ」と叫んだという逸話が残っている。いずれにしても彼は大学を卒業しないまま退学して、早速、大北電信会社に入社した。彼はすぐ、同時に大北電信会社に入社した連中と一緒にイギリス北部のニューカッスルに派遣され、そこで電信技師としての訓練を受けてから上海へ向かった (Bramsen 1949, Bramsen 1964)。

一旦海底ケーブルが長崎まで敷設されたとき、つまり明治4年の8月に、ブラムセンなど7人のデンマーク人が長崎に派遣され、例のベル・ビューホテルが宿舎兼仕事場となった。明治5年1月1日から会社の長崎支店がオープンしたが、当時は長崎と東京のケーブルがまだ敷設されていなかったため、最初の1年間はあまり仕事がなかったとのことである。

その後、ブラムセンは大北電信会社の仕事を辞めて、日本電信電話公社に移った。なぜそうしたのはかは、今のところわからない。おそらく東京へ移って、長期的に日本に滞

在するつもりだったのではないかと思われる。既に日本人の恋人がいて、長崎でも同棲していたが、結婚まではしなかった模様である。当時としては、外国人と日本人との関係について典型的なパターンである。それも東京へ引っ越した動機と関係があるのではないかと思われるが、詳しいことはまだわかっていない。

それから、明治8(1875)年に突然、三菱郵便汽船会社に入社している。これには、三菱の取締役になっていたデンマーク人のクレブスの影響が間違いなくあったと思われるが、それも裏づける資料がまだ見つかっていない。ブラムセンが三菱に入社するとたちまち、彼の能力が認められることとなった。つまり、当時の三菱は頻繁に裁判に巻き込まれていて、その関係でブラムセンは居留地の領事裁判所で活躍するようになったのだ。言うまでもないことであるが、それは彼の優れた英語力なしではとてもできないことで、それに加えて、法律にも非常に詳しくあったとのことである。結局、三菱の幹部は、ブラムセンをロンドンへ派遣して、法律を学ばせ、弁護士の資格を取得してもらうに越したことがないと判断した。ブラムセンの送別会は、上野の精養軒で催された(『東京横浜毎日新聞』明治13年10月22日)。

ブラムセンはその後、明治13(1880)年10月23日に三菱の奨学金をもらった3人の留学生と一緒に船に乗ってロンドンへ出発した。少し付け加えると、その3人のうちの一人が輸入食品専門の明治屋を設立した磯野計という人物で、もう一人は東京のイギリス法律学校を設立した増島六一郎であった。実はブラムセンと増島は下船後、一緒にミドル・テンプルというロンドンの法律学校に入学した。とにかくこうしてブラムセンはロンドンで法律を勉強するようになったが、明治14年の12月、ブラムセンはロンドンで突然病気になって、12月8日に腹膜炎のため夭折した(『明治屋百年史』1987)。

長崎時代のブラムセンに話を戻すが、ブラムセンが日本語を勉強して日本学に没頭するようになったことは間違いのないのであるが、そのきっかけは何だったかという点、何と日本の古銭、つまりコインだったようである。ブラムセンの友人の回想録によると、ブラムセンは長崎で死に物狂いになって日本のコインを買い集めていたそうである。しかし、彼は単なるコレクターとしてだけではなくて、むしろ日本史のモノ史料としてコインを見ていたようである(Nagashima 2012, 40-42)。

ブラムセンはなぜコインに集中していたのであろうか。実は、日本文化を代表するモノ史料として西洋人がコインと書籍を集めるという現象は、元禄時代まで遡る。出島のオランダ商館に滞在したオランダ東インド会社の役人のインテリにとって、日本の書籍とコインを調査することは、すでに一般的になっていたと言ってよいと思われる。あの有名なケンペルも、元禄時代に医者として来日したが、日本の古銭が彼の視野にあり、大英図書館に所蔵されている彼の自筆手記の中に、小判や一分金のコインを写したペン描きの古銭図が残っている。なお、ケンペルの「日本誌」という名著にも、日本貨幣の古銭図が掲載されている(コーニツキー 2005)。

また、ケンペルと同時代のオランダ人で、デ・ヤーゲ(de Jager)という人物もいて、彼

は一度も来日しなかったが、バタヴィアの東インド会社本部に長年勤務して、日本に結構興味を持っていたようである。彼が出島へ送った書簡も大英図書館にあるが、その書簡によれば、彼は日本についての情報をいろいろ求めていて、その書簡の末尾に「金貨、銀貨、銅貨を問わず日本の貨幣のことも調査するのを忘れないでくれ」と付け加えてある。デ・ヤーゲも古銭を日本文化のモノ史料と見ていたようである (Kornicki 1993)。

もう一つの例として、安永年間に来日したツンベリーというスウェーデン人が、日本では植物学者として有名であるが、植物だけではなく、貨幣にも詳しく、帰国してから日本の貨幣についての単行本まで出している。原本はスウェーデン語であるが、その後ドイツ語版やオランダ語版も出版されている。これは、日本の貨幣を本格的に紹介した最初の文献で、図版の貨幣は全て彼が密かに輸出したものである。コインを国外に持って行ってはいけなかったのであるけれども、彼は靴の中に入れて密かに輸出したため、現在そのコインがウプサラ大学の貨幣部に所蔵されている (コーニツキー 2005)。

また、天明年間にオランダ商館の商館長を務めた有名なティツィングも、2,000枚ぐらゐの古銭を集めたり、福知山藩の8代藩主で古銭学者としても有名になっていた朽木昌綱などと交友を持ち、昌綱が著述した古銭についての著作を、ティツィングがオランダ語に翻訳するなどして、熱心に日本の貨幣史を研究していたことは事実である。

そのほか、詳しくは述べないが、クラブロットとかブルムホフとかフィッセルとかシーボルトなどの来日ヨーロッパ人も、みなそれぞれ日本学の一部門として貨幣の歴史を重要視していたことは否定できないのではないかと私は考える。ブルムセンが日本の古銭を集めたり貨幣史を研究したりしていたことは、当時としてはごく自然なことであった。

言うまでもないことであるが、日本でも江戸中期から古銭に対する興味が一般化していて、古銭収集のマニアも見られ、また収集家が集まって、お互いに古銭を評価し合ったりしていた。古銭コレクターをテーマにした「愛古銭」という番付も印刷された。現存している最古のものは嘉永6 (1853) 年であるが、おそらくその前にも出されていたのではないと思われる。また、この番付に現れている地名を見ると、江戸だけではなく、松坂、奈良、久留米、肥後などがあり、古銭収集のマニアが幕末までにほぼ全国的な規模になっていたことが明らかだ。

明治になっても同じタイプの番付が毎年印刷されていたようで、明治13年版の「愛古銭」に何と4人の外国人の名前も欄外に出ていて、外国人も日本の古銭を調べていることを日本の古銭会が認めるようになったことを物語っている。その欄外のリストを見ると、ブルムセンの次に載るシーボルトは、ハインリッヒというシーボルトの息子の方で、彼が集めた古銭は今、ドイツのイェーナに保存されている。次のラーステンは明治8年にドイツ公使館の通訳見習いとして来日して、10年間滞在してから帰国したらしく、彼のコレクションはどこにあるかわからなくなってしまっている。最後にセッケンドルであるが、彼は海軍士官候補生として明治12年6月から1年間、当時日本に滞在していたハインリッヒ・フォン・プロイセン王子の同伴者として来日して、後にドイツの海軍中将

になっているが、彼が集めたコインも今どこにあるかわからない。

なお、明治13年版の「愛古銭」に北方探検家の松浦武四郎とか成島柳北とかがリストアップされている。柳北は、コレクターとして同じ趣味の連中を集めて、「月旦古泉会」というグループを形成した。その中心人物が柳北だったことは明らかである。明治11年から月1回の割合で、「月旦古泉会」のメンバーたちが集まって、順番に会主を務めて、古銭の話をしたりして、後に「月旦衆評泉譜」という同人雑誌を出していた。この「月旦衆評泉譜」は、今、国会図書館とデンマーク国立博物館にしかない非常に珍しい史料で、なぜデンマーク国立博物館にあるかといえば、例のブラムセンがメンバーになっていたからである。外国人メンバーはブラムセンだけであった。

ブラムセンは明治11(1880)年から13年までの2年間、「月旦古泉会」に参加して、40回以上、彼が所有していたコインを紹介して、それが後に「月旦衆評泉譜」に掲載されるようになった。また、ブラムセンは2回ほど会主を務めている。このような資料はどういう意味があるのかといえば、一つはブラムセンが日本人の古銭世界の専門家と話ができるほどその日本語能力が上達していることと、それから彼自身も古銭学者やコインのコレクターたちの仲間入りができていたことを物語っているのではないかと私は考えるのである。

「月旦古泉会」のメンバーに鬼頭久吉、それから畠山如心齋という人物もいて、鬼頭の方は古銭関係の業者で、ブラムセンが鬼頭から多くのコインを買い入れた記録がデンマークに残っている。ブラムセンが明治13年に日本を立つ直前に鬼頭からもらった手紙によると、鬼頭がお土産にブラムセン「先生」に珍しいコインを1枚プレゼントして、手紙の中でそれについての説明を付け加えている。同じ明治13年には、畠山如心齋が「ブラムセン大先生」にコインの拓本の書物を与えている。畠山如心齋という人物は、成島柳北に次いで「月旦古泉会」の中心人物の一人で、幕末に国学者として活躍して、物語文学、和歌などの著書を残したが、同時に幕府の学問所で論語の講釈もしていて、安政4(1857)年に幕府の命令で、蕃書調所で蘭学や英学を修め、後に徳川慶喜の前で蘭書や英書について講釈している。明治になってからは、彼は骨董品の世界でいろいろ活躍していたようである(渡辺刀水1986)。

若きブラムセンにとって、コインの研究がメインだったことは多分間違いないと思われるが、古銭のことを研究するに当たって、当然ながら日本、中国などの年号が分からないと駄目であるし、日本の伝統的な度量衡にも精通していないといけないわけである。そういうことは当たり前のことであるが、当時の日本在留西洋人はほとんど門外漢だったのではないだろうか。

ブラムセンの性格といえば、なるべく詳しく調べるタイプだったようで、年号や度量衡の問題も真面目に勉強したことは、彼らしいことと思われる。実は、アーネスト・サトウが明治7(1874)年に *Japanese chronological tables* という本を出しているが、それは日本についてだけで、例えば慶應元年元日が西洋暦で何年何月何日に該当するかという問題

は全然取り上げていない。また、内務省が明治6年から出した『太陽太陰両暦対照表』も、グレゴリオ暦が1582年以前には使用されていないことを全く無視したわけで、それ以前のデータが完全に間違っているということをブラムセンは指摘した。ブラムセンが作成した『和洋対暦表』は当時非常に性能が高くて、一番正確だったという評判だった模様である。英語版も存在していた。

外国人による日本研究が明治初期の居留地の世界で発足したことは、かなり広く知られている。当時の日本研究の場とえば、明治5年に設立された日本アジア協会、それから次の明治6年に設立されたドイツ東洋文化研究協会がメインだったと考えられる。ブラムセンは両方に参加していたようであるが、どちらかという、日本アジア協会のほうでの活躍ぶりが目立っている。入会してから彼は各会の発表後の議論に参加していたようである。

また同時に、当時の英字新聞に何回も自分の意見を書いた書簡を寄せたりしていた。たとえば明治10(1877)年には、アーネスト・サトウが提案した日本語のローマ字方式に対して、ブラムセンが反対した文章を新聞に寄稿している。これは何を意味するのかと言え、実は、サトウの提案によると、日本語のローマ字方式の基盤は日本語の発音ではなく、むしろ仮名遣いのつづりを基本にするべきだという主張で、同僚のイギリス人、ジョージ・アストン、バジル・チェンバレンなどが賛成している (*The Japan Weekly Mail*, 29 December 1877, p. 1193.)。

ただし、ブラムセンが指摘したように、そのようなローマ字方式だと非常に不便なローマ字のつづりになることが多く、例えば万葉集は「Man'efushifu」となる。つまり、明治初期の発音と全く関係がないローマ字のつづりになってしまうのである。それは確かに当時の仮名遣いを反映していることは反映しているが、結局役に立たないとブラムセンは主張している。彼は、いつも当時の発音を基にしたローマ字方式を使っていたのである。

ブラムセンの主張は、日本アジア協会の会合でいろいろ議論されたが、結局結論は出なかった。ただ、明治19(1886)年にアメリカ人宣教師のヘボンが編集した有名な和英辞書の第3版が出版されて、その際、ヘボンが初めていわゆるヘボン式のローマ字方式を導入して、それ以来、ヘボン式が一般的になって広く使われるようになった。言うまでもないことであるが、そのいわゆるヘボン式はアーネスト・サトウが提案した方式ではなく、むしろブラムセンが主張した発音を基にした方式であった。和英辞書が出た明治19年といえ、ブラムセンは既に他界していたが、彼が一生懸命主張したローマ字方式が主流になったことは事実である。

今まで見てきたように、岩倉使節団のデンマーク訪問は大北電信会社の事業と深い関係を持っていたが、その会社の技師にブラムセンという若いデンマーク人がいた。使節団がデンマークのことを調査していた時期は、ちょうどブラムセンの来日と重なっていた。デンマークが使節団にとって見知らぬ土地だったのと全く同じように、ブラムセンにとって日本も見知らぬ土地だったと言えるのではないだろうか。しかし、それだけで

は決して結論にならない。

ここで、少し回想をさせていただきたい。およそ20年前に『米欧回覧実記』全5巻の注釈つきの英訳が出版された。及ばずながら私がデンマーク、スウェーデン、ロシア、イタリアのことが書いてある第4巻を担当した。そのときに、なぜ使節団がアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスだけでなく、北欧、ロシアへも行ったのかと不思議に思っていた。しかし、翻訳をしながら、目的地に寄ってみると、それぞれ使節団の目的、反応、評価などが大分違っていたことが浮き彫りになった。ただ、その原文の翻訳には、私は非常に苦労した。それは、片仮名の人名の本名を探ることが大変であったからである。また、辞書に出てこない単語も沢山あり、久米の説明の間違ひもあったりして、それらを考えると、明治初期の日本人にとっても決して読みやすいものではなかったはずだ。

今、その読者の問題を考慮に入れながら、ブラムセンの業績を改めて考えてみたい。まず、なぜブラムセンが来日したかという問題を最初に取り上げるべきだと思われる。それは当然、大北電信会社の従業員として来日したのであるが、それは大北が日本をヨーロッパの技術的・経済的ネットワークに取り入れようとしていた事業で、ブラムセンはその事業に参加していた一員であった。日本側は、決してデンマークの電信ネットワーク参加に反対していたわけではないが、外国がそれを牛耳ることに對して躊躇していたことは、当然と思われる。ただ、ブラムセンは、おそらくそのようなことを少しも考えなかったであろう。彼にとっては、ヨーロッパの会社がアジアで好きなようにすることが当たり前だったのではないだろうか。

日本に到着したブラムセンは、すぐコインの研究に没頭したが、彼の知識追求姿勢はいろいろな問題を抱えていると私は思う。先ほど述べたように、ブラムセンは日本のコレクターたちと付き合いはいたが、そのほかでも日本の古銭書の写本や刊本を集めていた。そのコレクターたちから、ブラムセンが習ったことは非常に多いはずであり、また古銭商から知識をたくさん得たことも当然と言えるだろうが、ブラムセンは日本側の知識を一切認めていなかった。それどころか、活字になったブラムセンの論文の一つに、日本の古銭商は足りないところがあり、手に取るほどの価値はないとまで断言している(Bramsen 1880)。結局、ブラムセンは、日本人が蓄積してきた知識を咀嚼して、それを自分一人の研究成果として見せかけていたと言っても過言ではない。

その発言の裏に、当時のヨーロッパの科学的な古銭学のほうが優越しているという確信をブラムセンは持っていたかもしれない。しかし、ブラムセンがその科学的なアプローチを明治の古銭学者とシェアしようとした形跡は全くない。つまり、彼は協力的な立場をとってはならず、むしろ独善的な態度が見受けられるのではないかとと思われる。また、ブラムセンが「大先生」と呼ばれたのも少々おかしなことである。それは外国人に弱い明治初期の人々の態度が反映されているのか、あるいは彼が大抵の西洋人に比べて日本語能力や古銭の知識が優れていたことを物語っているのか、それとも古銭学への科学的

なアプローチが評価されたのか、いずれか不明なのであるけれども、ブラムセンは、日本人の蓄積してきた知識なしでは、それほど古銭学者として大成できるはずがなかったと私は考えるのである。

いずれにしても、当時の在日西洋人日本学者が、ほとんど同時代の日本人の援助や知識に頼っていたことを全然認めていないことは共通しているところである。このようなヨーロッパ中心の知識追求姿勢は、既に伝統が長く、18世紀にスウェーデン人植物学者のリンネも、ヨーロッパの植物学の分類を世界に当てはめようとして、ヨーロッパ人を各国へ派遣して植物を収集し、後にヨーロッパの植物学の資料にしていたことは有名であるが、その大事業の中に各地の植物学の伝統や知識を含める余地が全くなかったということはよく知られている。あくまでもヨーロッパ人の事業だったわけである。しかし、ヨーロッパ中心の事業になっていた植物学と違って、初期の西洋人日本学者の業績は、あくまでも日本学、あるいはいわゆる東洋学という部門から逃れることは決して簡単ではなかった。まず西洋での読者数が少なく、また西洋の学問にはほとんど影響を及ぼしていなかったと言わなければならない。

それはブラムセンの古銭学だけではなく、同じようにアーネスト・サトウなどが、世界の印刷の歴史が15世紀のグーテンベルクから始まるどころか、それ以前に中国、朝鮮、日本などに印刷の事業が既にできていたことを指摘しても、ヨーロッパ中心の定説がなかなか動かなかったこととも通じている。結局、海外で蓄積された知識は西洋人の知識系列に入りにくい面があって、その知識系列に挑戦しようとしても、海外の知識は無視されたり、例外と除外されたりする運命にあった。古銭にしても印刷にしても文学にしてもヨーロッパ中心の知識系列は、アジアの知識をなかなか受け入れようしなかったことは周知のとおりだ。日本人の知識を認めなかったブラムセンであるが、彼の業績がヨーロッパでほとんど無視されてしまったのは皮肉というか天罰というか、とにかく当時の西洋人による日本学の日本人に対する態度、またヨーロッパ中心の知識系列の排他性も同時に浮き彫りにしてくれるのではないかと私は考えるのである。これは19世紀の話であるが、ある意味で日本学をグローバル化する事業はまだ継続中と言わなければならない。そうした意味において、これから日文研に期待するところはまだ大きいと思われる。

## 参考文献

川野辺富次「英国公使との事前取極による伝信機条約——大北電信会社ケーブル陸揚げの問題」『交通史研究』第30号、1993年。

ピーター・コーニツキー「ヨーロッパ人による日本古銭と古銭書の収集——江戸時代を中心として」『出土銭貨』第23号、2005年。

鈴木良隆「初期三菱における外国人について」『三菱史料論集』第1号、2000年。

- 長島要一「大北電信会社の日本進出とその背景——シッキ公使の来日」『日本歴史』567号、1995年。
- 長島要一『日本・デンマーク文化交流史——1600-1873』（東海大学出版会、2007年）。
- 三菱社史刊行会編『三菱社誌』（東京大学出版会、1979～1982年）。
- 『明治屋百年史』（明治屋、1987年）。
- 渡辺刀水「畠山梅軒」『渡辺刀水集』第二巻所収（日本書誌学大系 47/2）（青裳堂書店、1986年）。
- Bramsen, Bo. *Bogen om Luis Bramsens efterkommere: en familieoversigt gennem merer end 100 aar* ([Copenhagen]: privately published, 1949).
- Bramsen, Bo Viggo. *Luis Bramsen. En københavnsk forsikringspioner. Forsikringsaktieselskabet Nye Danske af 1864. 100-ans jubileet* ([Copenhagen: author, 1964]).
- Bramsen, William Sophus. *The Coins of Japan; Part I The copper, lead and iron coins; reprinted, with modifications, from the Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* (Yokohama: Kelly & Co., 1880).
- Kornicki, Peter, 'European japanology at the end of the seventeenth century', *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 56 (1993): 502-524.
- Kume, Kunitake. *The Iwakura Embassy 1871-73: A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europe*. Edited by Graham Healey and Chushichi Tsuzuki, vol. 1-5 (Matsudo: The Japan Documents, 2002).
- Nagashima Yōichi, *De dansk-japansk kulturelle forbindelser 1600-1873* (Copenhagen: Museum Tusulanums Forlag, 2003).
- Nagashima Yōichi, *De dansk-japansk kulturelle forbindelser 1873-1903* (Copenhagen: Museum Tusulanums Forlag, 2012).

# ハンチントン『文明の衝突』再読

——岩倉使節団 150 年と日本文明の行方を考えるよすがに

瀧井一博

これからこのシンポジウムを企画した趣旨を私から説明したい。タイトルには、「ハンチントン『文明の衝突』再読」ということで、「岩倉使節団 150 年と日本文明の行方を考えるよすがに」というサブタイトルをつけている。サミュエル・ハンチントンという名前を聞いて聞き覚えのある方もかなり少なくなっているのではないかと思う。一時期、ハンチントンの『文明の衝突』という本は、大変持て囃され、かつ物議を醸した。なぜそれをまたわざわざ引っ張り出してくるのだという思いの方も多いただろう。

その前に、まず岩倉使節団 150 年をいまなぜ取り上げるのかについて述べたい。いわゆる岩倉使節団とは、1871 年 12 月 21 日に横浜を出発し（当時はまだ太陰暦で、日本は明治 4 年の 11 月 10 日だったが、行っている間に西洋暦に切り替わった）、1873 年 9 月 13 日に帰国するまで岩倉具視を筆頭とする錚々たる明治政府の要人たちが、1 年半以上も欧米を見て回るというグランドツアーとして歴史上有名である。その 150 年の節目の年に我々はいるわけである。

にもかかわらず、どうも私が見る限り、ほかに岩倉使節団絡みのイベントは行われていないようなのだ。記念ムードは決して高まっていないように思われる。その理由は何であろうか。以下三つほどその理由を述べてみたい。まず一つ目には、すでに研究がやり尽くされたからではないかと考えられる。だが、そうではないということが、先ほどのコーニツキー先生の講演で証明されているので、ある意味やる気の問題ではないかと思われる。

二つ目は、研究の第一人者が今いないのではないかということである。それを考えれば、やはり先日亡くなられた芳賀徹先生の存在は大きかった。芳賀先生がいらっしゃったことで、岩倉使節団の研究は大きなステップを刻むことになったのだと改めて感じる。その芳賀先生をお迎えしていろいろ書籍を出したり、本シンポジウムとは別に岩倉使節団 150 年のシンポジウムを挙行了たのが、この場にもおられる米欧亜回覧の会であった。芳賀先生は、コロナ禍のまさに直前にお亡くなりになった。この場を借りて、本センターの名誉教授でもあった芳賀先生に改めて哀悼の意を表したい。

三つ目に、盛り上げムードの弱まりが考えられる。私は実は明治維新 150 年の年（2018 年）にも、まさにこの日文研でかなり大きな国際シンポジウムを開催した。そのときは

それを盛り上げようという機運があった。当時の安倍晋三総理が山口県のご出身ということもあって、内閣府で記念の行事を実施しようというかなり積極的な動きがあり、私もそれで一度講師として内閣府の勉強会に招かれたことがある。

ただ、明治150年記念については尻すぼみに終わったという印象を抱かざるを得ない。もしかしたら、岩倉使節団の研究というものも同じような轍を踏みつつあるのかもしれない。臆測だが、その中にやはり1990年代からの失われた10年、20年、30年、Lost Decadesと言われる日本の現状が影を落としてはいないだろうか。私より後の世代にとっては、明治の日本人はすごかった、偉かった、日本は高度成長で奇跡の復興をなし遂げたとかいった物語というものが、どこか空々しく響いたりはしていないだろうか。

そのような中で、なお岩倉使節団の150年を考えてみるということの意義はどこにあるのか。また、さらに言えば、21世紀の日本で、岩倉使節団を考えることにはどのような価値があるのかということについて、ぜひお知恵を拝借したいと考えている。

この企画を考えた時に、私の大学院時代の恩師である京都大学名誉教授の野田宣雄先生の言葉が念頭にあった。野田先生は2020年の年の瀬にお亡くなりになり、それを受けて、先生の遺稿集を門弟たちで出版した。野田先生のご専門はドイツ史だが、私が警咳に接した1990年代からずっとおっしゃられていたことが、今になって非常に切実に訴えかけてきている。

一例をあげよう。野田先生によると、日本人というのは明治以降、民族的、文化的な同質性の高い国民国家の形成にあまりにも見事に成功を取めたために、グローバル化の時代にあっては、内向きの閉鎖的な社会を形成して適応力を失っていくおそれがある、という。そして、宗教の代用物としての国民国家の正当性が低下していけば、それに代わる国民よりも下のエスニーという別の帰属団体の受皿が用意されていないだけに、日本人がアイデンティティーの危機に陥る危険性も高いと書かれていた。

このように論じる際に、野田先生が非常に意識していたのが、ハンチントンだった。ハンチントンの本が出たときに、これを非常に高く評価し、意識され、論壇などでも紹介をされていた。野田先生自身が「ハンチントンの罨」という言葉を使っているが、ハンチントンは次のようなことを述べている。

まず、ハンチントンの文明の分類によると、日本は独自の単一的な文明であるとされる。他の中華文明、ヒンドゥー文明、イスラム文明、西欧文明、スラブ文明、ラテンアメリカ文明、アフリカ文明、それらとともに、日本文明も独立の単一の文明圏だと捉えられている。ただし、それは必ずしもよいことではない。日本は最も重要な孤立国であるというのだ。日本の独特な文化を共有する国はない。そのような日本の孤立の度がさらに高まるのは、日本文化が高度に排他的で、広く支持される可能性のある宗教、キリスト教やイスラム教、あるいはイデオロギー、自由主義や共産主義を伴わないという事実からであり、そのような宗教やイデオロギーを持たないために、他の社会にそれを伝えて、その社会の人々と文化的な関係を築くことができないのである、としている。ハ

ンチントンは日本文明に対して非常にペシミスティックな診断を下していた。

興味深いことに、このセンターを設立した初代所長の梅原猛先生が、1999年にハンチントンを迎えたシンポジウムが東京新聞主催で行われた際に、ハンチントンと対談をされている（『東京新聞』1999年9月19日）。シンポジウム「21世紀「日本文明」の行方」という、このシンポジウムとも重なり合うようなテーマであるが、そこでハンチントンと梅原先生との間には非常に興味深いやり取りがあった。

幾つかの論点をピックアップしてみたい。日本とは孤立した国で、日本文明とは日本国と合致しているとのことである。ほかの文明は、どれも幾つかの国によって構成されているのであるけれども、日本文明は日本という国民国家とイコールであり、ほかに文明を構成する国はないとされている。そういう意味でもひとりぼっちの国だということ、仲間がいない。そのようなことが論じられている。

これに対して、梅原先生は、やはり日本の文化、特に自然観というもの、これは近代文明を克服する新たな価値となり得るのだと応酬をされている。日本とは、言ってみれば西洋のことも、そして東洋のことも知っている。そのような希有な立場にある。これから中国やイスラム、インドが台頭して、欧米文明圏とそういった様々な文明圏との軋轢が増していく中であって、日本は文明間の仲立ちができるという、そのような主張もされている。そのためには、やはりこのグローバル社会というものは、実は多文明時代に入っていくということ、その中であって、日本が閉じ籠もるのではなく、何を外に向けて発信できるかということが重要になってくるという、そのようなやり取りが行われた。

なお、ハンチントンによれば、日本が今後21世紀に歩いていく選択肢としてはおそらく四つあるだろうと述べている。一つ目は、日米関係を強化する道。二つ目は、むしろ日中関係を強化する道。三つ目は、単独で孤立を貫くという道。四つ目は、むしろもっと積極的に地域に打って出て、東アジアのリーダーとなっていく道ということである。ただし、ハンチントンはそのいずれもリスクがあるとしている。

まず日米関係を強化するといっても、日本とアメリカとの間には大きな文化的な違いがあるので、なかなかそれは容易ではないとのことである。二つ目の日中関係の強化は、日本が中国との関係を強化すれば、おそらくアメリカも中国との関係を強化していくことになるため、米中間で日本は埋没していく危険性がある。三つ目は、言うなれば東アジアのスイスになれということである。だが、それはスイスよりもむしろガラパゴスになっていくという危険性もあるとのことである。これに対しては、「ガラパゴスでも、いいじゃないか」という、開き直りの立場もあり得るかもしれない。四つ目は、東アジアのリーダーになるというわけだが、それが大きな惨禍をもたらした経験を日本は持っている。

しかし、いずれにせよ、この中でおそらく日本に課せられた文明的な課題というものがあるとすれば、やはり孤立というか、そのユニークな位置づけというものをでき

るだけ、むしろポジティブに意味づけていくことができないかということであろう。グローバル社会の中で日本は何ができるかということを考えて、そしてそれを発信していくということが、21世紀の日本の課題ではないかということ個人的には考えている。

さて、以上のことを踏まえて、日文研の課題とは何であろうか。今まで培ってきたものを鑑みて、日文研に何ができるかということで、我々はこれまで国際日本研究のコンソーシアムをつくってきた。これからそれをさらに海外にも展開させていく。それと同時に、国際日本研究というもののイメージや在り方、コンテンツについても発信していきたいと考えている。

そのような中で、それでは国際日本研究というもののコンテンツや方向性とは何であるかということ、これまで日文研の所内でもいろいろと議論してきた。もちろん初めからそれを確定することは本末転倒である。研究を進め、その果てにある種のイメージをつくっていくということが本来の姿であろう。ただ、ほんやりとしたキーワードというものが浮かび上がってきている。それは「接合域と多面性」である。

我々はこれを基に、日本の文化とは決してハンチントンや野田先生が言われていたように、最初から非常に均質で、一体性の高いものではなかったのではないかと考え直してみたい。もっとダイバーシティに富んで、様々な異質なものをつなぎ合わせる、そういうダイナミズムがあったのではないか。そのような問題意識で、国際日本研究の新しい課題と方向を考えてみたい。そのためにコンソーシアムにおいて、学際的、国際的な共同研究を探求していきたい。

このように考えれば、日本研究に希望がないわけではないのではないかと考えている。明治維新の150年があまり盛り上がらなかったということは先に申し上げた。しかし、コロナ禍の真っ最中の2020年の11月、私はあるウェビナーに招待された。それは、日本の議会制130周年を考える国際シンポジウムであった。主催は、ドイツ日本研究所とタイのチュラロンコン大学で、オンラインの国際シンポジウムが開かれた（その詳細については、以下のサイトを参照。<https://www.dijtokyo.org/ja/event/symposium-on-the-occasion-of-the-130th-anniversary-of-the-opening-of-the-japanese-parliament/global-views-of-japanese-parliamentarism-in-the-late-19th-and-early-20th-centuries/>)。

日本の国内においては、日本の議会制130周年を考える、記念するという試みがあったようには、少なくともアカデミズムの中でそのようなものがあったとは、私は全然聞いたことがなかった。しかし、それを考えるシンポジウムを海外の研究者たちが開催してくれたのである。

興味深かったのは、参加者はドイツ、タイ、中国、フィリピン、インド、ポーランド、エチオピア、イギリスなどの海外の研究者で、しかも日本研究をしている人たちばかりではなかったことである。ほとんどの人は日本を専門にしているのではなく、政治思想や議会制度の研究者で、なぜ日本のような国で、借り物であったはずの議会制度というものを取り入れて、それが130年も続いてきたのか、それを考えてみたいというシンポ

ジウムだった。

その議論の中で、エチオピアの研究者から、「なぜ日本はもっと自分の経験を世界に向けて伝えないのか」と言われた。このように、日本の歴史的経験やそこで得た知識を欲している国や人々は、実は世界のあちこちにいるのではないかと思ひ直すきっかけになった。

岩倉使節団がその最たるものだと言えるが、日本の文明とは、これまで懸命に受容する文明、アクセプトする文明と見なされてきた。しかし、これからは需要ある文明になっていかなければならないのではないか。日本へのニーズというものは何なのかということを探し出す、それが21世紀の岩倉使節団の役割なのではないかと思った次第である。

### 参考文献

- 泉三郎『堂々たる日本人 知られざる岩倉使節団——この国のかたちと針路を決めた男たち』（祥伝社、1996年）。
- 野田宣雄『「歴史の黄昏」の彼方へ——危機の文明史観』（千倉書房、2021年）。
- 芳賀徹『外交官の文章——もう一つの近代日本比較文化史』（筑摩書房、2020年）。
- 芳賀徹『文明の庫Ⅱ——夷狄の国へ』（中央公論新社、2021年）。
- サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』鈴木主税訳（集英社、1998年）。
- 米欧亜回覧の会、泉三郎編『岩倉使節団の群像——日本近代化のパイオニア』（ミネルヴァ書房、2019年）。

## 岩倉使節団の意味を問う

小野博正

### 「米欧亜回覧の会」とは

前段で当会の案内として、PRをさせていただきたい。当会はNPO法人の「米欧亜回覧の会」と言い、1996年の発足時は久米邦武の『米欧回覧実記』を読む会なので、「米欧回覧の会」と名乗っていた。2004年にNPO法人になる際、使節団は欧州だけでなく、帰路アジア、特にインドやマレーシアなど西洋列強に植民地化された地域をも見た、また日本は中国に学んできたのに、中国人が奴隷のように使われている姿を見た、こういうことがかなりの衝撃だったので、「米欧亜回覧の会」に改めたという。

「米欧亜回覧の会」には四つの主要部会がある。一つ目は『実記』を読む会、既に3回転ぐらい、20年の間に精細に読んできている。その後、英訳された『実記』を読む会。10年間かけて精読し、その後、いろいろな伝記に取り組んでいる。アーネスト・サトウ、それからハリスの日記、フルベッキの伝記、それからつい最近、ミッドフォードの回想録を扱った。

三つ目は、私が属している歴史部会。近現代史を中心に岩倉使節団を考えることを目指し、外部から講師を呼んで会を重ねてきた。近年は特に岩倉使節団関連の人物論が中心。そしてグローバル・ジャパン研究会。以前は「近未来部会」と呼んでおり、政治、経済、あらゆる現実的な問題を、外部の講師を招いて討論する部会である。

また、i-cafe-music & lecture という会もある。女性ピアニストの入会を見たので、毎回ピアノがある会場を借り、泉理事長が作ったDVDで各国の映像を流し、その国の歌などをオペラ歌手に歌唱してもらい、あるいは大使経験者に来てもらって話をうかがうという非常に楽しい会となっている。会員を増やそうとしているが残念ながら増えてはいない。またZoom meetingが始まってから、Zoomで歌うというi-cafe-singersという合唱部も立ち上がり、平均年齢80歳が男性コーラスをやっている。国内外ツアーも挙行しており、ベルリン、ロンドン、イタリア、上海にも足を伸ばしてきた。上海の時は会員の塚本さんが、上海万博の日本代表だった経験を頼りに出向いた。国内では、薩長関係などを歴史に関連づけツアーを開催してきた。講演会は5年ごとに開催し、加えて毎年2～3回ベースで有名な方々、日文研の関連では芳賀徹さん、ドナルド・キーンさん、山折哲雄さん、川勝平太さん、さらに五百旗頭真さん、また瀧井先生にも講演いただいたこ

ともある。

### 「米欧亜回覧の会」が今取り組んでいること

現在は使節団のデータベースを作っており、HP上に掲載している。1日ごとに久米実記と木戸（孝允）日記、それから当会メンバーには富田命保と近藤昌綱の子孫である方がおり、その精細な富田の日記をも並置して、「何月何日、久米は、木戸は、そして富田はこういうことを書いている」というようなデータベースを作成中である。特に富田命保は出発前の歓送会から、帰朝ののち天皇に報告するまで克明な記録を残しているが、その日記は未公開だったので価値は大きい。ぜひ当会のHPをのぞいて参照していただきたい。

お招きした外国の研究者としては、Pantzerさんとか Ivan Hallさん、Silvana de Maioさん（イタリアの女性研究者です）それから、Cortazziさん。Martin Colcluttさんは、実記のアメリカ篇の英訳担当者。それから、日文研にもいらしたハーバード研究員の銭国紅さん、さらに Brownさんや William Steele先生などにも講演をお願いした。

当会の25周年と岩倉使節団の150周年を併せて、Zoom上で、2022年1月から11月まで毎月ミニシンポと称した企画を開催した。実記を読む会では「米欧亜632日の旅」と題して1年間で実記の全部を網羅し、歴史部会では1年間「岩倉使節団の意味を問う」というのを考えてきた。さらに、グローバル・ジャパン研究会では、財政、外交、軍事、技術、文化の専門家も招いて講演会を開催した。その後、かねてから明治神宮から共同開催の提案があったので、「明治日本のパイオニアたち——岩倉使節団が見た世界」という講演会を10月29日に開いた。Zoomで発信した。岩倉使節団を知らない一般向け企画という前提での実施だった。当会の25周年は、昨年12月3日、Zoomで「米欧亜632日の旅」と「岩倉使節団の意味を問う」という歴史部会と実記を読む会とが担当の企画を開催している。

次に当会関連の書籍を紹介したい。*The Iwakura Embassy, 1871-73*——これは大変大部な英語版実記。コーニツキーさんは第4巻をご担当だった。それから、実記の現代語訳（『現代語訳 特命全権大使 米欧回覧実記』）。水沢周さんという当会会員が作り、完成の2、3年後に亡くなられたため遺書のようになった。全5巻本、普及版もある。5周年記念で刊行の『岩倉使節団の再発見』（思文閣）、そしてDVD。10周年のときは『世界の中の日本の役割を考える』（慶應義塾大学出版会）、さらに15周年では会員限定での小論文集。20周年の時は『岩倉使節団の群像』（ミネルヴァ書房）を刊行した。図書館には、ほとんどのものはそろっているだろう。

代表の泉三郎さんの著作については、私が代わって紹介したい。岩倉使節団絡みの本と、茶道の心得があるためお茶の本、それから渋沢栄一の若い頃、伊藤博文の若い頃の本なども出しておられる。10冊以上はあろう。またDVDもあり、上映すると大体3時

間ぐらいかかる長編。主に泉さんが何回か回覧した後、追いかけて撮った写真を基に構成している。以上が当会の説明になる。

### 使節団の事蹟を教育の素材に

次に「岩倉使節団の意味を問う」というテーマに転じたい。私の願いは、使節団の事蹟をこれからの若者に考えてもらう、教育の素材にしてほしいということに尽きる。

私にとっての「岩倉使節団の意味」は、遣隋使・遣唐使の派遣で古代日本が当時最先端の中国文明を自家薬籠中のものにしていったごとく、明治の使節団が西洋近代を丸ごと摂取して、その日本化に見事成功したことで、現在、我々の立ち位置があるということを確認すること。必ずしも賛美だけではない。そこには何がしかの影の部分もあったと思われる。今問うべきは、使節団派遣の時代背景に思いをいたして、彼らを選んだこの国の形が今の我々に何を語るかを検討し、その光と影をしっかりと見つめた上で、日本の将来、未来世代に何を我々が引き継ぐべきか、を考えることであろう。近年、西洋近代思想もその普遍性に揺らぎが見え始めており、現代は正解のない時代に突入したと言われている。正解がないゆえに問いを発する人材が求められている。

今こそ西洋近代の文明の導入の基となる岩倉使節団に立ち返り、それを材料として次代を担う中高生が議論し、考え、学ぶという力を鍛えられないか。昨年から高校では、「歴史総合」が始まり世界史と日本史を総合して、私たちが生きる今の世界がなぜどのようにつくられてきたかを生徒が自らの手で学ぶことを掲げている。歴史のIFを様々な角度から考えることが、思考力の養成にもつながると私は考える。

### 使節団の背景を顧みる

岩倉使節団の背景について説明したい。岩倉使節団の目的は三つあり、一つは条約改正の聘門の礼と、国書の提示。それから、条約改正の予備交渉。三つ目が欧米各国の制度・文物を調査すること。各省の理事官が事由書でこういうことを調べてきなさいとかなり細かく述べてある。帰朝後は、「理事功程」という報告書を求められた。物見遊山記録でなくて、久米実記はものすごく精密な記載を旨とした。各理事官がものすごく勉強している中へ帰ってきたという事実が大切だろう。その結果生まれたのが大日本帝国憲法であり、皇室典範であり、教育勅語であり、軍人勅諭であり、それから条約改正という成果ということになる。

岩倉使節団の前に、幕末日本の使節団が派遣されている。また、当時の清朝中国は、アヘン戦争で散々な目に遭っていたが、その中国も大体30人ぐらいの使節団を出していた。パーリンゲームというアメリカの駐清公使経験者が自ら発案し団長となった。久米実記と似たような報告書が出ているはずだが、清国があまり関与していなかったので、

国政への効果がなかったと言えよう。岩倉使節団が求めた当時の西洋近代文明をこうやって概観してみると、国民国家の勃興時期だったことがわかる。ドイツもイタリアも、使節団が行った2年ぐらい前に独立したばかりだった。フランスは普仏戦争で負けてしまった直後だった。資本主義の勃興期であり、産業革命以降、科学主義とか進歩主義もつながり、「資本論」が書かれたのが、岩倉使節団が行くちょっと前ゆえ、それが重商主義とつながった。帝国主義の時代であり、帝国主義でないと一流国と認められないという感じだった。

当時は、世界が丸く一つになった時代だった。鉄道、電信、郵便、それから郵便汽船、これがつながって、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』という小説が出た時代でもあった。日本では、上海と長崎間で電信がつながり、万国郵便制度に加入したのも、電信会議に出席したのも、この前後にあたる。

### 漸進主義こそ一番の特徴

漸進主義こそ、岩倉使節団の一番の特徴だった。また、帰国したのちのキーテーマでもある。久米邦武も、「漸ヲ以テ進ム、之ヲ名ヅケテ進歩ト言フ」と書いている。回覧した時期の西洋は、普仏戦争でフランスがドイツに敗れ、かつパリ・コミューンで民意が暴走した混乱の経験から、人間の持つ天賦の自由とか平等の思想——自然法論と当時は言っていたようだ——に懐疑的な、反省の時期に当たっていた。したがって、欧米側では、自由民権運動とか議会を早期に開設するというようなことを忌避するような言論が顕著に見られ、自然法論から歴史法論への過渡期にあった。殖産興業をまず優先せよ、とフランス法学者のブロック博士は使節団に言ったし、ドイツではグナイスト博士が同様のことを伝えた。「憲法制定をあまり急ぐな、じっくりと考えた上で、日本の歴史に合った自前の憲法を作るように」と説得され、納得した使節団は帰国の途についた。

一方、留守政府も素晴らしいことをいろいろ行なっていた。明治の三大革命と言われている徴兵制と地租改正、それから学制、この三つは全部留守政府が成し得たものであり、2022（令和4）年はその全ての150周年にあたった。鉄道の開設、富岡製糸場、国立銀行条例、太陽暦への変更、沖縄の日本国への所属、こういったこともこの年。戸籍が初めて出来たのも、郵便法の制定も、この年。こういうことすべては、実は、留守政府が成し遂げたことというのは、銘記しておいてよいだろう。

### 岩倉使節団は学際的総合知の先駆

なお、最後に一言加えておきたい。ゴーギャンが最後にタヒチで描いた絵の片隅に書いていた言葉、「我々はどこから来たのか。我々は何ものか。我々はどこへ行くのか」——これを念頭に置いて歴史を考えるのがよい、というのが私の信条である。また、歴

史を考えると、保阪正康さん提唱の77年周期でという観点は、非常に分かりやすいのではないか。岩倉使節団派遣から77年は、敗戦までの77年でもある。そして、敗戦から昨年までが77年。それから、今年から77年後が2100年、つまり22世紀の直前までが、また77年。今年からの77年をどうするかということが、我々に問われているのではないだろうか。

梅原猛さんは、川勝平太さんとの対談で日本文明への回帰に触れた際、山川草木悉皆成仏、を挙げている。そこには利他の思考が読み取れるのではないか。以上を踏まえ、これからは一分一秒を争う利己的な競争社会から脱出して、利他の精神を世界に広めることを、そしてそれが梅原精神を現在に生かす道であろう、と伝えたい。専門知は大切だが、専門知ばかりに閉じ籠もって総合知を求めなければ、世界への貢献は不可能だろう。混迷な時代の今こそ、学際的な総合知の発言が求められる。岩倉使節団はこういうことをも考えさせてくれる。

## 参考文献

- 久米邦武編著、水沢周記・注、米欧亜回覧の会企画『現代語訳 特命全権大使 米欧回覧実記』1～5巻（慶應義塾大学出版会、2008年）。
- Kume, Kunitake. *The Iwakura Embassy 1871-73: A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europe*. Edited by Graham Healey and Chushichi Tsuzuki, vol.1-5 (Matsudo: The Japan Documents, 2002).
- 米欧回覧の会編『岩倉使節団の再発見』（思文閣、2003年）。
- 米欧亜回覧の会編『世界の中の日本の役割を考える——岩倉使節団を出発点として』（慶應義塾大学出版会、2009年）。
- 米欧亜回覧の会、泉三郎編『岩倉使節団の群像——日本近代化のパイオニア』（ミネルヴァ書房、2019年）。
- 泉三郎『堂々たる日本人——知られざる岩倉使節団』（祥伝社、1996年）。
- 泉三郎『岩倉使節団という冒険』（文春新書、2004年）。
- 泉三郎『岩倉使節団——誇り高き男たちの物語』（祥伝社、2012年）。

# 岩倉使節団 150 年に寄せて

——米欧亜回覧の会が取り組んできたこと

泉 三郎

## 『回覧実記』に「文明」を読む

このすばらしい舞台にお呼び下さったことにまずお礼申し上げたい。「日本文明の再構築」というタイトルでシンポジウムを開催できる場所は、日本では日文研以外ないのではないか。今回は「モアモア文明から適適文明へ」——英語で書くと、How to live well with modern civilization ——これでお話したい。

最初に、150年前の西洋文明と日本文明について考えてみたい。150年前の西洋文明を見たのは岩倉使節団、そしてそれを記録したのは久米邦武。よって久米邦武の文章の中から幾つかを拾い上げて紹介したい。まずアメリカへ渡り、西部劇の舞台まで足を伸ばした。大陸横断鉄道で進んだのだが、それは文明の発展段階を少しずつ見ていくような感じだったという。終着のニューヨークまで行ったらすごい文明を目の当たりにし、久米は仰天した。「いやいや、イギリスへ行ったら、もっとすごいよ」と聞かされて、実際行って見たところ本当にすごい。イギリスには123日も滞在した。この長期滞在の間、イギリスの産業革命以降、どういうふうな段階的進行があったかというのをつぶさに観察し、理解するに至った。久米はこう書いている——「当今、ヨーロッパ各国皆文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ、貿易盛ンニ、工芸秀デ、人民快美ノ生ニ悦樂ヲキワム」。「悦樂」という言葉を使っていることに注意したい。この状況を目撃すれば、欧州各国の進展は段階を追って積み重ねてきたという経緯が分かるという。そしてその状況をさらによく見ると、大体50年から40年前は何もなかったことに気づくに至った。従って、日本とイギリスの差は、40年ぐらいではないかという思いに及んだ。わずか40年にすぎないとは、「よく言ったものだ！」という感じを私は持つ。

## 「巴里ニアレバ人ヲシテ愉悅セシム」

次いで使節団が向かったのは、フランスだった。フランスは使節団に好印象を与えたようだ。久米が書いているところによると、フランスには60日滞在したが、ほとんどパリにしかいない。パリを十分楽しんだのだろう。宿は凱旋門に面する3階建ての瀟洒な

建物、元トルコの公使館だったところ、そこをゲストハウスとして貸してくれた。久米は窓から見て、「景色爽快ニシテ、絵ノ如シ」と表現した。街を回覧すると、行き交う人々は楽しそうに思えた。パリは楽しそうに遊んでいる——至るところにレストランがあり、カフェがあり、それでシャンゼリゼの界限には音楽堂があって、軽快な音楽が流れている。ルノワールの絵のような、ああいう風景のところへ彼らが入っていく。ちょうどクリスマスの時期に当たっており、そういう雰囲気の中へ入っていく。久米は「パリは天国のようだ」とも言っている。久米の表現ではあるものの、彼一人の思いではなく同行者もそう思ったに違いないだろう。

ここで文明についての記述を少し紹介したい。文明が進むとは、食衣住の順序で豊かになっていくこと。そして、求める力点が、「量」から「質」に変わっていく。また、より贅沢に美的になっていく。こういうふうに久米は表現している。またこうも書いている——「倫敦ニアレバ人ヲシテ勉強セシム、巴里ニアレバ人ヲシテ愉悦セシム」。ロンドンの街は繁栄の頂点にあり、喧騒甚だしく、馬車もバーッと通る。当時地下鉄がすでに完成していたし、高架の鉄道も走っている。人が歩いているスピードが速い。足が地につかないほど速いと久米は書いている。ところが、パリへ来ると、みんなゆったりしている。パリへ来ると、何か離れ座敷に来たような雰囲気になったのだらうと思うのだが、それを一言で「倫敦ニアレバ人ヲシテ勉強セシム、巴里ニアレバ人ヲシテ愉悦セシム」。勤勉なロンドン、その一方、愉悦のパリ、この表現が実に素晴らしい。

### 訪日外国人が見た幕末・明治日本

視点を变えて、当時の日本を外国人はどう観察したかについて考えてみよう。渡辺京二さんが『逝きし世の面影』にいろいろ書いているのが参考になろう。幾つか紹介してみたい。米国のハリス総領事が下田界限の風景を次のように描写している——「人々は楽しく暮らしており、食べたいだけ食べ、着物にも困っていない。それに家屋は清潔で日当たりも良く、気持ちが良い。世界のいかなる地方においても、労働者の社会で下田におけるよりもっと良い生活をしているところは見ることがない」。ハリスは元来商人ゆえ、あちこち見てきており、その体験でこう話している。1872年に法律顧問として来日したブスケの観察は次のようなものだった——「(日本人は) 必要なものは持つが、余計なものを得ようとは思わない」。また、仕事をしている間にもたばこを吸ったり、しゃべったりしていて、気楽にやっている。一家を支えるにはほんのわずかな所得でいい。こういうふうにはブスケは見ても書き記した。

少し時代を下って1889年(明治22年)の事例は、英国の詩人でエドウィン・アーノルド。この人は随分歓迎されたらしくて、歓迎会の席上でこんなことを言っている——「日本の景色は妖精のように優美で、美術は絶妙であり、その魅力的な態度、礼儀正しさは、もう天国あるいは極楽に最も近づいている国である」。ちょっと褒め過ぎに思えるが、で

もそういう感想をアーノルドに持たせた証左になっていよう。「あなた方（歓迎会参加の日本人）の文明は、隔離されたアジア的生活の落ち着いた雰囲気の中で育ってきた文明であり、競い合う諸国家の衝突と騒動の中に住む我々欧米人は、命をよみがえらせるような安らぎと満足を日本は与えてくれる」とも書き残している。

### 「モアモア」から「適適」へ

ここで岩倉使節団から150年後の日本に目を転じてみたい。現在の令和の日本を、みなさん、どう思うだろうか。私には、もう20～30年前から極楽と思えるくらいだ。次から次へといろいろな新しいものが生まれているけれども、そんなもの要らないというか、なくても今あるものだけで十分幸せになると思うくらいの日々を過ごしてきた。その20～30年間でいろいろ新しいものを作り——スマホはその最たるもの——こんなに豊かで便利で、コンビニへ行ってもショッピングモールへ行っても、商品があふれているではないか。それに有形の「もの」だけでなく「情報」も。テレビを見てもスマホを見ても、あふれるように情報が出てくる。一流の音楽、スポーツ、旅の番組やら多種多様だ。オペラ好きにはオペラ、歌舞伎を観ようと思ったら歌舞伎。しかも無料同然。こういう意味で、考え方にもよるけれども、もう豊かさの度が過ぎているという感じさえ私は抱いている。

何事もそうだが、「過ぎたるは及ばざるがごとし」である。これは孔子の言葉だと言われており、度を過ぎたら悪になってしまう。豊かさが溢れる現代の世を目の当たりにして、何かもっともっと、モアモア (more & more) の代わりになる言葉はないかなと思っ

ていて思いついたのが、「適」という語だった。

やや極言するならば、文明というものは道具であろう。どんな大きくても小さくても、ソフトであれハードであれ、極端に言えば宗教でさえ道具、哲学も道具、と考えられよう。人間の原始的な状態と今とを比べてみると、原始的な状態ではそのような道具は何もなかったけれども、古代の人もそして中世の人も結構楽しく幸福に暮らしていた。なので、極端に言うとも文明などなくとも——あったほうがもちろんいい！——ほどほどにしておいたらどうなのか、と。「適度」というものがあるであろう。ここに、私が「適」という言葉を提唱する起点がある。また、幸福についても、幸福って一体何だろうか。さまざまな人が幸福度を測るのにいくつもの項目を挙げ、点をつけ、トータルして評価する。けれども、もっと直感で体感する幸福の感覚があるはずだと私は思う。

中国の四千年の歴史、あるいは五千年の歴史を眺めてみるならば、その中で抽出されてきた幸福の条件は、五福と言って五つある。中国では福祿寿と言う。祿はマネー、寿は健康、ヘルシーにつながっている。一方、アメリカ人はどう考えているか。アメリカにはギャラップ (Gallup) の調査、アンケートがある。幸福の証明としては5項目が挙がっている。中国同様に五つに収斂されている。中国と似ているのだが、大きく違うの

は、中国の場合は徳とか仁、あるいは「利他」の精神、思いやり、これが徳。さらにもう一つは天命。

五福に至る際に、「モアモア (more & more)」に代わる言葉はないかなというので、「適」という言葉を思いついたのだが、それを五福にならってさらに五つにすると、「快適」。それから、一番分かりやすいのは「量」と「質」。こういうものがある。薬もさじ加減で、いい量を与えれば毒が薬になる。逆にオーバーに与えたら毒になる。お湯加減はもちろん誰もが分かっている。それから、適時、適所、適材適所。「適」という言葉は多方面に適用できると思う。「適」というのを考えない西洋の文明は、特にアメリカは直線的にもっともっと——「モアモア (more & more)」——である。もっと進歩しよう、もっと経済を発展させよう。だが経済成長は、ある程度まで進めば飽和状態になるのだから、経済はこの程度で結構——「適」——と。何にでも適度というものが存在する。このことを是非考えていただきたい、というのが私の提案の一つである。そして、「モアモア (more & more)」から転じて「適適」文明のほうへ何とか行けないものかと思案している思いを最後にお伝えして、結びとしたい。

## 参考文献

- 久米邦武編、田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記』〈全 5 巻〉(岩波書店、1985 年)。  
渡辺京二『逝きし世の面影』(葦書房、1998 年／平凡社ライブラリー、2005 年)。

## 工部省と岩倉使節団

柏原 宏紀

まず、本稿の問題意識から説明する。筆者は工部省という官庁を研究しているが、同省は明治3年（1870）閏10月に、鉄道や鉱山や電信や造船、技術者養成など近代化諸事業の着実な実施を目的として設立された。インフラ整備といわれる「殖産興業」を担当した官庁として知られている。岩倉使節団については、周知の通りであり、ここで改めて説明する必要はないが、工部省からも少人数ながら理事官らが欧米各国へ派遣をされ、伊藤博文工部大輔も副使として幹部に名を連ねていた。

この工部省と岩倉使節団はある意味、西洋を念頭に置いた近代化という同じ方向を目指していたので、その点では工部省にとっても理事官らの派遣の意義は大きかったように見えるが、実際のところはどうかだろうか。そして、日本全体への影響はどのようなものであったのだろうか。

本稿では、岩倉使節団での工部省理事官らの調査について、特にこの工部省での意味や位置を考えてみたい。具体的には、まず理事官の人選を手がかりにして、工部省内での使節団の位置づけを概観し、次に工部省理事官らの調査内容について簡単に明らかにして、その上で、調査が工部省やあるいは日本全体にいかなる意味を持ったのかについて、知識や人材面から基本的な検討を加えていきたい。

先行研究は、工部省自体については一定の蓄積があるが、工部省と岩倉使節団というテーマではまだなかなか研究がなされていない部分がある。従って、岩倉使節団を念頭に置いて工部省との関係を議論することで、新たな側面を浮かび上がらせることもできるのではないか。そして、日本の近代化の一側面を解明することにもつなげられるのではないだろうか。

続いて、本論に入る。

第一に、工部省における岩倉使節団の位置づけについて、理事官らの人選を手がかりに見ていく。

工部省からの派遣官員は、副使に伊藤が入り、理事官には肥田浜五郎という当時の造船部門責任者が選ばれ、随行員には鉱山部門の大島高任が入っている。それに留学生のような形で、鉄道中属の瓜生震が加わった。中属は判任官であって、幹部クラスというわけではないが、そのような若い官僚も加わっていた。

肥田浜五郎について詳しく見てみると、彼は旧幕臣であり、幕末にオランダへ洋行した経験も持っていた。明治2年8月に民部省に入ってから、3年7月に土木部門幹部を経て、閏10月に工部省ができた段階から少丞という形で同省に入り、翌年8月に造船頭兼製作頭に就いたのであった。すなわち、肥田は工部省の創設時からの幹部であって、幕末以来、造船に通じており、いわゆる技術官僚に位置づけられる人物である。専門の造船分野については、工部省を事実上創設した山尾庸三という、世間では長州ファイブの一人として知られている人物と競合するところもあり、少々微妙な立場に置かれていたとも言えよう。

山尾は、明治4年4月段階で工部省の分担責任者リストを作成していたが、その中に肥田の名前は見出せず、造船部門の責任者は山尾自身の名が書かれていたのであった。そのことから、やはり肥田浜五郎は同省主流派とやや距離のある人物だったように推定される。

次に、大島高任は南部藩の出身で、幕末から鉱山事業に従事し、明治2年8月にまず大学大助教となり、12月に民部省鉱山部門に入って、工部省ができてから2か月ほどで工部権少丞として同省に入り、4年8月に鉱山助に転じた。鉱山の担当幹部は複数人配置されており、その一人という位置づけであった。彼もまた工部省創設間もない段階からの幹部であり、鉱山事業の経験を有した技術官僚の一人であった（研究書ではなく伝記小説であるが、史料を活用して大島高任の一生を描いた著作として半澤周三『大島高任』がある）。

上述した山尾の責任者リストにおける鉱山部門の責任者には、山尾と同じいわゆる長州ファイブの一人である井上勝の名前があり、大島の名前はないが、同じく鉱山部門に配された朝倉盛明の名前も見られないので、ある意味、部門全体の統括はそれまで鉱山部門責任者であった井上が適任とされて、大島らはその井上を支えるような立場として見られていたのだろう。井上と朝倉はいずれもそれまでに既に洋行経験があったが、大島は洋行経験を有さなかったのが、彼が岩倉使節団随行員に選ばれたのは、部門としては意味があったと言えるのではないか。

その上で、工部省での岩倉使節団の位置づけを検討する。省内での意味ということ言えば、西洋化事業を進める工部省では、既に多くの部門でお雇い外国人を招聘しており、実際に事業に着手もしていた。また、それを支える洋行経験のある官僚も一定数在籍していた。従って、岩倉使節団を先取りするような部分もあり、この使節団に調査官を派遣する必要性はそれほど高くなかったのかもしれない。

ただ、大島のように洋行経験のない者を西洋で実地調査させるということで、人材育成面には一定の意味があったと考えることはできよう。人選にさほどの議論がなされたような形跡は見られず、人数も非常に限られているので、このことから工部省内での使節団の位置づけが垣間見えるが、そのような省内での軽い位置づけだからこそ、やや政治的な理由が入る余地もあっただろう。

ここで政治的意味について考察しておく。岩倉使節団が外遊する少し前の9月段階に

において、実は工部省内では横須賀や石川島の造船所の扱いをめぐる、肥田浜五郎と山尾庸三らが意見を違えている状況があり、当時、伊藤の前任であった工部大輔（卿が空席だった工部省の事実上のトップ）後藤象二郎は肥田の意見を採用しようとしていた。そして、その直後に後藤は転任となり、肥田案は退けられることになったので、肥田も山尾らによって使節団に送り込まれたような側面があったのではないか。そのような政治的部分も工部省における使節団の人選の背景にあったと推測されるのである。

第二に、工部省理事官らの調査内容について検討してみよう。

まず、肥田理事官の調査項目としては、肥田自らが工部省で緊要と考える項目を列挙している。すなわち、蒸気諸機械の製作、会計簿の仕組みなどが掲げられ、その他時間があれば取り組む課題も幾つか挙げられていたが、これらについても省内で議論された形跡はやはり確認できない。結局のところ、工部省は当時においてあまり使節団の調査を重要視していなかったことがうかがえよう。

しかも、肥田はその後、省務と関係のない岩倉具視大使から、鉱山と鉄道の調査をするよう内命を現地で受けて、鉱山は随行員の大島に任せ、自身の関心のあった鉄道を調査対象に加えるような状況でもあった。結果として、彼は会計関係の研究を外しており、その点でも当初の視察項目が省全体の決定ではなかったことが垣間見えるのである。

次に、調査の結果はどのようになっていたのだろうか。肥田も「理事功程」という報告書を提出してはいた。そして、その中では、主に蒸気諸機械の製作、鉄道、造船などを調査したということが書かれているが、注目すべきは、実際に伝習したために別段の取調べ書類はないとして、どの内容も数行程度の大綱を示すにとどまっていることである。新しい造船の図面なども収集していたようであるが、これらも肥田が保有していると書かれている。また、実際に様々な製造や建築を仰せつけられれば成功させられるとの記述もあり、自身の技術習得自体を調査結果としている部分が大きかったようである。技術を学ぶということの意味は、まさにそういうところにあったと言えるのだろう。

大島随行員の調査項目は鉱山の取調べであったが、彼の公的な調査結果報告書は管見の限りでは確認できず、詳細はよく分からない。もっとも、調査概要については、使節団の公文書や私文書の日記、彼の日記などからある程度は判明している。欧米では鉱山や溶鉱場や鉱山会社、鉱山学校などの見学をし、数年で大きく変化しまた文書になっていないような溶鉱方法なども調査して、関連の書籍や機械なども買い集めたとしている。

その他、伊藤については、副使として使節団全体の意思決定を担い、また工部省の理事官らとの相談に応じたり、工部省関係の施設などの見学もしたりしていた。もともと鉄道創業にも関わっていた彼は、西洋化事業を見る目が既に備わっていた部分もあっただろうから、ここでの経験がその後工部卿として活躍していく基礎になった可能性も指摘できよう。

一方、瓜生は、留学生として岩倉使節団に随行し、大島らの鉱山調査に同行したことは確認でき、その後、当面留学を継続したことも明らかであるが、その詳細は史料が確

認できず明らかにはできない。

第三に、工部省の理事官らの調査の意味について検討する。

まず、工部省にとってその調査はどのような意味を持ったのか。肥田理事官については、欧米調査からの帰国直後の明治6年5月に工部大丞となり、同月中に海軍大丞兼主船頭へ転任した。彼は、欧米から帰ってきてすぐに海軍省へ異動したことになる。しかも、先述のように、肥田は調査書類を残しているわけではなく、自らが調査結果であるとしていたので、帰国直後に彼が転任してしまった以上、彼が工部省にもたらした成果はほとんどなかったであろう。しかも、このような結果は、肥田が派遣されたときの既述の経緯とも整合的であると言えよう。

一方、大島については、帰国後、8年3月に鉱山権頭に昇進し、9年12月には工部の1等技長になっているが、翌年に廃官になり、就いていた官職がなくなる形で一旦工部省を離れた。その後、13年7月に再び工部省に復帰をして、16年3月に工部省大技長として再度技術系官職に就いた。彼は3年半、工部省を離れていたものの、同省が廃止されるまで長く鉱山部門に在籍したことも間違いなく、調査の成果を活かすことができただろう。

その他、留学生であった瓜生震は、帰国後、工部省鉄道部門の判任技術官として数年在籍したことが確認でき、その中で調査の成果を省に還元できた部分もあっただろう。ただ、その判任官時代の行動は、史料上なかなか明らかにできず、詳細は不明である。

また、使節団とは別に留学中で、使節団に見出された粕林之助や山本重輔は、後に工部省の奏任技術官僚となって活躍することにもなるので、そのような人材を工部省は早い段階から見つけられたということも指摘できよう。

続いて、この工部省の調査が近代日本に与えた影響についても検討する。

政府全体として見れば、まず肥田は工部省を辞めた後、海軍に異動し、その後、宮内省を経由して、また海軍に戻るが、海軍時代にはおそらく造船関係の任務に従事していたので、岩倉使節団での知識が活かされたのではないかと推測される。また、大島については、工部省が廃止された後も、大蔵一等技師や大蔵技監など大蔵省の技術官僚となって鉱山部門に関わり続けたので、より調査結果を政府で活用することができたと言えるだろう。伊藤については、日本の近代化に相当に大きく貢献したことは間違いがないが、瀧井一博氏の研究を始めとして、既に明らかにされているので、ここではこれ以上踏み込む必要もないだろう。

そして、日本全体の近代化に関わる人材面での貢献ということ言えば、自ら技術習得した肥田のような極端な場合ではなくても、洋行経験をした人材は、西洋化に向けて社会が全体として動く中で、民間でも大きな活躍が見込まれた。もちろん、肥田も第十五国立銀行や日本鉄道会社などの創設に関わっていた。しかも、いずれも岩倉具視との関係によるもので、この岩倉との関係は岩倉使節団の中で生まれている部分もあった。岩倉使節団への工部省理事官らの参加が在野において大きな意味を持ったとも言えよう。

瓜生も退官後に高島炭鉱に関係し、三菱の幹部や汽車製造会社の社長などにもなっている。岩倉使節団の知識がどこまで役に立ったか明らかにはできないものの、洋行経験を活かした部分があったのではないだろうか。

最後に、本稿の主題である「工部省と岩倉使節団」に関わる結論と今後の課題をまとめておく。

結論としては、そもそも工部省は岩倉使節団への官員派遣をそこまで重視していなかった。勿論大島のように帰国後に同省に対して相応の貢献をしていたことも確認できるが、全体としては工部省への影響は限定的だったと言わざるを得ないだろう。もっとも、新しい技術官僚をこの岩倉使節団の場で確保したという点では大きな意味もあった。

今後の課題としては、本稿では史料的限界もあって推論が多くなってしまったので、さらなる史料収集などによって、岩倉使節団に工部省官僚を派遣したことの意味について、工部省内、近代化事業全体共に、さらに詳細に解明をしていく必要があるだろう。

例えば、帰国後の大島の業務に岩倉使節団の成果がどのように活かされたのか、直ぐ工部省から転出した肥田は、海軍省で使節団での調査内容をいかに活用していったのかなども検討せねばならないだろう。その際は、それぞれの所属組織の政策展開との関係も併せて考察する必要もある。加えて、在野において彼らがどのような活躍をしたのかも明らかにせねば、彼らの日本全体の近代化への影響を計り知ることは難しいと言えよう。

また、殖産興業という観点からも論及しておこう。西洋事情に通じた開明派官僚が中心を占めた大蔵省も明治初年に殖産興業を担当していたが、同省も理事官等を派遣しており、視察団での調査結果がもたらされていた。同省内の開明派官僚の存在感からすれば、やはり工部省と同じような位置づけでしかなかった可能性もあるが、この大蔵省（その後内務省）が軽工業や勸農、農業の近代化も担当していたことからすれば、あるいはこれらについて調査に意味があったとも考えられる。その点も含めて、人物あるいは分野ごとに考察を重ねていかねばならず、それを行うことでこそ、岩倉使節団がこの殖産興業や日本の近代化にどのような影響を及ぼしたのか、その全貌を解明することができるだろう。

## 参考文献・史料

伊藤之雄『伊藤博文』（講談社、2009年）。

鈴木淳編『工部省とその時代』（山川出版社、2002年）。

鈴木淳「咸臨丸機関長肥田浜五郎の明治」、鈴木淳編『経済の維新と殖産興業』（ミネルヴァ書房、2022年）。

瀧井一博『伊藤博文』（中公新書、2010年）。

半澤周三『大島高任』（PHP研究所、2011年）。

本田敏雄「岩倉使節団と大島高任」『実学史研究』Ⅶ、1991年。

拙著『工部省の研究』（慶應義塾大学出版会、2009年）。

拙著『明治の技術官僚』（中公新書、2018年）。

拙稿「平岡通義と工部省」、前掲『経済の維新と殖産興業』。

大島信蔵編『大島高任行実』（大島信蔵、1938年）。

国立公文書館、国会図書館所蔵「官員録」

『工部省沿革報告』、大内兵衛・土屋喬雄編『明治前期財政経済史料集成』第17巻（改造社、1931年）。

国立公文書館所蔵「公文録」

国立公文書館所蔵「単行書・大使書類原本肥田為良・吉原重俊・川路寛堂・杉山一成報告理事  
功程・全」

国立公文書館所蔵「単行書大使書類原本在米雑務書類」

●パネルセッション「岩倉使節団再考」

## 「文明の落差」克服ののちに

——岩倉使節団以後を顧みる

牛村 圭

### 「文明の落差」は40年

岩倉使節団再考というパネルセッションで岩倉使節団以後を顧みる、ポスト岩倉使節団の話をするのは、いささか看板に偽りありという気がしてならないが、ご寛恕ねがいたい。ただ、岩倉使節団に関しては学部生の頃から関心があり、実は泉先生のお話は大学4年生のときに聞いた。また、岩倉使節団の研究で知られる大久保利謙先生（大久保利通の孫）の講演を聴いたおそらく最後の世代だとも思う。先ほど77年というのが小野先生のお話にあったけれども、私の話も実は77年。起点は明治維新ではなくて、岩倉使節団からということではあるが。

岩倉使節団は、三つの目標を掲げて船出した。一つは、江戸幕府から明治新政府へと政権が変わったので、条約締結国に国書を奉呈する。二つ目は条約改正の準備をする。そして、三つ目が西洋の文物や制度の視察。といっても、三つ目は物見遊山の旅では毛頭なく、いかに早く近代化を進めて強い国にするか、そのための事情探索・視察だった。一体、西洋と日本の間にはどのくらいの差があるのか、それが使節団の念頭に常にあったことは想像に難くない。

おそらく得た解答は、1872年7月、ロンドン滞在中の記述に見てとることができる——「当今欧羅巴各国、ミナ文明ヲ輝カシ、元来此洲ノ固有ノ如クニ思ハレルトモ、其实ハ然ラズ、欧洲今日ノ富庶ヲミルハ、一千八百年以後ノコトニテ、著シク此景象ヲ生セシハ、僅ニ四十年ニスキサルナリ」（久米1978、66頁）。文明はヨーロッパ固有と思われるが、そうではない。しかも、ヨーロッパは19世紀になって栄えてきたのだ、と。とりわけこの状況が顕著になったのは40年前にすぎないというのは、励みになる発見だった。心強い発見をしたと思う。

### 福沢諭吉の「文明」の発展段階説

当時、民間にあって思想の先導者という立場にあったのは福沢諭吉。福沢は、幕末に

都合3回、アメリカ・ヨーロッパに出かけ、現地でカルチャーショックを受けた。その様子は、後に口述筆記で成った『福翁自伝』を見れば分かるし、また、観察、紹介については、幕末のベストセラー『西洋事情』に表れている。

在野を貫いた福沢は、ギゾーやバククルといった西洋の歴史家の理論書も研究し、1875年『文明論之概略』という理論書を発表。そこには、よく知られているように、野蛮から半開、そして文明へという、いわば「文明の発展段階説」が述べられていた。アフリカ諸国は野蛮である。日本やトルコ、あとアジアの国々は半開の状態にある。一方、最上の文明国として言うてよいのは、アメリカ合衆国やヨーロッパの諸国である。こう福沢は掲げ、しかもこれは固定的ではなく流動的である、と。半開なる国も文明を目指すことは可能だと力強く訴えた。西洋の文明を目的とせよと、福沢は国民に向かって説いたのだった。

### 『蹇蹇録』に「文明」を読む

明治の世の中は、歴史が語るとおり、その後近代化に成功し、強国を打ちたてた。この日本の動きは西洋側からどのように見られていたのか。日清戦争当時の外務大臣、陸奥宗光の外交回想録『蹇蹇録』<sup>けんけんろく</sup>に面白い記述があるので紹介したい。

「日本は文明的軍隊組織を模擬するを得るも、果して能く実戦に臨み、欧洲各国の軍隊における如く紀律節制の下これを運用し得るやと疑惑せり」（陸奥1983、175頁）、すなわち軍隊という制度を導入しながらも、それを真似しただけであり、うまく使いこなせないだろうと思われていたし、二つ目として、西洋の事物は西洋固有のものであり、西洋以外の者には理解はできないだろうと思われていた。

ところが、日清戦争の勝利はそういう西洋のまなごしに大きな変化をもたらした。「戦勝の結果は、欧洲列国がかつて我が国を目して僅かに皮相的文明を模擬するものなりとの冷評を下したる迷誤を氷解せしめ、日本国は世界における一大勢力と認めらるるに至れり」（陸奥1983、180頁）、いささか文飾が過剰ではあるが、日清戦争の勝利は日本が西洋文明を上っ面だけ移入したのではなく、咀嚼していた、その証しであるという解釈が西洋側に見られるようになったと言えよう。

陸奥の『蹇蹇録』で面白いのは、日清戦争の根底に文明の衝突があるという解釈だろう。教科書的な説明を加えるならば、日清戦争は、朝鮮支配をめぐる日本と清国の間で争われた戦争となるが、陸奥に言わせると、日本は維新以来、西洋的新文明の摂取に励んだ。一方、そういう日本を嘲り笑う清朝中国は、古くからの文明に固執していた。よって、陸奥はこう書く——「外面の争論は如何なる形跡に出づるも、その争因は必ず西欧的新文明と東亜的旧文明との衝突たるべしとは識者を待たずして知るべき事実」（陸奥1983、59頁）と。ハンチントンに先駆けて、ここで「文明の衝突」と陸奥は言い切った。この文明の衝突は、言ってみれば先ほどの福沢のような文明の一元論ではなくて多

元論の走りと言ってもよい。

### 夏目漱石の醒めたまなざし

岩倉使節団が旅立った1870年以降、「文明」に重きを置いて年表を作成してみると、日清、日露の両戦役の勝利、また北清事変に共同出兵したということも日本を文明国に押し上げる大きな原動力となったことが分かる。さらに、日英同盟も欠かせない。不平等条約は1894年と1911年の2回にわたって改正された。不平等条約の改正完遂をもって文明国の仲間入りをしたと考えるならば、1872年に文明の落差は40年と久米が書き留めた感触そして目標は、ほぼ40年後、成就したのではないか。

40年といえば、個人的なことを少し話させていただくと、40年前の私はちょうど大学の学部を卒業するところだった。2月は大学院入試の月、東大の比較文学比較文化という修士課程を受けたのだが、外国語による論述という問題、ほかに三つほど文章を読み、それを評釈せよという問題が出た。今でも覚えているのは、その一つが漢字と片仮名交じりの文語調の文章で、そこには「桑港」とあった。あ、これはサンフランシスコに行った岩倉使節団だな、という前提で書いたら、その筆記試験は何とか合格した。

さて、このように近代化が進むなかで、冷やかなまなざしでこの日本の動向に注目していた明治の文豪がいた。夏目漱石である。漱石は、条約改正のあった1911年の夏、「現代日本の開化」として知られている講演の中で、冷めたまなざしを日本の近代化に向けている。「戦争以後一等国になったんだという高慢な声は随所に聞くようである。なかなか気楽な見方をすれば出来るもの」（夏目1986、38頁）と書いた上で、「西洋人が百年の歳月を費やしたものを……僅かその半ばに足らぬ歳月で明々地に通過しおわるとしたならば……」（夏目1986、35頁）というので、西洋が100年で果たしたものを日本は半分、つまり50年で果たすとなれば、それはすばらしいことだが、必ず神経衰弱に陥る。また、「氣息奄々として今や路傍に呻吟しつつ」（夏目1986、35頁）——半ば病気と言ってよいだろう——こういう精神面の不安を抱える国民になることを漱石は案じた。

### 「戦に勝てる其国は 機械力あり組織力あり」

その後、日本は近代化をさらに推し進め、自国の国土を何も侵されることなく、第一次大戦では戦勝国の一国となった。また、1920年代にはワシントン体制のもと、五大国の一角を占める列強になった。そういう大正時代の日本では、文明に対する見方が少し変わってくる。ドイツ流の文明概念の流入である。これまでは輝かしき文明だったが、ドイツ流の文明はそれとは異なっていた。ハンチントンの著作『文明の衝突』にも言及があるように、ドイツでは文化は文明の下位概念ではなく、物質的なものが文明、精神的なものが文化という二分法だった。このドイツ流の文明と文化への概念が流入したの

が大正時代と思われる。

日本はその後、英米と次第に距離を置き、ドイツ、イタリアへ接近する。また、中国大陸で軍事拡張に向かったことも歴史が語るところである。そして、1941（昭和16）年12月、英米蘭を相手に大東亜戦争と呼称された戦いを始めるに至る。翌年、1942（昭和17）年7月、雑誌『文學界』はここ京都の地で座談会を開催。暑い中、2日がかりの座談会で、「近代の超克」と銘打っていた。そこでは、敵国となったアメリカの文明も議論の対象となった。

例えば林房雄は、「文明開化といふのは、ヨーロッパ文化の採用とヨーロッパへの屈伏である」（河上他1979、239頁）と言った。また、「質の文明に対する量の文明」（河上他1979、257頁）という発言（鈴木成高）、これもアメリカを念頭に置いていた。「人間の精神は機械を造り出した」（河上他1979、260頁）（津村秀夫）、あるいは「機械文明」、また「物質」。また小林秀雄に至っては、「魂は機械が嫌ひだ」（河上他1979、261頁）などと発言した。

ちなみに、小林秀雄が亡くなったのは、私が大学院に合格した翌日だった。大学院入試では二次の面接もあった。自分がいた文学部の学科の先輩で比較の大学院に行っている方がいると研究室で伝え聞いたので、電話番号を聞き出し勇気を出して電話をしてみた。その先輩が優しく話を聞いてくれて、最後に「スーツを着ていくといいぞ。君のことを先生たちは知らないから」と言われて、私はスーツを着て行った。多分それで受かったのだろう。ちなみに、教えてくださったその優しい先輩とは、このあとここで話をした下さる古田島洋介先輩にほかならない。

ところで、外交官は外国を知るのが仕事である。東郷茂徳の外交回想録『時代の一面』にも、西洋文明へのまなざしが回想されている。少壮外交官の頃、アメリカに立ち寄った東郷は、「自由を標榜する此地に來り、心気の爽快を覚え」、摩天楼、高層建築に驚き、そこに「機械的文明の進歩を讚へた」と回想した。東郷は開戦時の外務大臣だったため、戦争犯罪人として訴追され、禁固20年の判決を受けた。獄中で詠んだ歌の中には、「あなかしこ 戦に勝てる其国は 機械力あり組織力あり」（東郷1985、410頁）という一首があった。機械力というのが、東郷が敵国アメリカに感じたものだったのであろう。

### 「真の原告は文明なり」

かつて輝かしい目標だった文明は、しばらく日本の言論界からは消えていたが、ある日突然、1946（昭和21）年6月5日、新聞の第一面を飾ることになった。『朝日新聞』は「文明が裁く破壊の罪」、『毎日新聞』は「世界破滅を防ぐ文明の戦ひ」と見出しを掲げた。戦前戦中の日本の国家指導者、高位の軍人の戦争犯罪を裁いた極東国際軍事裁判、通称東京裁判の検察側冒頭陳述を伝える新聞記事にほかならない。

首席検察官のジョゼフ・キーナンは、「文明」の語を持ち出し、日本人被告を糾弾し

た。実際の速記録から引用する——「裁判長閣下、是は普通一般の裁判ではありません。何故ならば我々は現にこゝで全世界を破滅から救ふ為に文明の断乎たる闘争の一部を開始して居るからであります。彼らは文明に対し宣戦を布告しました」（速記録9号付録、1頁）。その後を読むと、「偉大なる民主主義諸国に対し戦争を計画し」（速記録9号付録、1頁）とあり、「我々連合国こそ文明だ」と言っていることが分かるであろう。

キーナンはもちろん英語で冒頭陳述を行なったが、該当箇所の英語はこんな感じ（the determined battle of civilization 「文明の断乎たる闘争」／ They declared war upon civilization. 「文明に対し宣戦を布告しました」）で、何とも仰々しくきれいな英語ではない。

「文明」の語は注目されたが、冒頭陳述に文明を持ち出すのはキーナンの独創ではなかった。先立つこと約半年、1945年11月21日、ドイツの古都ニュルンベルクを開廷場とした国際軍事裁判、いわゆるニュルンベルク裁判においても、冒頭陳述で文明は「活用」されていた。首席検察官ロバート・ジャクソンは次のように語った。断然こちらの英語のほうが格調高い——「我々が咎め罰しようとする悪行は、あまりに計画的で、悪意に満ち、衝撃的なので、文明はその悪行が等閑視されるのには耐えられない。というのも、かかる悪行が繰り返されるならば、文明は生きのびることがかなわないからだ／“The wrongs which we seek to condemn and punish have been so calculated, so malignant, and so devastating, that civilization cannot tolerate their being ignored, because it cannot survive their being repeated.”」（Nuremberg vol. 2, 99頁）。

ジャクソンは続けて、こうも言った——「真の原告は文明なり／“The real complaining party at your bar is Civilization.”」（Nuremberg vol. 2, 155頁）。Civilizationは大文字、つまり、「唯一無二の文明」だと言いつつ放ったのだった。西洋文明ではなく、文明そのものがナチスを裁いているのだと高らかに述べたことになる。

## 「近代文明」こそ被告

ここで、キーナンの冒頭陳述に見事に応えた日本人がいたことを、続けて紹介しておきたい。それは、その2年後、『ビルマの竖琴』という児童文学を世に問い、日本中に名が知れるようになったドイツ文学者の竹山道雄だった。竹山道雄は、冒頭陳述が行なわれたその年のうちに「ハイド氏の裁判」という短いエッセイを書く。これこそがキーナン冒頭陳述への応答であり、もっとも初期の東京裁判批判だったが、占領軍の検閲により活字にはならなかった。その書き出し箇所は以下の通り。

「ある日、私は戦犯裁判を傍聴にいった。この日は特別な審理が行われていたので、入場券もいらず、所持品の検査もなかった。この日論告されたのは、まだ新聞にも報道されたことのない人であった。私語は禁ぜられていたが、私はそっと隣の人にきいた。「あのあたらしい被告の名は何といいますか」、隣人は教えてくれた。「近代文明といいます」」（竹山1983、300頁）。

キーナンが「原告は文明だ」と言ったその法廷で、被告に「近代文明」が据えられるという設定となっていた。竹山はこの「近代文明」で何を言おうとしたのか。「ハイド氏の裁判」というこの言葉がヒントになろう、もちろんスティーヴンソンの小説「ジキル博士とハイド氏」である。この作品名は、二重人格のたとえとしてよく使われる。この場合は、近代文明の持つ二面性として、ジキル博士の姿としては崇高な事業を遂行したという姿、もう一つは持たざる国に近代文明が訪れると、そこではハイド氏のごとく悪行を働くという二面性だった。

これを踏まえて竹山はさらに進み、「裁判長閣下、吾人はこの法廷において、文明の名において裁いているのであります。吾人はジキルの姿でいる文明を奉じております。それがかかるハイドの姿となって地球のいくつかの国に現れたということは悲しむべきことであります。何故に近代文明は「持たざる国」にあらわれるとき、ハイドの姿に転身するのでありましょくか。「持てる国」におけるジキルの言うことに従わなかったから、という道德問題ばかりではありません。このハイドの姿に見舞われざる、より幸福な国の人々も共に考うべき根本問題であると考えます」（竹山1983、315～316頁）と書いた。非常に巧みな構成だろう。キーナンの冒頭陳述を使って、東京裁判批判を展開しているということがお分かりいただけよう。文明が裁くという枠組みは変わらないが、近代文明こそが被告だという提示を行なったのだった。

### 「文明を抹殺するもの」と指摘したパル判事

なお、東京裁判に関して、もう一つ文明の観点から言及しておきたいのは、11人の判事の一人、インド代表判事のラダビノード・パルの少数意見書にある以下の一節である——「勝者によって今日与えられた犯罪の定義に従っていわゆる裁判を行うことは、敗戦者を即時殺戮した昔とわれわれの時代との間に横たわるところの数世紀にわたる文明を抹殺するものである」（共同研究パル判決書・上1984、268～269頁）。「平和に対する罪」あるいは「人道に対する罪」といった事後法を恣意的に使っての法廷で、敗軍の将たちを裁判にかけるということは、「文明を抹殺するものだ」とパルは訴えた。そして、「そういう裁判は儀式化された復讐である」と言い切ったのだった。

竹山とパルのこの二つの文明観に関してコメントをしている唯一の人物は、中国文学者の竹内好であろう。竹内好は1961年の「日本とアジア」という評論の中で、竹山の文明論、そしてパルの文明論に言及した。もっとも、竹内は竹山の『昭和の精神史』という、もっと読まれた本を念頭に置いており、この「ハイド氏の裁判」はおそらく読んでいないと思われるのだが。「文明の名で戦争犯罪を裁くことに賛成することによって」——これは先ほどキーナンを引用したところにあつたので正しいと思われるが——「東京裁判の原告の立場を是認し、日本国家の冤罪を弁護」（竹内1993、267頁）、ここがやや違うのは「ハイド氏の裁判」を見れば分かる。ただし、この文明の一元論を竹山の主張

に見て取ることができるという竹内の指摘はおそらくそのとおりだろう。一方で、パルは「文明の多元論」ではないかという疑問を竹内は投げかけたのだった。

東京裁判の判決が出たのは、岩倉使節団からちょうど77年後のことだった。1948年である。この1948年からさらに77年後は2025年、この2025年を目標に、私はこの続きを展開してみようかなと考えていることをお話しして、結びとしたい。

## 参考文献

『極東国際軍事裁判速記録』1946-1948年法廷配布。

*Trial of the Major War Criminal before the International Military Tribunal*. 42 vols. Nuremberg, Germany, 1947-1949.

久米邦武編、田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記2』（岩波書店、1985年）。

福沢諭吉『文明論之概略（改版）』（岩波文庫、1962年）。

陸奥宗光『蹇蹇録』（岩波文庫、1983年）。

夏目漱石「現代日本の開化」三好行雄編『漱石文明論集』（岩波文庫、1986年）。

河上徹太郎他『近代の超克』（富山房百科文庫、1979年）。

東郷茂徳『時代の一面』（原書房、1985年）。

竹山道雄「ハイド氏の裁判」『竹山道雄著作集1・昭和の精神史』（福武書店、1983年）。

東京裁判研究会編『共同研究パル判決書（上・下）』（講談社学術文庫、1984年）。

竹内好「日本とアジア」『日本とアジア』（ちくま学芸文庫、1993年）。

## 記録の文体

——選び取られた漢文訓読体

古田島洋介

### 一 多様性？

初めに少し述べておきたい。最近は何かにつけて「多様性」が強調され、ほとんど理想に近い地位すら占めているかのごとく見受ける。万一これに疑問を呈しようものなら、時代遅れの不逞の輩、現代社会に対する反逆者と看做されても不思議でないような風潮である。しかし、私は「多様性」を金科玉条とする近時の雰囲気には当初から淡い疑念を抱いている。

なぜなら、第一に、我が頭脳が大いに明敏さを欠いているためか、たとえば俚諺に謂う「じゅうにんといろ十人十色」と件くだんの「多様性」とが、どのような点で異なるのか、今一つ理解が行き届かないからである。「十人十色」なぞ狭い世間での話、「多様性」は世界全体を念頭に置いて様々な民族・種々の文化をも包摂する広汎な概念だということかもしれない。けれども、それならば「十人十色」を拡張したように響く俚諺「十人寄ればとこく十国の者」でも現代流に復活させれば済む話ではないのか。何やら「多様性」の裏には、その出所たる英語 diversity に対して、英語であるがゆえにほぼ無条件の信頼を寄せ、以て正当性が保証されているかのような認識（私見では錯覚）がかなり高い比率で隠されているのではないかと思われてならない。天邪鬼あまのじやくと言われればそれまでだが、どうにも「多様性」の語を素直に受け容れる気になれないのが我が心情である。

また、第二に——これが本題に関係する——これだけ「多様性」が叫ばれていながら、事日本語に関するかぎり、文字にせよ、仮名遣いにせよ、そして文体にせよ、まったく「多様性」を発揮しようとせず、それどころか「多様性」を決して許そうともせず、まさしく千篇一律、我らが国語をのっぺらぼうにしたまま放置しているからである。

今日の大学生は、大半が旧字体すなわち康熙字典体の漢字に多大な抵抗を感じず。はっきり言えば「読めない」のである。スマホ上の文字に慣れ切っているためか、「興・興・興」すら判別できないとなれば、況んや「晝・晝・晝」をや。台湾ではもちろんのこと、韓国でも生き続けている康熙字典体の漢字を排斥しておきながら古典教育と称したところで、所詮は紛い物、まともな読解など望むべくもない。

仮名遣いにしても、江戸前期は契沖<sup>けいちゆう</sup>（1640～1701）以来の研究成果たる歴史的仮名遣いを戦後に弊履<sup>へいり</sup>のごとく捨て去り、頗<sup>すこぶ</sup>る不徹底な表音主義の現代仮名遣いを導入した結果、文科省の書類にさえ時として「お知らせしましたとうり」と記されている始末だ。歴史的仮名遣い「とほり」の「ほ」は「お」と書くなどと定めたせいで、つまり歴史的仮名遣いを知らなければ現代仮名遣いが使いこなせないように規定したために、歴史的仮名遣い「とほり」が記憶の彼方<sup>かなた</sup>に遠退<sup>とおの</sup>くにつれ、文科省自らが「とり」と書くようになってしまったのである。

そして、文体となれば、もはや論じる気力さえ萎えてしまうのが現状だ。何しろ明治以来の言文一致運動ここに極まれりとばかり、右を見ても左を向いても、すべて口語体の和漢混濁文のみ、まったく「多様性」とは懸け離れた状態である。そもそも書き言葉は話し言葉と一致しなければならないものなのだろうか——そのような疑問さえ封殺しかねないのが昨今の情勢かと思える。

## 二 万延元年の国書

日本語には、もともと多様な文体があった。それを如実に示す挿話を尾佐竹猛<sup>おさたけたけき</sup>が記している。万延元＝1860年の遣米使節すなわち新見豊前守正興<sup>にいみまさおき</sup>の一行が出発するとき、「將軍より大統領への書翰は漢文にすべきか和文にすべきか、或は英文とすべきものとの議論はあったが、結局和文と決し、その文句は〈うやうやしく亜墨利加合衆国の大統領のみもとにまをす〉との書出しで、〈むつびののりをさだめて、ものうりかふべきちぎりのしるしふみ〉という文句もある」（尾佐竹2016、29頁）との由だ。今日ならば英文で記し、口語体の日本語訳を添えるところだろうか。けれども、当該使節は、漢文・和文・英文の三者を選択肢に挙げて議論に及び、何と和文にすると結論を下したのであった。引用された字句から見て、ここに謂う和文が今日の口語体日本語とまるで異なることは明らかである。尾佐竹によれば、「むつびののり＝睦の法」は「和親」を、「ものうりかふべきちぎりのしるしふみ＝物売り買ふべき契<sup>ひね</sup>の印し文」は「通商条約」を意味する和語だという。現在、このような和語を捻り出せる日本人は皆無に近いだろう。

書翰をめぐる話でありながら、当時なおも手紙文の主流を占めていた候文<sup>そうろうぶん</sup>が顔を出さないことに不審の念を抱く向きがあるかもしれない。しかし、候文は主として日常生活の用向きを満たすために使われていたので、国書に用いるには「俗」にすぎるとの判断があったのではないか。格調の高い「雅」な国書となれば、やはり漢文か和文となり、加えて先方の都合に適<sup>かな</sup>う英文が候補に挙げられたのだろう。

## 三 種々の文体

ここで幕末～明治初期にどのような文体が可能であったのかを簡略に想い起こしてお

こう。

まずは漢文である。日本語を漢文で書くとは奇妙に聞こえるかもしれないが、現に実作品として頼山陽『日本外史』（文政12 = 1829年刊）や成島柳北『柳橋新誌』（明治7 = 1874年刊）などがある。漢文そのものは古典中国語という外国語だが、返り点・送り仮名を加えて訓読すると、そのまま漢文訓読調の日本語になる。つまり漢文も日本語を表現する一つの手段であった。

そして、訓読を施したうえで、漢文が持つ古典中国語としての文法構造を日本語の構造に組み換えると、漢文訓読体の日本語になる。この漢文訓読体は、江戸時代の儒者が論説文などに使っていたうえ、明治初期の政治小説などにも用いられた。

また、江戸時代には平安王朝時代の古文を模倣した擬古文あるいは雅文などと呼ばれるものも書かれた。それが明治以後にも流れ込み、最もわかりやすい例を挙げれば、森鷗外『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』（明治23～24 = 1890～1891年刊）や樋口一葉『たけくらべ』『にごりえ』（明治28 = 1895年刊）などである。こうした作品を見れば、近代風に変貌を遂げたとはいえ、なるほど和文もまだ選択肢に入っていたことがわかるだろう。

さらには、いわゆる和漢混淆文である。江戸時代の読本や滑稽本などでさまざまに使われ、大きな流れとなって明治以降に及んだ。

そのほか、今は記録体と呼ぶことも多いようだが、例の東鑑<sup>あずまかがみ</sup>体、別名を変体漢文とも和化漢文ともいう半漢半和の奇妙な文体もある。さすがに見る影もなく衰えてはいたものの、日本語の書き方の一法としては視野に入っていたことであろう。

そして、この記録体から発したとはいえ、かなり姿形を変えて日常の用を足すべく大いに活用されていたのが前にも触れた<sup>さき</sup>候文である。候文と聞くと、すぐ手紙の文体として念頭に浮かぶかもしれない。けれども、候文の用途は書簡だけではなくた。たとえば、学問に関するQ&Aと称すべき平田篤胤『入学問答』（文化10 = 1813年刊）や、町触<sup>まちぶれ</sup>などの公文書も候文で書かれていたのである。

以上のような種々の文体のなかから、久米邦武は『米欧回覧実記』の基調として漢文訓読体を選び取った。久米自身は、儒学その他、広汎な漢籍の素養を持ち合わせていた人物であるから、あれやこれや文体に頭を悩ませたとは思わない。ほとんど迷うことなく漢文訓読体を用いたのだろうと推測する。けれども、日本の文体史全体から見ると、明治初期、西洋近代文明のさまざまな文物を紹介・摂取するに際して漢文訓読体を使ったという事実は、日本の文体史上、やはり大きな出来事であったと考える。

杉田玄白・前野良沢らの『解体新書』（安永3 = 1774年刊）は、オランダ語を漢文（返り点・送り仮名付き）に翻訳して、日本に西洋解剖学を紹介した。それに対し、久米邦武の『米欧回覧実記』（明治11 = 1878年刊）は、漢文訓読体を以て西洋近代文明を日本に紹介した。そのように両書を捉えるのが私見である。

#### 四 漢文訓読体の実際

ただし、漢文訓読体というだけでは、何か漢文のような言い回しを用いた文体との漠たる印象しか受けないだろう。そこで、漢文訓読体とは実際どういうものなのか、久米の記した字句に沿って説明を加えてみる。

対象とするのは『米欧回覧実記』第三編すなわちフランス・ベルギー・オランダ・プロシア編（久米1979）である。この第三編は、『米欧回覧実記』が英訳されたとき、私が英文校閲を担当した部分で、それなりに詳しく閲読した。もっとも、英文校閲役を務めたとはいえ、受験英語の英作文くらいが限界の身ゆえ、実情は恥ずかしい限りであったが。

以下、当該書からの引用については、(86頁, 1.4)のごとくページ数と行数を括弧書きで示す。行数に添えたf.l.(= from the left)は、左端から数えた行数であることを意味する。

言うまでもなく、漢文訓読体では多数の漢字・漢語が飛び交う。これは読者にとって悩みの種<sup>たね</sup>だろう。たとえば「轟然トシテ仄ツ」(236頁, 1.2)である。三つの「直」から成る「轟」は、ほとんど見かけた記憶のない字に違いない。一瞬「直」と同じく「チョコ」<sup>ちく</sup>と読んでごまかしたくなるが、正しい音読みは「チク」だ。「轟然トシテ」と来て、その次に「仄」とある。漢詩に謂う平仄の「仄」なので、「かたむく」意かと思いたくなるが、送り仮名は「ツ」である。「かたむつ」でも「かたむくつ」でも日本語にならない。そうとなれば、「轟然」が「真っ直ぐに突き立つさま」を表す以上、「仄」は「そそりたつ」意だろうと見当をつける。そこで改めて「仄」に「かたわら、そば」の意味があるのを踏まえると、どうやら「仄ツ」は「そばだつ」と読めばよさそうだと結論に落ち着く。実際、岩波文庫の当該箇所には「轟然トシテ仄ツ」との読み仮名が付いている。これでようやく安心できるわけだ。校注書とは誠に有り難いものである。

次は軽い話題にすぎないが、「牧畜ノ業ハ(中略)土民ノ閑習セル業タリ」(277頁, II. 6-5 f.l.)のごとき言い回しが出てくる。この「閑習」は、どのような意味か。「閑」も「習」も馴染みのある漢字だが、両字が合わさって「閑習」となると、いささか理解が怪しくなるのではないか。これは「慣れる、十分に熟達する」を意味する熟語だ。

とにかく久米邦武は豊かな漢籍の素養があるので、何かと何かの区別がはっきりしていると言いたいときも、今日ならば「両者は明確に相違する」「両者が異なることは明らかだ」などと書くところであろうが、久米の筆にかかると「涇渭ノ清濁判然タリ」(283頁, 1.5)となる。これは、涇水・渭水という二つの川を挙げ、涇水が清<sup>す</sup>んでいるのに対して渭水は濁っていることから、両者の区別が明らかなさまを表す。二つの川の清濁は逆だとする説もあるが、いずれにせよ「両者の区別がはっきりしている」意になることは間違いない。

いかにも漢文訓読体らしい表現となれば、再読文字「猶」を用いた「猶我神祠ニアル水盥ノ如シ」(326頁, 1.6 f.l.)などが代表格かもしれない。「盥」の音読み「カン」(クワン)も、少し読みあぐねる可能性があるだろうか。もっとも、これをただちに再読文

字「猶」の用例とするには、些少の躊躇を覚える。というのも、「猶」の再読「ごとし」が漢字で「如シ」と記されているからだ。これは、再読文字の初読「なほ」に漢字「猶」を充て、再読「ごとし」は仮名で記すという書き下し文の教科書的規則を当てはめ、「如シ」という表記に疑義を呈しようとする話ではない。もしかすると久米の念頭にあったのは「猶如」の二字、すなわち「猶<sup>ナ</sup>如<sup>シ</sup>……ノ」であった可能性も否定できないとの話である。そうだとすれば、「如シ」と漢字で表記したのも当然のことだろう。果たして、再読文字「猶」を用いた表現で、再読「ごとし」をたまたま漢字で「如シ」と書いたのか、それとも「猶如」を念頭に置いて「猶……ノ如シ」と記したのか。どちらにせよ、読みも意味も変わらないので、虚しい穿鑿にすぎないかもしれないが。

もう一つ、漢文訓読体の典型としては、使役表現が挙げられるだろう。たとえば「電信寮ハ、陸軍ノ管轄ニテ兵卒ヲシテ之ヲ主掌辨理セシム」(342頁, 1.7 f.l.)に見える「～ヲシテ…セシム」は、漢文における使役形の訓読「使<sup>ム</sup>～<sup>ヲシテ</sup>…<sup>セ</sup>」そのものにほかならない。ただし、贅言を弄すれば、使役形に用いられる使役動詞は、もと再読文字であった。これを再読文字として扱わないことになったのは、明治も末年のことである。したがって、久米の脳裡にある使役表現は「使<sup>ム</sup>～<sup>レ</sup>～<sup>ヲ</sup>…<sup>セ</sup>」であった可能性が高いのではなかろうか<sup>1</sup>。いずれも書き下せば同じく「～ヲシテ…セシム」となり、これまた読みも意味も変わらないけれども。

なお、細かいことを補足すれば、漢文訓読体では連体形とそれに続く体言とのあいだに助詞「ノ」を入れることがある。連体形は、その名のとおり体言に連なるのであるから、直後に体言を置くのが本来の姿だ。ところが、漢文訓読体では、両者のあいだに「ノ」を入れて、たとえば「盲人ニ字ヲ書シ、彩色ヲ施スノ法ヲ発見スルニ至ラスハ、未タ開明ノ世界ト云難シ」(156頁, II. 4-3 f.l.)のように書くことがある。これは修飾語と被修飾語のあいだに置かれた「之」を機械的に「ノ」と読んでしまう漢文訓読の習慣に由来する言い回しにほかならない。名高い文章から実例を引けば、〔宋〕范仲淹『岳陽樓記』に「覽<sup>ル</sup>物<sup>ノ</sup>情」(物ヲ覽<sup>ル</sup>ノ情)のような表現が出てくる。「覽物」と「情」のあいだに「之」があるため、「之」を「ノ」と読めば、結果として連体形「覽ル」と体言「情」のあいだに「ノ」が挟まれることになるわけだ。久米が記した「彩色ヲ施スノ法」も漢文「施<sup>ス</sup>彩色<sup>ノ</sup>之法」の訓読表現だと考えれば違和感は消えるだろう。

もう一つだけ細かいことを言い添えれば、漢文訓読体では、ちょっと見には軽く映る副詞にも相応の注意を要する。たとえば「已ニシテ瀛車ハ「メーセ」河ヲ渡ル」(231頁, 1.5)は、どのような意味に受け取るか。「已ニシテ」とあるのだから、通常の日本語の

1 使役動詞を再読文字として扱わないことは、明治45=1912年3月29日付《官報》第8630号所載の文部省／服部字之吉ら「漢文教教授ニ関スル調査報告」中、「返点法」末尾の〈注意 第二〉および「添仮名法」第七の末尾において規定された。その結果、使役表現の訓法は旧来の「使<sup>ム</sup>～<sup>レ</sup>～<sup>ヲ</sup>…<sup>セ</sup>」から現行の「使<sup>ム</sup>～<sup>ヲシテ</sup>…<sup>セ</sup>」に改められたのである。旧来の訓法に見える「二レ」点は、現行の返り点法では不可。

感覚では「もう汽車はメーセ河を渡ってしまった」と解釈したくなるだろう。けれども、この「已ニシテ」は、漢文「已而」の訓読「已<sup>ニシテ</sup>而」をそのまま記したもので、実は時間の副詞なのである。「已而」は、現代中国語で言えば「不久」すなわち「不<sup>シカラ</sup>久」（久しからず）、つまり「間もなく、しばらくして」の意となる。したがって、件の一文は「ほどなく汽車はメーセ河を渡った」と解釈せねばならない。

この部分の英訳が私の手許に届いたとき、たぶん「已ニシテ」が誤訳されているのではないかと思って見ると、案の定 already と訳してあった。そこで already を after a while に改めたところ、英訳者が素直に受け容れてくれたので、大いに安心した記憶がある。

## 五 和文要素の混入

ここまで論じてくると、勢い『米欧回覧実記』＝漢文訓読体との等式が脳裡にできあがるだろう。たしかに『米欧回覧実記』は漢文訓読体を基調としている。けれども、それはあくまでも基調であり、『米欧回覧実記』がすべて純粹に漢文訓読表現のみで満たされているのかというと、そうではない。興味深いことに、時おり和文の要素が混入してくることもある。あれこれ細部を突き回すのはやめ、わかりやすい伝聞表現だけに焦点を絞ろう。

漢文の典型的な伝聞表現は、「聞之」すなわち「聞<sup>これ</sup>之ヲ」（之を聞く）であり、その下文に伝聞内容を記すのが定型だ。つまり「之」は、英文法に謂う先行形式代名詞 it のような語と考えればよい。むろん、久米はこの漢文訓読式の伝聞表現も用いている。二つだけ例を挙げてみると――

之ヲ聞ク、(中略)畢<sup>ひつきよう</sup>竟<sup>きよう</sup>氣候ノ不良ニヨルナラント (120 頁, II. 6-8)  
 之ヲ聞ク (中略) 流移<sup>がひよう</sup>餓<sup>が</sup>孿<sup>ひよう</sup>路ニヨルト (221 頁, II. 7-3 f.l.)

それぞれ末尾の助詞「ト」が伝聞内容の終結を表す。第二例の「流移」は浮浪者、「餓孿」は餓死者の意。

一方、『米欧回覧実記』には和文流の伝聞表現も現れる。それは係助詞「ナム」が撥音化した「ナン」である。これを文末に置いて伝聞表現とするわけだ。漢文訓読に係助詞「ナム」を用いることは皆無と言って差し支えない<sup>2</sup>。しかし、簡潔に済むからであろうか、久米は、この和文流の伝聞表現「ナム」も、「ナン」と撥音化させて、少なからず用いている。『米欧回覧実記』が純度 100%の漢文訓読体でないことは明らかだろう。やは

2 漢文訓読に用いる係助詞は、終止形が呼応する「は・も」および連体形の結びを起こす「ぞ・や・か」の五つだけである。同じく連体形の結びを起こすとはいえ「なむ」は用いず、已然形の結びを起こす「こそ」も使わない。したがって、漢文訓読に現れる係り結びは〈「ぞ・や・か」＋連体形〉のみとなる。

り二つだけ例を挙げてみる。

此砲ハ普軍ト戦ヒシトキ、多少ノ敵ヲ殺セリトナン（116頁，1.6）

当帝ノ宮ヲミタルカ、亦甚ダ素朴ナラスヤトテ、嘆美スルトナン（359頁，1.2 f.l.）

いずれも末尾の「ナン」が伝聞を表す。念のために言い添えておけば、これは結びを省略した表現で、「トナン聞ク」または「トナン云フ」と補って解釈するのが定石である。

ただし、漢文訓読体は油断がならない。第一文の「普軍」は普魯士軍すなわちプロシア軍を指すが、注意すべきは「多少」である。現在の日本語で「多少」と言えば、「少」に重みがかかる。けれども、漢文の「多少」は「多」に重点が置かれ、「多少ノ敵ヲ殺セリ」は「数多くの敵を殺した」との意味になる。重みを置くのが「多」か「少」かで意味が逆になってしまうので、慎重な読解が必要だ。

第二文は、わかりやすいだろう。「亦甚ダ素朴ナラスヤ」は、『論語』学而の冒頭に見える「不<sub>レ</sub>亦<sup>よろこば</sup>シカラ<sub>レ</sub>乎」もしくは「不<sub>レ</sub>亦<sup>シカラ</sup>楽<sub>レ</sub>乎」を応用した表現で、「何と素朴であることか」の意。「甚ダ」は「素朴」をいっそう強調した語と捉えればよい。

こうした和文流の伝聞表現「ナン」を見るだけでも、久米邦武の手駒の多さが推察できるだろう。『米欧回覧実記』は、紛れもなく日本語の「多様性」を具現化した一書である。その基調たる漢文訓読体の文章を今日の日本人は読みこなせなくなってしまった。岩倉使節団150周年が今一つ盛り上がり欠けるのも無理はないだろう。せっかく岩波文庫で気軽に買い求めても、『米欧回覧実記』の原文そのものが読めなくなれば、盛り上がりようがあるまい。戦後このかた、ますます貧弱の度合いを強める漢文教育がもたらした罪は甚だ重いのである。

\* 本稿の漢字は、すべて常用字体を原則とした。

## 参考文献

尾佐竹猛『幕末遣外使節物語——夷狄の国へ』吉良芳恵校注（岩波文庫、2016年）。書中、漢詩の書き下し文は私（古田島）の作成に係る。

久米邦武〔編〕『米欧回覧実記』（三）田中彰校注（岩波文庫、1979年）。

古田島洋介「漢文訓読表現の陥穽——『米欧回覧実記』第41～54巻を素材として」明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集・第二輯『表現——目的と手段』小堀桂一郎〔編集責任〕、明星大学日本文化学部、1999年、95～117頁。

古田島洋介「『米欧回覧実記』を読むために——漢文訓読表現の難しさ」米欧回覧の会〔編〕『岩倉使節団の再発見』（思文閣出版、2003年）134～143頁。

古田島洋介『日本近代史を学ぶための文語文入門——漢文訓読体の地平』（吉川弘文館、2013年）。



## 第2部

### 令和の岩倉使節団

——自由で開かれた国際社会への貢献



## 琉球 / 沖縄における死の文化の創造

越智 郁乃

### はじめに

本稿では琉球 / 沖縄を例に、異文化接触と死をめぐる文化創造について論じる。

報告者の専門は文化人類学・民俗学である。人間の移動によって生じる文化変容をテーマに、調査地で生活しながら、参与観察、聞き取りをした資料をもとに研究を進めている。今回は琉球 / 沖縄における葬送儀礼の変容を例に、死をめぐる文化の創造について検討を加える。

民俗学、文化人類学で対象とする祭礼や儀礼などの民俗文化は、伝統的習俗あるいは古代の残存物とみなされ、現代の急激な社会経済的な変化を受けて消えゆく、あるいは過去のものであるといった「衰退、消滅の語り」に収斂しやすい。日本に加えて米軍の支配により複数の国家との重層的かつ非対称的な関係が継続的に形成されてきた琉球 / 沖縄でも、日本や米国の影響により「固有の民俗文化」が「衰退」していると指摘されてきた。それに対し本稿では、ポストコロニアルな状況において死をめぐる文化が創造される様相を示したい。

### 1、琉球 / 沖縄という接合域と多面性

まず、琉球 / 沖縄の歴史をごく簡単に振り返っておきたい。南西諸島では、13世紀にかけて貝交易を通じて中国の時の王朝や大和政権とのつながりを持ってきた。14世紀、中国明王朝との朝貢冊封関係を通じて得た名称である「琉球」を名乗り始め、15世紀に至り中山王朝による統一国家・琉球国が誕生する。王権成立の基盤になったのは、中国との交易を通じて渡来した人々による技術導入で、墓の形態も同じく中国からもたらされたものである。1609年、薩摩による琉球侵攻があり、1867年、明治日本による琉球処分を経て沖縄県が誕生すると、日本による同化政策が行われた。沖縄戦の後は米軍による統治がなされ、1972年の復帰により再び日本へと移り変わっている。

沖縄は、とりわけ近代以降の植民地化と帝国主義との関わりを抜きにして語ることはできない。そこで想起されるのは Mary Louise Pratt の「Imperial Eyes (帝国のまなざし)」

(1992)である。Prattはヨーロッパを中心とする植民地宗主国と非欧州地域との接触をコンタクトゾーンと想定する。そこは地理的にも歴史的にも分離していた人々が接触し、継続的な関係を確立する空間であり、教養や不平等、支配と従属という非対称的な関係が生じる中で、相互作用や実践が行われてきた(Pratt 1992、7頁)。文化人類学者の田中雅一は、ポストコロニアルな状況で、またグローバリゼーションがかつてない勢いで進行する中で、コンタクトゾーンは至るところに出現すると指摘する(田中 2007、32頁)。日本や米軍の支配を経た琉球/沖縄も例外ではない。民俗学者の小熊誠は、前近代から中国、東南アジアとの関係の中で、人・モノ・情報が行き交う場であったことを指摘している(小熊 2016、15頁)。このような琉球/沖縄という特異なコンタクトゾーンにおける文化接触から、今日の文化変容について検討する必要があるだろう。

その一例として、沖縄県設置後に起こった近代化の例が挙げられる。社会学者の小熊英二(1998)は、当時の日本で西洋化を通じた近代化が図られていたことと対比すると、沖縄では和服着用や日本語教育を通じて、日本との同化による近代化が進められたと指摘する。琉球王国時代の慣習としての結髪や、既婚者が行っていた入れ墨は禁止されることになった。やがて方言禁止を伴う日本語教育は、徴兵と出稼ぎを通じて「日本人」として生きるために必須なものとなる(小熊 1998、41-49頁)。このような「日本化」は、沖縄戦の後の米軍支配によって終止符が打たれたわけではない。

1950年代までは米軍を通じてロックミュージックなどの音楽やスパム(ソーセージミート)などの食、そしてアメリカ的な生活様式として自動車や冷蔵庫、テレビなどの家電が普及した。しかし1960年代になると反米と復帰に向けた日本との一体化言説とともに、日本製の家電が普及し始めるという、単純な日本化ともアメリカ化とも違う両者が交錯する空間が形成された(屋嘉比 2009)。

このような推移の中で、いわゆる民俗文化はどのようなまなざしを向けられてきたのだろうか。それは皮肉にも日本を経由して評価されてきた。1940年に沖縄を訪れた柳宗悦ら日本民藝協会のメンバーは、観光をテーマにした座談会において、美しい伝統建築や自然風景を保存、標準語励行の行き過ぎの自粛を訴えた。その中に「沖縄特有の美しい墓を保存すべき」という主張もあった(小熊 1998、398-399頁)。同時期、沖縄を訪れた写真家・木村伊兵衛は、那覇市内の辻原で墓地の写真を撮っている(田沼編 1995)。遠くに海を見ながら、壮麗な石造りの家のような墓が続く風景、そして髪を結い上げ緋の着物をきた女性らが傘をさして石垣の間を縫うように歩く姿が、エキゾチズムを漂わせる。このような墓の様子を、柳も実際に見たのであろう。

しかしながら、柳らの訴えに対して沖縄県側は、標準語の励行や墓地の近代化は県の方針であり「文化的な趣味で物を言うな」と反発した。近代化という名の日本化が進められてきた沖縄において、特に言語習得は差別を克服する手立てであり、また広い土地を必要とする墓は、近代化、都市化の弊害とされたためである(小熊 1998、399-400頁)。その後、沖縄戦の際には、斜面を掘り込んだ墓は防空壕やトーチカとして利用さ

れ、激しく攻撃を受けた場所もある。戦争を生き抜いた墓地も、戦後の復興と都市化の中で次第に整理されていった。

墓制や葬送儀礼は前時代的な評価をされながらも、民俗学や文化人類学において重要な研究対象とされてきた。筆者も沖縄本島で調査を始めた際には「都会に伝統はない」「離島へ行きなさい」と言われ、さらに南の島へと「伝統」を求めて流れていった。

そこでたどり着いたのが日本最西端の与那国島である。木村伊兵衛の写真さながらの墓地で、死者を送る儀礼を調査することになった。しかし島で出会ったのは、これから沖縄本島の都市部に墓を移すという一家だった。与那国では横穴を掘り込んで表面を琉球石灰岩等で固めた墓であったが、移動先では、日本でもよく見かける塔式墓と呼ばれる花崗岩の竿石に家名を刻んだ墓形に大きく変化してしまう。調査先からは「うちの墓、本島に引っ越すから、うちのなんて見てもしようがないよ。本島のもっとちゃんとした家の墓を見たほうがいい」と言われてしまったのだった。このエピソードから明らかになるのは、墓をめぐる「伝統」や「民俗文化」とは何かということをも島の人が外部からのまなざしを受けて内面化しているということである。

島の人々にとって「伝統的な墓」とは、例えば琉球王墓のような墓である。首里城の麓にある玉陵（たまうどうん）は、首里城の石垣同様、琉球石灰岩を積み上げて造られた墓で、世界遺産の一部としても登録されている。ちなみに「うどうん」とは「御殿」のことで、墓はあの世の家を意味する。また、沖縄戦の際に激戦地であった首里に奇跡的に残された石畳は、現在多くの観光客を集めている。王墓にせよ石畳にせよ、そこで使用されているのが琉球石灰岩で、現在では「沖縄らしさ」を表現するものとして用いられている。例えば、地方紙・琉球新報社の本社看板は琉球石灰岩でできた石塀あるいは樋川（ヒージャー）と呼ばれる井泉を模した形をしている。また、東京都内にある沖縄居酒屋では、外壁に琉球石灰岩を模した素材が用いられている。

## 2、琉球 / 沖縄の墓制研究史

それでは、現在の沖縄における王墓以外の墓はどうかというと、本土の石材会社が販売する輸入石材による墓石の利用が広がっている。もちろん墓の変化は急に起こったわけではない。本節では墓の研究史を簡単に紹介しながら、その変化を振り返ってみたい。

まず、琉球 / 沖縄の墓をめぐる以下のような幅広い研究がなされてきた。①南西諸島ではかつて、自然洞穴に遺体を放置していたが、王国時代に儒教思想を民衆にも規範化する過程で、墳墓を造って遺骨を祀る二次葬が行われるようになった。それにより形態的な変化が起こったとするような墓の歴史の変遷に関する研究蓄積（小川 1987；酒井 1987）、②伝承上の祖先の墓への巡礼に代表されるような墓を通じた祖先観や聖地信仰との関わりに関する研究（名嘉間 1979）や、③琉球において中国由来の風水思想がどのように展開したかという比較研究（渡邊 1994）がある。

しかしながら、④戦後広がった火葬に伴い洗骨改葬が行われなくなると、火葬骨のみ納めるようになるため、墓自体がかなり小さくなってきたことが指摘されている（加藤2010）。実際沖縄を歩いてみると、コンクリートブロックを積み上げたような簡素な墓から、近年では輸入石材を用いた墓まで、様々な形態の墓が混在していることに気づかされるだろう。

戦後の墓の新設の数的な推移を調査した井口（2015）は、1950年代前半に新しい墓が増えた理由を以下のように分析している。まず、米軍の「軍工事ブーム」による好景気に吸い寄せられた移住者によって沖縄中部の人口が増加した。次に基地建設によって広域な土地において墓地の撤去・移設が起こり、戦後の都市計画によって、戦前からあった墓が撤去されると、移動先として行政が準備する納骨堂、霊園型墓地という受け皿が必要になる。しかし、その数が十分でなかったり、集合墓地が家から遠かったりすると、簡易な墓を適当な場所に造らざるを得ない。そこで基地建設を機に広がったセメントブロック、コンクリート流し込みの簡素な墓が、次々と都市部に増えたのだった（井口2015、514-516頁）。

1959年の『琉球新報』の見出しには、「ブーム！墓のアパート、余裕が出た象徴」と書かれ、当時200ドル、なかには数千ドルの墓も造られた。特に米軍に土地を接収された人々のうち、次第に土地賃貸料を得て高価な墓を造る例もあったが、実態としては軍に雇われて現金を得るようになった人々が、生活規模にあった墓を造るようになったにすぎない（井口2015、518頁）。それが1960年代になると自動車社会になり、都市居住者が駐車場を完備した霊園墓地を求めるようになった（井口2015、519-520頁）。

### 3、墓の引っ越しに見る民俗文化の現在

前節の先行研究を踏まえて、以下では筆者の現地調査をもとにした墓の移設例を検討する。

最初に取り上げるのは、沖縄の最北端の集落から那覇周辺の都市部に仕事を求めて移り住んだ人々が、1954年に集団で墓を移動した例である。彼らは出身地に墓があるものの、遠方の出身地に数日かけて帰省をすると、当時の雇用先であった米軍からたちまち解雇されてしまうという問題を抱えていた。そこで同村出身の人たちと集団で那覇に新しく墓を造って、元の墓から遺骨を移動させた。移動にあたって、新たな墓に利用したのがコンクリートであった。台風と雨が多く、湿気で木造建築が虫に食われやすい沖縄では、米軍基地建設を契機にコンクリート家屋の建設が広がっていた。斜面に横穴を掘り込んで造る従来の墓より崩れる心配が少なく、成形しやすく、家屋にも用いられるコンクリートは大変重宝され、「あの世の家」である墓にも用いられるようになったという。移住者らが建墓時に建てた記念石碑もコンクリート流し込みで造り、出身村の名前を刻んでいる。

さて、月日が過ぎ、集団墓地造成からちょうど30年後に造られた石碑には、花崗岩、俗に御影石とも言われる石が使われるようになるという変化が見られる。変化の背景には、復帰を機に本土日本から参入してきた石材会社の影響がある。コンクリートも沖縄の強烈な日差しと台風の雨風によって表面が風化していくため、さらに硬く持ちのよい花崗岩が次第に好まれるようになった。

次に現在的那覇市郊外の霊園の様子を例に挙げてみよう。本土の墓と比較すると、地下カロートではなく地上部に遺骨を収納する空間があることに違いがあるが、「〇〇家」と家名を刻んだ塔式の墓は、「ヤマト墓」と言われることが多く、本土日本と類似点が見いだせる。石材も本土日本同様に中国産の輸入石材を用いて、既に中国で加工、文字入れを済ませて運ばれるため、数日で建てることのできる（写真1、2参照）。



写真1：那覇市郊外の霊園（2002年、報告者撮影）



写真2：那覇市の霊園周辺に置かれた輸入石材のコンテナ（2002年、報告者撮影）

1966年に石垣市から那覇市に移住し、1978年に「ヤマト墓」を建てた人にその理由を尋ねてみたところ、「戦前戦中、東京で暮らした経験からヤマトの墓にした。ヤマトのものはいいものだという感覚から選んだ」と言う。流し込みコンクリートと違って、花崗岩にはきれいに文字を刻むことが可能であり、さらに表面も風化しにくいという利点がある（越智 2018、99-102 頁）。

とはいえ、先述した与那国の墓の例のように、元の墓から大きく形を変えてしまうことに移住者自身も戸惑う。そこで各家で工夫されているのが、墓に「故郷を表現すること」である。本事例では、石垣島の氏族名を刻むことで石垣島出身であるということを示している。移動以前は、どの墓がどの家のものかということはその集落の人間であれば知り得ていることで、墓自体に刻字する必要はなかった。しかし新しい土地に移動した場合、調査した事例の全てが墓石に家名等の刻字を行っている。コンクリートやとりわけ石材業者が関与する墓石を購入する場合、墓への刻字を通じて、墓に記録媒体という役割が追加されることになったのである。

また、同事例では自宅の庭から持ってきた木が墓の左手に植樹された。墓の左手には従来土地の神が祀られることが多いが、ここでは故郷の木が植えられたのである。こうして墓の移動を「故郷からの逸脱」とするのではなく「延長」、つまり祖先祭祀の継続を意味する実践であることが強調される。

ポストコロニアルな状況下で、日本や米国という外来からもたらされるものの積極的な利用と「よいものを墓に用いる」という考えの根底にあるのは、現在では史跡として保存される王墓に対し、市井の墓は使い続けるがゆえに、手を加え続ける必要があるということだ。墓は劣化と改修を繰り返し、時に移転しながら、そこでの祭祀が継続されていく。改修、移転時にはその時々「よいもの」を使い、かつ故郷のものを用いてバランスを取ることは、墓を通じて死をめぐる文化が創造され続けていく様子が分かる。以上を踏まえ、民俗文化を「伝統」や「固有文化」に閉じ込めずに研究していくことが重要であることを主張したい。

## 参考文献

- 井口学「日本復帰前の沖縄における墓の新設をめぐる」『国立歴史民俗学博物館研究報告』第191集、2015年。
- 小熊英二『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）。
- 小熊誠「はじめに」、小熊誠編『〈境界〉を越える沖縄——人・文化・民俗』（森話社、2016年）。
- 越智郁乃『動く墓——沖縄の都市移住者と祖先祭祀』（森話社、2018年）。
- 小川徹『近世沖縄の民俗史』（弘文堂、1987年）。
- 加藤正春『奄美沖縄の火葬と葬墓制——変容と持続』（榕樹書林、2010年）。
- 酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』（第一書房、1987年）。

田中雅一「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国へのまなざし』を読む」『Contact Zone』第1号、京都大学人文科学研究所人文国際研究センター、2007年。

田沼武能編『木村伊兵衛 昭和を写す 1 戦前と戦後』（筑摩書房、1995年）。

名嘉間宜勝『沖縄・奄美の葬送墓制』（明玄書房、1979年）。

屋嘉比取『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』（世織書房、2009年）。

渡邊欣雄『風水——気の景観地理学』（人文書院、1994年）。

Mary Louise Pratt. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. Routledge, 1992.

## 明治留学生の史的先例としての遣唐使と中世留学僧

榎本 渉

このたび岩倉使節団のシンポジウムで報告する機会をいただいたが、実は私の専門分野は古代・中世史であり、近代史は専門外である。国際交流を主に研究しているという関係から、今回声をかけていただいたが、シンポのテーマにかみ合う話ができるかは少々不安もある。そこで今回選んだテーマが、「明治留学生の史的先例としての遣唐使と中世留学僧」である。

しばしば聞く語りとして、古代律令国家と明治近代国家は、ともに外国先進文化を積極的に受容したと言うものがある。大化の改新と明治維新を対比させ、あるいは遣唐使による唐文化の受容と明治の文明開化を対比させるという類いのものである（門脇禎二 1991、李成市 1995）。特によく語られるのが、遣唐使の留学生と明治の留学生の対比である。たとえば岩倉使節団が日本を出発した直後、1872年に初学者向けに出版された馬場吉人編『小学史伝』は、遣唐使に言及した上で、これと対比させる形で同時代の留学生に言及している<sup>1</sup>。1905年の足立栗園『海国史談』（中外商業新報商況社）も同様である<sup>2</sup>。

このように遣唐使を岩倉使節団以後欧米に行った留学生に例える言い方は、今でも一般向けの書籍・講演や、ネットなどの各種メディアで、通俗的な語りとしてよく使われるところである。なるほど長い日本の歴史の中で、留学生が前近代にもあったことを語るのには、読者の視野を広げる上で意味があるだろう。しかしそれにもかかわらず、私としてはどこかこの言い方は引っかかる。それは留学の歴史の先例がなぜいつも遣唐使なのだろうということである。

昭和のシルクロードブームの影響もあって、日本と海外の交流といえば遣唐使という印象はかなり根強い。しかし冷静に考えると、遣唐使の文化的な影響は確かに大きい、その時代に派遣された留学生の規模は決して大きくない。外交関係が不安定だった7世

1 「扱其千餘年の後、万国開化、學術技芸百工に至るまで活業日に開け、各国通商交易して以て我国を利せんとする際に於て、誰か學術勉強せざるへけんや。人々洋行留学して我身を達し国家に益せん事を希ふべし。小学の徒是等の古事を認め後來眼目を高うせよ」（初編下、9丁裏）。

2 「之、遣唐使を今日に譬ふるに、明治維新後只管西洋文物の輸入を図り、其の長所を模して我面目を世界に施すやうになったのと同じ軌である。岩倉大使の派遣を最始として、爾後年々留学生を欧米に送る如きを全く遣唐時代と其「梯」を一にして居るのである」（15頁）。

紀は措くとしても、安定期の奈良・平安時代に派遣された遣唐使は、701年から838年の間にたった7回であり、しかも1回の遣唐使で派遣された留學生は請益生（唐に長期滞在せず遣唐使とともに行動し帰国する人員）を含めて大体十数名程度である（森克己2015、234頁）。7回全部でも100人くらいしか留学していない上、長期留學者はさらに限られる。

この後、最後の遣唐使が派遣された838年の後になると、日本には中国商船がいつも来航するようになる。日本の僧侶たちはこの船を利用して、ある時には遣唐使時代よりも頻繁に留学を行なった。特に鎌倉・南北朝時代には、宋に留学した入宋僧、あるいは元<sup>にっそうそう</sup>に留学した入元僧がたくさん現れる。私が最近集計したところでは、中国と日本の間を往来した僧侶は、1185年から1370年の約200年間で、名前が分かるだけで558人から592人程度を確認できる。これは偶然残っている史料から判明するもので、おそらく実際にはその倍以上いたはずである。私は入元僧だけで600人から1000人くらいいたと考えている（榎本渉2021年）。南宋期に入宋した僧も加えれば、1000人以上に達することは間違いないだろう。あまり認識されていないが、規模の面でも頻度の面でも、前近代の留学の最盛期はこの時代であった。彼らが宋・元の文化を伝えたことで、鎌倉時代には宋元風文化が花開き、禅宗や儒学、さらには宋風の建築とか彫刻、書画、詩文などが盛んに行なわれた。ちなみに、最も有名な入宋僧として、曹洞宗の開祖の道元がおり、1223年に入宋している。実は今年（2023年）は岩倉使節団帰国150周年であるとともに、道元禅師入宋800周年でもある。

それでは中世の僧侶の留学は、明治以前にはどのくらい知られていたのであろうか。日本史上で留学が盛んな時代が鎌倉・南北朝期（宋元代）だったとしても、その史実がまったく知られていなかったのならば、近代に留学の先例として取り上げられなかったのは当然だということになるが、本当にそうなのであろうか。ここで日本最初の外交史書である『善隣国宝記』（1470年の跋あり）を見ると、その半分以上は同時代に明・朝鮮との間に交わされた外交文書を掲載したものであるが、元・高麗以前の中国・朝鮮との交流の歴史をまとめた部分もある。その始まりは漢籍や記紀にある中国・三韓諸国との外交記事、次いで遣隋使・遣唐使、続いて唐の終わりから宋までの時代には僧侶の往来を中心とした記事が収録される。その後には日元交渉や元寇の関係記事、そして同時代史（明・朝鮮との間の外交文書）が続く。江戸時代の明暦年間版本の丁数で数えると、遣隋使以前の部分は7.5丁、遣隋使・遣唐使時代は11丁、唐末～宋は11丁、日元交渉・元寇は6.5丁、そして同時代史は57丁である。唐末から宋代の僧侶の往来に関する叙述の分量は、遣隋使・遣唐使の叙述と変わらないことが分かる。室町時代の段階では、遣唐使も僧侶の留学も、ともに対外交渉の重要な歴史と考えられていたわけである。

江戸時代については、外国との交流を年代順に並べた『日本異国来往記』（1696年刊）という本を取り上げてみよう。この本の撰者遠山信武についてはよく分からないが、基本的な事項を簡便に整理したものとして、江戸時代によく読まれたようである。そこに収録されている記事の多くは外交使節や海賊、戦争に関するものが多いが、僧侶の記事

も無視できない程度に入っている。遣唐使以後遣明使以前の時代に留学した僧侶や来日した中国僧で本書に登場したものを列挙すると、円珍・惠萼・義空・真如（以上9世紀）・  
ちようねん 齋然（10世紀）・じようじん 寂照・成尋（以上11世紀）・えがく 栄西・しゆんじよう 覚阿・えん 俊苒（以上12世紀）・えん 円  
に 爾・ごつたん ふねい 蘭溪道隆・なん ぼ じようみん 兀庵普寧・みん き そしゆん 南浦紹明・無学祖元（13世紀）・せいせつししようちよう 明極楚俊・ぜつ 清拙正澄・ぜつ 絶  
かいちゆうしん 海中津・じよりんみようさ 汝霖妙佐（14世紀）の19人となる。

明治時代には1884年に外務省記録局で編まれた『外交志稿』という本があり、その中の巻22の「學術宗教篇」には中国との文化交流関連の叙述が45頁ある。その約半分に当たる21頁（527～547頁）は、多くが唐の終わりから明の初めにかけて留学した僧侶の関係記事で、俗人を除いて54人もの僧侶の名前が挙がっている。このように僧侶の往来は、少なくとも知識としては室町から明治までよく知られていたわけである。しかし、近代の歴史の語りの中で、その事跡は両国の文化交流の歴史としては扱われなくなった。おそらく現代の人々の多くも、中世の僧侶がこんなにたくさん留学していたという史実はあまり認識していないのではないか。

明治時代の歴史叙述を見ると、中世の留学僧の情報はほとんど盛り込まれていない。たとえば明治前期に出版された田口卯吉の『日本開化小史』（1877～1882年）などは、歴史的な出来事として遣唐使は取り上げているが、入宋僧や入元僧にはまったく触れていない。1890年に出版された松井広吉『新撰大日本帝国史』（博文館）は、臨済宗と曹洞宗の開宗に関わって両宗開祖の栄西・道元の入宋に言及するのみである。より専門的な外交通史的な著作も、この点は同様である。中島滋太郎『日本外交之大勢』（博文館、1894年）や足立栗園『海国史談』（既掲）も、遣唐使には一定の分量を取っているが、僧侶については栄西・道元など特定の有名人を挙げるだけで、文化運動として多くの留学僧がいたことにはまったく触れていない。この扱いの差は一体何なのであろうか。

想定される回答としては、しよせん彼らの事績は文化史の範疇であって、日本の近代化という国家的な使命を帯びた明治の留学生と一緒に扱うようなものではないのだ、ということがあるのかもしれない。一方古代の律令制の導入の前提には唐の外圧があつて、これに対処すべく唐の文化を学び取るという使命感が遣唐使の留学僧にはあつた。これはたしかに、西洋列強の外圧を前にした明治の西洋化と比較ができる。これと異なり中世の坊主たちは、勝手に中国に行っただけだということにもなりかねない。しかし彼らとて、決して国家・社会を意識した使命感を持っていなかったわけではない。鎌倉時代の僧侶たちが本格的に留学を始めるのは1180年代後半からであるが、この直前には治承・寿永の内乱、いわゆる源平合戦があつた。この全国的内乱を仏教は止められなかった。つまり、日本の仏教は鎮護国家の使命を果たせなかったのである。日本仏教界では、これを反省する動きが生まれる（平雅行2017、449～452頁）。何とかして仏教を復興しなければいけない。その一つの解決方法として、「中国に行って、本当の仏教を伝えてくる」という運動が起きた。現代人にとっては、仏教による鎮護国家など無意味に思えるかもしれないが、当時の人は本気である。彼らは彼らなりの国家的危機感と使命感を持っ

て留學したのであり、しかもそれは当時の社会では一定の説得力を持っていた。それを遣唐使や明治の留學生と全然違う個人の遊びのように捉えるのは妥当ではないだろう。

むしろ明治の人々が遣唐使と明治の留學生を結びつけた根拠は、その使命感よりも、国家事業として派遣されたという形式面と理解した方が良くもしいない。明治人がこの点を意識して遣唐使に注目したのだとすれば、称えたかったのは使命感に燃える留學生たちではなく、むしろ留學生を送り出す国家の「開明性」だったのではないか。その点で遣唐使と明治留學生を結びつける言説は、いかにも近代的な国家中心の発想から生まれたのではないか。これに対して国家権力と関与しない民間宗教者の自発的な行動だった僧侶の留學は、国家を背負った明治時代の留學とは異なるものと考えられ、国家の歴史叙述からは除外されていったのではないか、というような見通しを今は持っている。

さて、大正になると歴史研究の進展とともに、高見健一の『日本対外小史』（丸善、1914年）や斎藤斐章の『日本国民史』（培風館、1920年）など、僧侶の留學と宋・元文化の伝来について言及するものが現れる。その中で興味深いのは、東京帝国大学で史料編纂に携わった仏教史家、辻善之助である。彼は講演の原稿などをもとにして、1917年に『海外交通史話』（東亜堂書房）を刊行している。本書は対外関係の通史の形を取っており、入宋僧については平安時代の人を数人挙げているが、鎌倉時代は完全に無視している。しかし、1930年の増訂版（内外書籍）では「日宋交通」「宋文化の影響」の2章を追加して入宋・入元僧による鎌倉時代の宋代文化導入について詳しく触れ、さらに「日本文明の特質」の章にも大幅に加筆を行ない、日宋交通の盛況に言及している。つまり初版ではほとんど無視された宋元文化の叙述が、増訂版で急に増えているのである。1938年の『日支文化の交流』（創元社）では入宋・入元僧の叙述はさらに詳細になり、むしろ本書で一番充実しているのはこの部分であると言っても良いほどである。そして以上の成果は、彼の代表作である大著『日本仏教史』全10巻（岩波書店、1944～1955年）に受け継がれていくことになる。

一流の仏教史家である辻氏が、『海外交通史話』初版の段階で鎌倉時代の僧侶の留學の史実を知らなかったことはありえないと思う。実際に1919年に刊行された『日本仏教史之研究』（金港堂書籍）には、そうした僧侶の事績が幾つか取り上げられてはいる。しかし明治時代の他の研究書と同様、本書でも留學は名僧の事績の一つとして挙げられるだけで、当時の文化運動として僧侶の留學や宋元文化の摂取が広く見られたという視点は出てこない。おそらく辻氏は対外交流と僧侶の留學は異なる文脈で理解していた。そしてそれはおそらく、当時の歴史学の世界では一般的な考え方だったのだろうと思われる。

この点を辻氏が増訂版でアップデートした背景には、大正から昭和初期の仏教史研究の進展があったと考えられる。たとえば、入宋僧の文化的意義を高く評価した初期の著作として、1916年の鷲尾順敬『鎌倉武士と禪』（日本学術普及会）があり、また1926年から1927年にかけて刊行された木宮泰彦の『日支交通史』2巻（金刺芳流堂）がある。辻氏はおそらくこうした研究を見て、国家事業とは絡まない僧侶の留學も対外交流史の<sup>ひと</sup>一

こま  
齣として見るべきと考えるようになったのではないだろうか<sup>3</sup>。

なおこうした研究成果は戦後の対外関係史研究でも十分には取り入れられず、いわば明治時代に分離された入宋・入元僧の歴史と対外関係史はずっと統合されずに最近まで来ていた。昭和の終わりくらいまで、僧侶の留学という文化運動は仏教史家の間でだけ共有される特殊知識としてとどまってきた。

まとめに入ると、実態として中世の入宋・入元僧の留学は、遣唐使の留学僧以上の規模を誇り、室町期以来その事績は史実として認識されてきた。しかし明治時代になると、国家事業としての留学生派遣に関心が向けられ、留学の前史としてはもっぱら遣唐使が意識されるようになり、入宋・入元僧は言及されなくなった。その後大正時代の仏教史研究が進展するとともに、留学生としての入宋・入元僧が改めて認識されるようになったのである。以上のようなことを本報告では指摘した。

明治時代に留学生の前史として遣唐使のみが顧みられて、僧侶の私的留学が除外されたのは、つまり知識の欠如の問題ではなくて、近代における歴史認識、また価値観の問題だと言うことができる。その背後にあったのは明治時代に強まった国家史への志向だったのでだろうと推測している。僧侶の留学が言及されなくなる具体的なプロセスの検証は、近代史研究者でもない私には手に余る問題であるが、おそらくそこには江戸時代の国学・水戸学の興隆や、排仏論の影響があったのだらうと、私は見ている。これは幕末維新期の主張に影響を及ぼした言説の内容を具体的に調べることで、明らかになるだろうと思われる。

## 引用文献

- 榎本渉「日元間の僧侶の往来規模」櫻井智美他編『元朝の歴史——モンゴル帝国期の東ユーラシア』（勉誠出版、2021年）。
- 門脇禎二「大化改新は存在したのか」『「大化改新」史論』下巻（思文閣出版、1991年）。
- 平雅行「鎌倉仏教の成立と展開」『鎌倉仏教と専修念仏』（法藏館、2017年）。
- 森克己「遣唐使」『新編森克己著作集5』（勉誠出版、2015年）。
- 李成市「古代史にみる国民国家の物語」『世界』第611号、1995年。

---

3 辻は『海外交通史話（増訂版）』の「日宋交通」の章の146頁で入宋僧に言及する際に、「近頃木宮泰彦氏の労作日支交通史にはそれ等の人の名が多く収めてある」と明記しており、木宮の著作を読んでいたことが明らかである。

## 幕末維新期の異文化接触と岩倉使節団

——イギリス訪問と教育視察を中心に

太田 昭子

琉球／沖縄、遣唐使と留学僧などに視点が広がったところで、岩倉使節団に話を戻してしまおうが、お許しいただきたい。本日は幕末維新期における異文化接触の流れを概観しながら異文化接触モデルを紹介し、さらに岩倉使節団を通して、「異文化接触と文化創造」の可能性について検討する。

### 1) 異文化接触の枠組み

#### 1. 幕末維新期の日本人の異文化接触

1860年代～1870年代は、幕末維新期の日本のみならず、世界各国でも政治・経済や社会が大きく変化し、異文化接触の形態が多様化した時期に当たる。幕末維新期において、日本人がどのように異文化情報と接したのか、その変容過程を概観し、主な特徴を整理すると、次の三つにまとめられる。

(1) 徳川時代のいわゆる鎖国政策は、幕府が異文化接触における人・物・情報の流れを掌握し一括管理を図るもので、この時代はごく一部の人が文字主体の海外情報入手していた。しかし幕府が情報の一本化と独占を図るシステムの維持は次第に困難になり、19世紀に入ると綻びがあちこちで顕在化し、日本は開国へと舵を切ることになった。

(2) 万延元年の遣米使節を皮切りに、1860年代から限定的ではあるが、日本人が海外渡航できるようになり、海外に「行って知る」という、新しい手だてが加わった。外国から日本に入ってくる従来の文字情報主体の異文化情報に加え、日本人が自ら海外へ出向き異文化に触れ現地情報を持ち帰るという、新たな流れが加わり、〈行って知る〉時代が始まったとも言える。実際海外に赴き直接異文化に触れることは、五感の感覚を伴う新鮮な生身の体験で、新しい情報収集のチャンネルが広がった。ただ、1860年代前半の日本には攘夷の機運が優勢で、せっかく海外から情報を日本に持ち帰っても、日本国内ですぐ大々的に広められなかった。1860年代半ば以降、攘夷運動が次第に鎮静化に向かうにつれ、異文化情報を受け入れる土壌が日本国内に整っていき、明治維新以降この流れが更に加速していった。

(3) 日本国内の受け入れ態勢の変化により、ごく一部の人々が海外の情報を得る時代から、国内の幅広い層に海外の情報が伝播する時代が訪れ、多くの人々が、自分の生活圏に居ながらにして海外の情報を得られるようになった。言い換えれば、〈居ながらにして知る時代〉が訪れたのである。海外に実際に赴き情報収集した人々は、何をどのように誰に伝えるかを念頭に置きながら異文化情報を整理し、国民の啓蒙方法を模索するようになり、その過程で教育の重要性が改めて認識されるようになった。このようにして幅広い人々が国内の生活圏に居ながらにして海外情報に触れ裾野を広げ、異文化情報が蓄積されていった。

ここで挙げた (1) (2) (3) の関係性について申し添えると、(1) が (2) や (3) に取って代られるのではなく、(1) の上に (2)、更に (3) の局面が積み重なり、その過程で異文化情報が更新されたり上書きされたりしながら蓄積されていったと考えると良いだろう。

## 2. 〈居ながらにして知る〉時代と博覧会

実は、〈居ながらにして知る〉時代が訪れていたのは、幕末維新期の日本だけではなく、例えば、同時代の西洋諸国に目を転じると、1851年にロンドンで開催され大成功を収めた万国博覧会、その後、西洋諸国で盛んに開催された、万国博覧会や勸業博覧会などがその代表例として挙げられる。詳しい内容は省略するが、一般市民も博覧会に出かけ、楽しみながら知識を得ることが可能になったが、その背景に、鉄道網や交通網の整備や情報網の発達、イギリスの場合、穀物法の廃止などで物流が盛んになったこと、情報や知識の伝播に関わる新聞税などの課税が廃止されたことが挙げられる。また、岩倉使節団が各国で訪れた植物園や動物園、博物館なども、人々が比較的身近な場所で世界の珍しい生き物や展示物に触れる機会を与える施設だった。これらはいわゆる箱物の教育ではなくて、もっと幅広い教育機会の場であり、人々が居ながらにして海外や未知の世界について知ることが、世界各地で同じ時期に奨励されていたのである。つまり、幅広い層の人々が〈自分の生活圏に居ながらにして知る〉ことの有用性が大いに注目され、先進性のバロメーターとして認識されていたとも言えるだろう。

## 3. 文化触変モデルの紹介

幕末維新期の異文化接触を論じる際、個別のケースを包括する全体的な枠組みを考えることも重要である。そこで、平野健一郎氏が提唱した文化触変モデルを紹介したい。平野氏は、文化的関係としての国際関係という視点に着目し、国際政治を国際文化論の視点から論じることの重要性を説いて、様々なモデルや事例を示した。その中の一つが文化人類学や国際関係論などの枠組みに基づき文化触変 (acculturation) 過程を提示したモデルである (平野健一郎 2000、58 頁)。21 世紀の今、このモデルを安易に援用するのは

慎むべきだが、歴史的事例を考える際にも参考になることに改めて気づかされる<sup>1</sup>。

異文化に接する際、私たちは自分にとって馴染み深い文化的な土壌や既存の知識、異文化接触の目的や動機などの〈フィルター〉を通して物事を見ようとする。異文化を理解し、新たに得た情報について価値判断を行ない取捨選択するが、そこには同意や共感だけでなく誤解、反発や抵抗、黙殺、軽視なども含まれる。つまり〈フィルター〉は、必ずしも異文化接触に肯定的に作用するとは限らず、その種類は、多岐にわたっている。しかも、異文化要素を〈フィルター〉にかけるタイミングは一回だけにとどまらず、何回も訪れる。異文化接触を経て、バランスの取れた状態（平野氏はそれを〈平衡〉と呼んだ）に達しても、その後、新たな異文化要素に触れると、〈フィルター〉を通して文化触変がまた始まる、ということが繰り返される。更に、異文化接触のアクターとして、海外渡航などを通して異文化に接した側だけでなく、自国に渡航してきた外国人に接し情報を提供した側にも異文化接触が生じたことに目を向ける必要がある。このように概観しただけでも、幕末維新期の日本人の体験した異文化接触が、複合的な要素の絡み合う複雑なものだったことは、一目瞭然である。

#### 4. 幕末維新期の異文化接触——〈知〉に向かう旅と文化創造

異文化の知識や情報などに触れる経験は、自分たちに馴染みのある文化的な土壌とは異なる価値基準に根差した文化との出会いを意味している。幕末維新期に海外渡航した日本人が体験した異文化接触の多くは、旧来の価値観とは異なる物事の捉え方、考え方の新しい枠組みと向き合う体験でもあった。彼らはそれぞれの立場から、新しい情報・知識・見識などの価値判断や論評を絶えず行ない、物事をとらえる視座を増やし、視野を広げようと努め続けた。異文化に初めて接した当初は、無我夢中で手当たり次第に目新しい情報を集めたとしても、異文化に触れる経験を重ね、情報や知識の精査と吟味を繰り返すうちに、そこにある種の方向性が生まれたと言えるだろう。そして異文化に何を・何故求めるのか（あるいは求めないのか）という問題意識を基軸に異文化接触に臨み、個々の情報の根本にある異文化の特質を見極めるようになっていった。

彼らがこのようにして到達した信念、理念、価値観、精神、信仰なども内包する新たな知見は、情報や知識のレベルを超え、考え方の枠組みそのものと深く関わるものだった。異文化接触により育まれたのは、収集した情報を体系的・有機的に関係づけて理解し判断する能力と主体性、すなわち〈知〉とも呼べるものだったのではないだろうか。〈知〉に向かう彼らの旅とは、主体的に〈知〉を組み立てていく取り組みであり、そこから彼らの思想が形成されていったのではないか。彼らにとって、〈知〉の追求とは、漠然とした知識の探求ではなく、自分自身や帰属先に欠けている〈知〉のあり方を自覚した

1 筆者は学部生時代に、国際関係論コース設置の「文化接触論」（平野健一郎教授担当）を履修し、平野氏の研究に接した。

上で、欠けている要素の追求を目指したと言えよう<sup>2</sup>。彼らは様々なフィルターを通して取捨選択した海外情報を、包括的な〈知〉という概念に昇華させ、それぞれのスタイルで主体的に〈知〉と向き合っていたのであり、そのアプローチを総合的にとらえることが、後世の私たちに肝要である。そして、このように〈知〉と向き合った彼らの姿勢は、文化創造につながっていったのではないかとも考えている。

## 2) 岩倉使節団とイギリスにおける教育視察から見えるもの——使節団別働隊

### 1. 岩倉使節団別働隊と新島襄

岩倉使節団には、各省から派遣された理事官と随行で構成される26名の専門家集団が参加していた。本報告では彼らを使節団本隊と区別して、別働隊と呼ぶ。文部省からは理事官の田中不二麿（文部大<sup>たいじょう</sup>丞）と5名の随行が派遣され、各国の学制や教育行政に関する情報を収集し、帰国後、欧米各国の教育制度をまとめた調査報告『理事功程』を提出している。岩倉使節団本隊のアメリカ滞在が長期化する中で、各省派遣の理事官たちは自ら願い出て次々に本隊を離れ、各専門分野の視察に出発した。文部省派遣の教育視察チームも同様で、田中不二麿はワシントンで新たに田中の通訳官として加わった新島襄とほぼ行動を共にした。1845年7月生まれの田中、1843年2月生まれの新島は、当時まだ20代後半だったが、訪問先で教育界の重要人物に次々に面談を申し込み、精力的に各国の教育事情を視察した。

### 2. 新島襄の任用に見られる選択の主体性

ここで注目したいのが、新島襄の任用に見られる岩倉使節団の選択の主体性である。新島襄（1843～1890）は英学を志して1864年に単身アメリカに密航、キリスト教が禁教だった時代にキリスト教に帰依し、アマースト・カレッジ（Amherst College）を卒業後、アンドーヴァー神学校（Andover Theological Seminary）で神学を学んでいた。彼は米国駐劄少弁務使の森有礼（1847～1889）の目にとまり<sup>3</sup>、森有礼らの招請に応じ、現地採用されて田中の通訳官を務めることになったのである。

新島は最初から宗教の話題を持ち出さなかったが、行動を共にして親しくなるにつれ、教育と関連づけてキリスト教について踏み込んだ発言をするようになった。民の知性と

---

2 木田元氏は、哲学の根幹にあるのは〈知を愛すること〉であり、それは自分に欠けている知識を獲得しようと追い求めることだと述べているが、幕末維新期の日本人の異文化接触体験はこれと相通ずるのではなかろうか（木田元『基礎講座 哲学』、ちくま学芸文庫、2016年、42～45頁）。

3 新島襄を推挙した森有礼は、自身もキリスト教に深く関わり、日本の禁教政策がアメリカ政府との条約改正交渉の難航の一因になっていると痛感していた。森は1870年に発布された大教宣布の詔に対して批判的な立場をとり、1872年10月に *Religious Freedom in Japan* を上梓、信仰の自由は基本的人権であると主張した。

品性を高めるには教育が有用で、キリスト教の理念がその目的にふさわしいと論じる新島に対し、田中は態度を留保したが、新島は日曜礼拝を欠かさないなど敢えてキリスト教の習慣を守り、田中に聖書を少しずつ教えようとした。このような新島の言動は充分予測できた筈だが、それでもなお、使節団が彼を理事官の通訳に任用したのは何故なのか。

歴訪先の欧米諸国で折に触れキリスト教禁教政策に対する批判の矢面に立たされていた岩倉使節団にとって、禁教政策撤廃は時間の問題とも言える懸案事項で<sup>4</sup>、むしろ撤廃後の日本における宗教政策を構築する上で、西洋諸国におけるキリスト教の役割を知ることの重要性も、彼らは認識していた。新島襄のように敬虔なキリスト教徒を通訳官として田中不二麿に同行させることは日本の精神的近代化に役立つとの目算から、森は新島を推挙したと考えられる。また新島襄の資料から、田中不二麿がキリスト教とは一定の距離を保ちつつも、新島を通して、キリスト教の理念やキリスト教が教育に果たす役割などを知ろうとしていた様子がうかがわれる。つまり新島襄の任用自体が、情報収集における岩倉使節団の主体的選択という行為に他ならなかった。そしてそれが、岩倉使節団の内部でも一種の文化接触を起こしていた点にも注目すべきだろう。

### 3. 新島襄と田中不二麿の行なった教育視察の注目点

新島襄と田中不二麿は主だった訪問先で、例えば、ジェイムズ・フレイザー (James Fraser)、ウィリアム・E・フォースター (W. E. Forster)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) など、当時のイギリス教育界における重要人物<sup>5</sup>をまず訪ね、情報収集を行なった上で紹介状を書いてもらい、ネットワークの開拓と拡大を図りながら、系統だった視察を効率的にこなした (図1) (図2) (図3)。新島のキリスト教に対する見方がバランスの取れたものだったことは、彼の残した記録から読み取れる。教育行政の探索を主眼とする田中不二麿に対し、新島は教育行政だけでなく学校運営に強い関心を抱いていた。キリスト教徒の新島が日本でキリスト教系の学校設立を視野に入れ、イギリスの学校運営

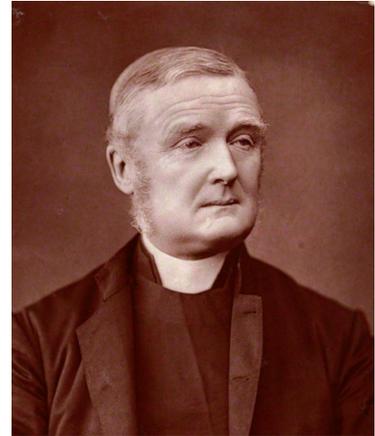


図1 ジェイムズ・フレイザー  
(Fraser, James: 1818-1885)

出典: COOPER, Thompson, *Men of Mark*,  
(London: Sampson Low, Marston, Searle  
and Rivington, 1878).

4 日本政府がキリシタン禁制の高札撤去し、キリスト教禁教が終わったのは、1873年2月だった。岩倉使節団本隊は、歴訪先の各地で、様々なキリスト教会を訪れている。

5 James Fraser (1818～1885: マンチェスター主教、教育界に幅広い人脈を持っていた)、W. E. Forster (1818～1886: イギリスの教育改革を担っていた)、Matthew Arnold (1822～1888: 詩人・文芸評論家としても著名な視学官。視学官はイギリス国内の学校を視察、教育環境をチェックし、生徒たちに口頭試験も行なった)。



図2 ウィリアム・E・フォースター  
(Forster, William Edward: 1818-1886)  
出典：COOPER, Thompson, *Men of Mark*,  
(London: Sampson Low, Marston, Searle  
and Rivington, 1878).



図3 マシュー・アーノルド  
(Arnold, Matthew: 1822-1888)  
出典：Prose Masterpieces from Modern Essayists,  
(London: Bickers & Son, 1886).

に強い関心を示していることは好印象を与えたようで、その姿勢に共感したイギリス側は一貫して情報提供に協力的だった。これも別働隊の教育視察における注目点と言えるだろう。

#### 4. 新島襄の〈異文化接触の旅〉と〈知〉、文化創造へ

新島襄の〈異文化接触の旅〉を整理すると、アメリカに密航しキリスト教に帰依して信念を形成したのが、新島にとって〈知〉の獲得の第一局面、岩倉使節団別働隊に随行して行なった教育視察の旅が〈知〉の獲得の第二局面、そしてこれらを踏まえて新島の目的意識は、獲得した様々な〈知〉をいかにして広めるかという点に向かい、それが1875年の同志社設立として実を結んだと総括できる。

同志社設立に向けて新島の取った行動は迅速だったが、その背景にはドイツでの体験も影響している。イギリスの旅を終え、田中不二麿と共にドイツへ渡った新島は、現地で日本人留学生たちに会う機会を得た。1872年当時、ベルリンには日本人留学生が80人ほどいたが、新島の目には彼らが異文化接触の機会を与えられながら、偏見に満ちた言動に終始していると映ったようである。留学先でキリスト教に触れてもそれを受け入れようとしないエリートたちが存在することを敏感に感じ取った新島は、彼らが動き始める前に、日本におけるキリスト教教育に着手しなければと考えた<sup>6</sup>。そして強く慰留す

6 「このような連中が帰国すると、彼らは日本に存在するようになったばかりのキリスト教会の活動を大いに妨害することになるでしょう」と新島は危機感を募らせた (To Susan Hardy, Berlin, October 2, 1872, 『新島襄全集』第6巻、122頁)。

る田中を振り切るように、いったんアメリカに戻って学業を終えてから帰国し、同志社設立を急いだのである。

別働隊への同道は、新島にとって、訪問先の国々の新しい情報を入手する機会となっただけでなく、新島が同時代の日本人の気質の一端を知る機会にもなり、それが次なるステージとも呼べる行動へと向かわせたとも言える。このように、新島の別働隊参加から浮かび上がってくるのは、明治初期の日本人における異文化接触の様々な形ではないかと考えている<sup>7</sup>。異文化接触と言うと、外国文化との接触に目が向けられがちだが、実際には、日本人同士の中でもこのような異文化接触が起きており、それが新島の場合、同志社設立という文化創造につながっていったのではなかろうか。

### 3) 岩倉使節団とイギリスにおける教育視察から見えるもの——使節団本隊

岩倉使節団本隊に関しては、岩倉使節団本隊の行動と、『米欧回覧実記』を編纂した久米邦武の功績について、異文化接触の観点から、紹介したい。

#### 1. 使節団本隊の不思議な教育視察日程とその背景

岩倉使節団本隊は、一般的なイギリスの初等教育機関を殆ど訪れていなかった。視察先には、地域密着型の私立校クライスツ・ホスピタル校 (Christ's Hospital<sup>8</sup>)、産業と結びつきの強い学校 (例えば、職業訓練学校、工場経営者の運営する学校) や産業資本家の作ったモデル村ソルテア (Saltaire<sup>9</sup>) と村内の学校、非行少年の更生訓練船を含む様々な種類の訓練船などが選ばれていた (図4) (図5)。岩倉使節団本隊が主体的に選択したとは考えにくい教育機関ばかりで、イギリス側が中心に視察先の選定を進めたことは明白である。使節団本隊の迎撃には、パークス駐日公使<sup>10</sup>らが中心となり、旅程全般を組んでいた。

このような視察日程が組まれたのは、使節団本隊より一足先にイギリスで任に当たった別働隊との重複を避ける配慮が働いたこと、パークスがたたき上げの外交官で名門校へのつてがなかったこと、イギリスの名門校は実学をあまり重視しない学風で岩倉使節団の目的意識には合わなかったこと、産業視察とセットにした教育視察を行なう方が効率的とイギリス側が考えたことなどの要因もあるが、イギリスの「個性」を強調するような教育機関が並んでいたのは何故なのか。このような選択がなされた背景を検討する

7 新島は各種キリスト教会について田中に報告したが、その内容は『理事功程』には盛り込まれなかった。これも異文化接触における、取舍選択の一つの形だったと言えるだろう。

8 クライスツ・ホスピタル校 (Christ's Hospital) は 1552 年に創立され、シティー (the City of London: イギリスの金融・商業の中心地) と密接な関係にあった。

9 ソルテアは、アルパカ紡績で財を成したタイタス・ソルト (Sir Titus Salt) が、ヨークシャー (現在のウェスト・ヨークシャー) に建設したモデル村。2001 年にユネスコの世界遺産に登録されている。

10 サー・ハリー・パークス (Sir Harry Parkes: 1828 ~ 1885)。中国勤務を経て、1865 ~ 1883 年に駐日公使を務めた。

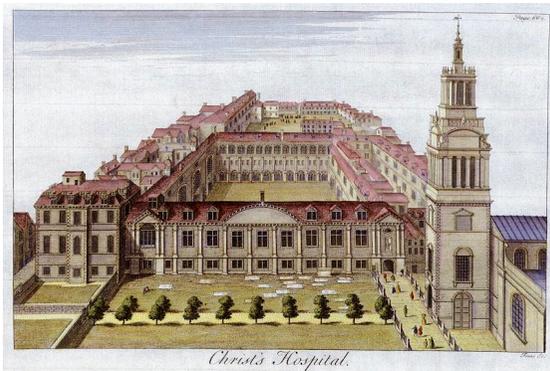


図4 クライスツ・ホスピタル校 (Christ's Hospital)

出典：TOMS, William Henry, *Christ's Hospital in London*, c.1750, in STOW, John, *Survey of London*, 1755. 岩倉使節団が訪れた1872年にはプールもあった。「校内に水遊の所あり是又米国にて不見ものなり」明治5年8月9日(1872.9.11.)付(『木戸孝允日記』第二巻、230頁)。

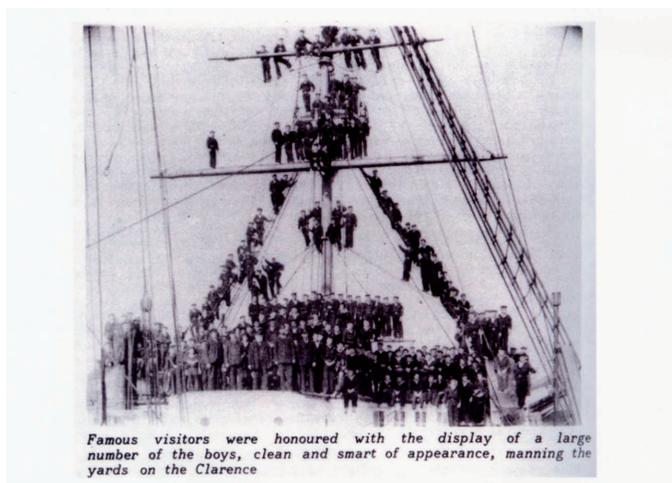


図5 訓練船クラレンス号のマストに鈴なりに並ぶ少年たち

出典：RIMMER, Joan, *Yesterday's Naughty Children*, (Manchester: Neil Richardson, 1986), p. 23. クラレンス号(The Training Ship Clarence)は非行少年の更生訓練船で、大勢の少年たちが正装してマストに登り、賓客に対して歓迎の意を表すのが習わしだった。

上で見落とせないのが、イギリスの公教育整備の立ち遅れである<sup>11</sup>。

教育に強い関心を示している岩倉使節団が、最初の訪問国アメリカで、既に数多くの小中学校などを視察し目が肥えていたことをパークスたちは把握していた。イギリスで類似した教育機関を見せると、イギリスの立ち遅れが露見するおそれがある。だが、日本側にイギリスの事情を悟られたくない。そこで産業政策や非行抑止政策などと

11 イギリス公教育の立ち遅れについては、多数の研究書が取り上げているが、拙著『ヴィクトリア朝の福澤諭吉と岩倉使節団』(慶應義塾大学法学研究会、2023)も参照されたい。

結びついた教育現場、地域密着型やモデルビレッジと結びついた学校を見せることによって、日本の近代化に役立ちつつ、イギリスの優位性を印象づけようとする思惑が働いていたと考えられる。

## 2. 情報をめぐる駆け引き

教育視察に限らず、イギリス側が「見せたい」情報、「見せたくない」情報、一方の日本側が「見たい」情報をめぐる駆け引きが、岩倉使節団本隊の旅ではたびたび繰り広げられていた。それは新島襄の旅とは対照的で、使節団本隊の旅では、日英間の情報をめぐる攻防戦があちこちで展開されていたのである。産業上の情報について、イギリス側は手の内を見せようとせず、問われても肝心の情報をあまり提供しようとしなかった。

また、外交上の思惑が深く関わる情報の提示もあった。例えば、使節団本隊の旅程には、イギリス国内の視察先で頻繁に狩猟 (hunting) 見学が設定されていたが、これには狩猟の重要性を印象づけ、日本国内における居留民の内地旅行を緩和させようと図るイギリス側の意図が潜んでいたのである。『米欧回覧実記』は外交問題に触れていないが、不自然なほど頻繁に登場する狩猟見学に関する記述から浮かび上がるのは、狩猟に絡めたパークスの外交上の思惑であり、同時に、イギリス側に影響されず、むしろイギリスの大規模土地所有者層の生活のあり方などについて、冷静な考察を行っていた日本側の姿勢である。

## 3. 久米邦武の果たした役割と異文化接触

使節団本隊がイギリス滞在中に経験した〈情報をめぐる駆け引き〉を経て集積した情報を、久米邦武は編纂する責務を担ったが、「見た」「見ようとした」ものに加え、「見せられた」ものに対する評価を行なう作業は、〈知〉の論評へ向かう旅でもあった。

『米欧回覧実記』の中で、教育に関する記述は比較的短いが概ね正確で、教育内容についても冷静に評価している。また久米は、学校教育にとどまらず、広い意味で〈知る〉〈学ぶ〉枠組みの中に教育を位置づけており、例えば大英博物館の見学を通して、「博物館ニ觀レハ、其国開化ノ順序、自ラ心目ニ感触ヲ与フモノナリ〈中略〉進歩トハ、旧ヲ舍テ、新キヲ図ルノ謂ニ非ルナリ」(『実記』二、114頁)と評価した。「古今ノ進歩」の歴史を記して後世に伝えたり、博物館によって視覚に訴え感動させたりするなど、人を啓蒙していく教育のあり方は重要であり、それを怠って東西の違いを習性の違いのせいにするのは無策だ(『実記』二、115頁)と戒めている。このように、教育から更に視野を広げ、〈知〉のあり方を模索する議論が『実記』の中で展開されていた。

約4ヶ月に及ぶ岩倉使節団本隊の滞在中を通して、イギリス社会のプラス・マイナス両面を体感したことにより、久米は『実記』の中で、包括的な分析に基づき、イギリス社会の富強の淵源を探り、文明観・歴史観を形成していった。久米はどの陣営からも一定の距離を保ち、冷静な視点で分析を行なったが、これはまさに〈知〉の論評の姿勢と言

えるだろう。儒学者だった久米の起用の成功については、今更申すまでもないので省略するが、最後に久米の歴史観の形成について触れ、本稿を締め括りたい。

帰国後、『米欧回覧実記』の編纂事業に携わった後、久米は洋学ではなく日本古代史研究の道に進んだ。歴史家としては、一貫して実証主義史観の立場をとり続けたという（田中彰 2002、101～103 頁）。だが 1892 年に発表した論文「神道は祭天の古俗」が問題視され、久米は帝国大学教授を追われることとなった<sup>12</sup>。21 世紀の今日から見ると、論文そのものに政治的な意図は見られず、むしろ合理的・客観的に神道を分析した内容だった。洋学ではなく古代史に進み、このような歴史観を抱くに至った久米の後半生は、彼の人生における、〈知〉の論評の次なるステージであった。久米が保ち続けた、合理的とも言える実証主義史観の形成には、岩倉使節団本隊に随行して世界各国の文化に触れ、歴史や文化を大きな枠組みでとらえる姿勢を体得したことと、『実記』編纂の務めが大きく影響したのではなかろうか。そしてこれも異文化接触のもたらした文化創造と言えるのではないかと考えている。

### 主要参考文献一覧

#### 〈一次史料〉

外務省調査部編纂『大日本外交文書』第 4 巻・第 5 巻・第 6 巻（日本国際協会、1938～1939 年）。

『木戸孝允日記』全 3 冊、（日本史籍協会叢書 74～76、東京大学出版会、1932～1933 年）。

久米邦武編・田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記』全 5 冊（岩波文庫、1977～1982 年）。

田中不二麿『理事功程』全 3 冊（文部省、1873 年）。

新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』全 10 巻（同朋舎、1983～1985 年）。

Great Britain, Foreign Office General Correspondence, *Japan*, (F.O. 46), volumes covering the years 1871–1873.

*The Illustrated London News*, (London), 1862, 1872.

*The Jardine Matheson Archives*, Parkes Papers. (Cambridge University Library, Manuscripts Room 所蔵)

#### 〈研究書〉

田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店、2002 年）。

平野健一郎『国際文化論』（東京大学出版会、2000 年）。

太田昭子『ヴィクトリア朝の福澤諭吉と岩倉使節団』（慶應義塾大学法学研究会、2023 年）。

---

12 久米は修史編纂事業に従事し、1888 年に帝国大学教授に就任したが、1892 年に帝国大学を追われた。後年、久米は東京専門学校（現・早稲田大学）に迎えられたが、招請したのは、久米を岩倉使節団の権少外史に推挙した、同郷の大隈重信である。

## 日本文学を題材とするアクティブラーニング

——インターネットを活用した国際的な学術コミュニケーション

ダマソ、フェレイロ・ポッセ

本稿では、文学を題材とした国際コミュニケーションを促すプロジェクトを紹介する。現時点において、このプロジェクトは、まだ始まったばかりで規模が小さいものの、今後の可能性が期待されるため、将来に向けてそのパートナーとなる大学を増やし、プロジェクトを拡大していきたいと考えている。

アクティブラーニングについてはよく知らない方々もいらっしゃるかと思うので、本稿では、まず、アクティブラーニングとは何か、またPBLとは何かということを簡単に説明したい。そのあと、去年（2022年）始めたばかりのプロジェクトとして、2022年と今年（2023年）行った文学セミナーのことについて簡潔に紹介させていただこうと思う。

それに先立ち、国際化について言及しておきたい。ここでいう国際化とは、単に外国の研究者や留学生を日本の大学に受け入れることや、あるいは日本の研究者が海外の学会で発表することだけを指すのではない。今の時代は、インターネットという手段が重要な役割を果たしているため、インターネットを用いた国際化をも考える必要がある。

日本文学の場合、領域固有の閉塞感がどうしても残るように思われることから、どのようにすれば、インターネットという手段を通じて、日本文学と国際化とを引き合わせることができるのか、またそうすることによってどのような成果が得られるのか、という二つの問いが浮上する。加えて、2014年からの中央教育審議会を経て、アクティブラーニングという言葉が教育関係者の間で広まり始めたものの、文学をアクティブラーニングの教材として用いることは非常に難しいとされていることにも言及しておきたい。それはなぜかと言えば、アクティブラーニングを実践するには、指導をする立場にある者が、教室内のディスカッションやグループワークなどの学習活動を促すだけでなく、その活動に関与しながら、そこで生じる認知プロセスを意識しつつ、教授する過程を意図的に組み込む必要があるためである。言い換えれば、教員に求められているのは、テキストを提供し、全員で読んだあとでテキストの解説と批評を中心とする授業を行うだけでなく、ディスカッションおよびグループワークを通じて学習者が思考を外化し、主観的解釈を他者の解釈と比較する中でより妥当な解釈を生み出し、より高次な思考活動にいざなうことである。

以上のことを背景として始まった本セミナーは、広義における国際日本学、より詳細に述べれば日本文学という分野における、ICTを活用したアクティブラーニング型教育の新たな試みであったと言える。なお、本セミナーの特徴は、「問題基盤型学習」(Problem-Based Learning: PBL) という学習法を採用し、その題材として日本の文学作品を用いたところにある。

PBLとは、問題解決に関する能力や態度などを身につける学習のことを指す。PBLは、一部の研究者からは、これまでの教育の歴史において考案された最も革新的な教授法の一つであるとも言われている。PBLでは、学習者は少人数(通常5人から8人)のグループを組み、ある問題解決のために共同学習を行う。PBLにおいては、問題そのものが、学習を進めるための重要な役割を持っている。

その一連の流れを説明する。ここではまず問題が提示され、その問題を解決するために知るべき事柄を明確にした後、自らその学習に取り組んでいくこととなる。換言すれば、学習した知識を問題の解決に応用するということである。

PBLの学習効果として、学習者は、主に以下の五つのことができるようになることが期待されている。

- 1、広くかつ柔軟な知識基盤を構成すること。
- 2、効果的な問題解決スキルを磨くこと。
- 3、自己主導的な学習スキルを身につけること。
- 4、効果的なコラボレーションスキルを身につけること。
- 5、学ぶこと自体について興味を持つこと。

さて、ここで2022年に行ったPBLに基づく文学セミナーについて紹介したい。

図1は学生の募集をかけた際のチラシである。

このプロジェクトを担当した教員を簡単に紹介させていただく。広島大学での同僚である松山由布子先生、神戸大学の永井敦先生、新潟大学の畑有紀先生と私である。プロジェクトの実施において、広島大学の溝渕園子先生にも一部ご支援いただいた。担当教員は全員若手である。

また、実施したセミナーの概要は以下の通りである。セミナーの題目は「第1回 広島大学 国際交流を通じた日本文学セミナー ～芥川龍之介「鼻」における日本文化の特質～」であった。主催組織は広島大学比較日本文化学プロジェクト研究センターで、開催日時は、2022年3月5日(土) 17:30～19:30、3月12日(土) 17:30～19:00、3月19日(土) 17:30～19:00であった。

次に参加者と、利用したICTツールおよびプログラムデザインに関して簡単に紹介したい。本セミナーは日本学を学んでいる国内外の学生を対象にし、PBLという学習方法を通じて、ICTツールを活用した同時双方向で実現した。教材として、上述した芥川龍

**第1回 広島大学 国際的な学生交流を通じた日本文学セミナー**  
**～ 芥川龍之介『鼻』における日本文化の特質 ～**  
**参加学生募集要項**

**1. セミナー概要**

日本について学んでいる学生たちが、共に学ぶためのセミナーです。学生同士でグループを作り、共同で日本文学の作品を読みます。

本セミナーでは、日本の近代を代表する作家、芥川龍之介の小説『鼻』を読みます。『鼻』は、日本の中世の寺院社会を舞台とする作品です。また中世の説話文学を元に執筆された作品としても知られています。このセミナーに参加するにあたって、日本文学の前提知識は不要です。日常会話レベルの日本語力があり、文学に興味のある学生であれば誰でも参加できます。また、『鼻』は比較的短い作品ですが、それでも一人で読みこなすのは簡単ではありません。本セミナーは学生同士でグループを作り、協力しながら作品を読み進めます。学生同士の意見交換や発表の機会もあります。

全3回のグループ学習を通して、日本の文化や文学についての理解を深めていきます。

**2. 主催**

広島大学比較日本文学プロジェクト研究センター

担当教員：松山由布子（広島大学森戸国際高等教育学院）

FERREIRO POSSE DAMASO（広島大学森戸国際高等教育学院）

畑 有紀（新潟大学日本酒学センター）

**3. 開催日（全3回） ※グループワークを行うため、全日程の参加を必須とします。**

2022年 3月 5日（土）17:30～19:30

3月 12日（土）17:30～19:00

3月 19日（土）17:30～19:00

**4. 開催方法**

オンライン（Zoom） ※ セミナーに関する連絡はE-mailにて行います。

**5. 参加条件**

- ・3回のセミナーすべてに参加できること。
- ・教員の指示が日本語で聞き取れること。

**6. 学生募集期間**

2022年2月9日（月）～23日（金）※定員に達し次第締め切ります。

**7. 申し込み方法**

右記のURLより、参加登録をしてください。 <https://forms.gle/aKN4NCC1JS1176yMA>

**8. 問い合わせ先**

広島大学 森戸国際高等教育学院 松山 由布子

図1 第1回PBLセミナー学生募集案内

之介の「鼻」という作品を取り扱った。「鼻」は芥川龍之介の初期作品であり、中世の説話を典拠とした、いわゆる王朝物に分類される作品である。原拠は『今昔物語集』の池の尾の禪智内供の鼻にまつわる説話である。

原拠と芥川の作品、この二作の比較・関連性を分析することによって、文学的な結論はもちろんであるが、近世以前と近代以降の社会背景や、近代日本文学と芥川との関係など様々な幅広い点にも触れることができる。PBLという学習方法を通して「鼻」の持つ文学的多様性を一定のレベルで把握させつつ、以下のことを目指した。①日本文学を題材とするアクティブラーニングの実施、②インターネットを活用した国際的学術コミュニケーションの試み、③海外学生を対象とした日本文学の専門的知識の提供という三点である。

参加者は、国内外の大学で勉強している合計8名の学部生と大学院生である。詳しく述べると、広島大学から4名、スペインのグラナダ大学から3名、中国の山東科技大学から1名の参加者が得られた。これらの学生は、必ずしも日本文学を専攻としているわけではなく、また日本語能力についても多様であった。そのため、必要に応じて英語やスペイン語など、学習者がより快適と感じる言語で支援を行った。

なお、このプログラムでは参加者への単位の付与はなく、同プログラムはあくまで興味のある学生に対する課外活動として提供された。

使用したICTツールに関して述べておく。これについて担当教員と学生たちの連絡にはメールを用いた。また、学生間での連絡は学生たちに自由に選ばせることとしたが、基本的に、チャットアプリとしてLINEまたはWeChatを、電話が必要な場合にはLINEを、それぞれ利用したようである。セッションを行った際にはZoomを利用した。学習者がお互いを知ることができるようにPadletという掲示板型アプリを使用し、各参加者及び各教員が自己紹介記事を投稿した。

PBLのテーマとしては、上述したように、日本の近代と前近代の関係性を中心に取り上げることにした。このPBLでは文学的なアプローチ、すなわち「鼻」という具体的な文学作品の読解を通じて、チーム学習で当該テーマについて考察し、結論を出すことを目指した。

本プログラムのメインテキストに「鼻」を選定した大きな理由は、以上で述べたように「鼻」を素材とすることで様々な検討が可能となるほか、海外の学生は日本の古典と触れ合うきっかけがあまりないといったことが挙げられよう。

本セミナーのデザインを考えた際には、広島大学で開催されたPBLのFD (Faculty Development) 研修教材を参考にしつつ、扱うテーマやプログラム参加者の性質を考慮した上で調整と工夫を加えた。

ここでは、いくつかの工夫を加えた点について説明したい。まず、今回のPBLにおける中心的課題を解決するために、学習者は「鼻」という作品を実際に読む必要があった。しかし、限られた授業時間であることに加えて、さらに語学力や読むスピードなどの差

を考慮すると、これを全員で一緒に読むのは非現実的に思えた。

そのため、セミナーが始まる前に、あらかじめ「鼻」の本文と英語訳、語釈や読解ポイントを示した読解ガイドを参加者に配布し、事前学習として読んでくるようにメールで指示した。さらに、学生の既存知識を補足するために、プログラムでは担当教員からのレクチャーを行うことで、文学関係の専門知識を提供する工夫もした。

最後に工夫したこととして、2週間のPBL内で中間発表の場を設け、各チームのプロジェクトの進行具合を関係者間で共有する機会を確保した。そして、その場で教員から各チームにフィードバックを与え、最終発表に向けてのチーム学習の取り組みを支援した。

本PBLの実践には前例が見当たらないために試験的な側面もある。日本、スペイン、中国の3か国で学ぶ学生が、教員や多国籍の他の学習者と共に「鼻」を読み、意見交換をしながら文学作品を多角的な視点から考察する面白さを実感してもらうことを重視した。

そのなかで行われた中間・最終発表の成果からは、プログラムに参加した学生の思考の深まりを実際に観察することができた。中間発表では「近代の日本人にとっての前近代とは」というテーマの下、「鼻」から読み取れる内容について発表を行った。最終発表では「日本近代と前近代はどのような関係なのか～芥川龍之介「鼻」を通して考える～」という共通題目で発表が行われた。発表の実施に当たっては、各セッションの内容を詳細に決め、時間の配分も細かく行った。

進捗具合や提供した参考文献、レクチャーを通じた専門的な知識は、二つのグループにおいて同様であったにもかかわらず、二つのグループの作品の分析方法、また作品内の近代と前近代の捉え方も異なっていた。それは具体的な分析方針やチーム内の意見の集約を学生のみで行ったためであろう。

こうした学生発表を観察すると、これまで「鼻」をはじめ、日本文学作品を一度も読んだことがない学習者が、2週間という限られた時間の中でも、チームでの共同学習を通じて、非常に興味深く、豊かな考察を展開するに至ったことがわかる。

本プログラム終了後、参加者同意のもとで、授業アンケートを実施した。教育実践を改善するために学習者による自由記述を重要視した。項目1から項目4までは自由記述で、項目5から項目6については5段階のスケールによって数値評価を求めた。

本プログラムでは、PBLというアクティブラーニングを促す教授法と、それを支えるICTツールを活用した教育実践を行い、国際教育としての日本教育の高度化を目指した。その結果、2週間という短期間のみで、参加学生はPBLが求める自己主導的学習を、チームで共同学習しながら最後まで持続できたことが確認された。さらに「鼻」の読解と分析を通じて、各自の視点から日本の近代と前近代の関係性に迫ることができた。

このセミナーに関する詳細情報は、(以下の参考文献欄にある)永井・松山・フェレイロ・畑(2022年)1頁以下に掲載されている<sup>1</sup>。関心のある方々は是非ご一読いただきたい。

1 <https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053185>

次に2023年の第2回セミナーについても紹介する。学生募集を行った際のチラシは以下の通りである(図2)。

第2回 広島大学 国際交流を通じた日本学セミナー

■ 子ども向け雑誌『赤い鳥』を読む ■

このセミナーは、日本国内や海外の大学生が日本について共に学ぶ、3週間のグループ学習です。学生同士でグループを作り、協力して作品を読み進めたあと、皆で意見交換をしながらグループ発表を行います。

今回のセミナーでは、大正時代に子どものために作られた雑誌『赤い鳥』について学びます。参加費は無料です。

日本に興味のある学生の皆さんの参加をお待ちしています。

- **開催日時 (全4回)**
  - 2023年 2月 11日 (土) 17:30~19:30 (JST)
  - 2月 18日 (土) 17:30~19:30 (JST)
  - 2月 25日 (土) 17:30~19:30 (JST)
  - 3月 4日 (土) 17:00~19:30 (JST)
- **開催方法**
  - Zoomによるオンライン開催 (連絡はすべてメールで行います)
- **参加条件**
  - ・ 日本語母語話者 または 日本語能力試験(JLPT) N2レベル以上の日本語能力を有すること
  - ・ 各自でオンライン授業を受ける環境を整えること
  - ・ 第1日目(2月11日)・第4日目(3月4日)には、必ず参加できること

※ グループワークを行うため、4回とも参加することが望ましい
- **募集期間**
  - 2023年1月20日(金)~31日(火) ※ 定員に達し次第、締め切ります
- **申し込み方法**
  - 下記 URL または QRコードから、参加登録をしてください。
  - <https://forms.gle/kwDnVw7mBxe5omDs9>
- **担当教員**
  - ・ FERREIRO POSSE DAMASO (広島大学 森戸国際教育学院)
  - ・ 李 麗 (広島大学 大学院人間社会科学研究所人文学プログラム/文学部)
  - ・ 松山 由布子 (広島大学 森戸国際高等教育学院)
  - ・ 畑 有紀 (新潟大学 日本酒学センター)
  - ・ 永井 敦 (神戸大学 大学教育推進機構グローバル教育センター)
- **問い合わせ先**
  - 松山 由布子



【赤い鳥】創刊号  
Source: Wikimedia Commons



- **主催** ● 広島大学 比較日本文化学プロジェクト研究センター
- **共催** ● 広島大学 ひろしま日本研究イニシアティブ

図2 第2回 PBL セミナー学生募集案内

第2回の担当教員として、前年と同じ教員4名に加え、広島大学の同僚である李麗先生が配置された。サポーターには、溝渕園子先生のほか、広島大学の新井誠先生も加わった。

第2回では「子ども向け雑誌『赤い鳥』を読む」というテーマを新たに設定し、芥川ではなく、『赤い鳥』という、同じ大正時代の児童文学雑誌に目を向けることにした。また、2022年は広島大学比較日本文化学プロジェクト研究センターの主催としていたが、2023年は、この組織のほか、広島大学大学院人間社会科学研究所(研究推進委員会)に置かれたプロジェクト「ひろしま日本研究イニシアティブ」との共催という形で提供された。

開催日は、2023年2月11日(土) 17:30~19:30、2月18日(土) 17:30~19:30、2

月 25 日(土) 17:30 ~ 19:30、3 月 4 日(土) 17:00 ~ 19:30 である。なお、前年と比べて 1 セッションを増やすことにした。その理由は、前年ではディベートが一番面白いところでセッションが終わることが頻繁にあったことから、2023 年では学生に自由にかつ十分にディスカッションできる機会を与えたかったためである。授業スケジュールは、前年と比べればさらに詳細に記されている (図 3)。

第 1 回 [120 分] 松山、ダマソ、畑、李、永井 ○ グループ活動時のファシリテーターは、第 1 回は固定

時間	活動	内容	主担当
17:30	全体	集合・挨拶 [10 分] ※ 全員一言挨拶 (名前と所属大学)	松山・畑
17:40	全体	セミナーオリエンテーション・PBL 解説 [10 分]	ダマソ
17:50	グループ	グループ分け (3 グループ) → グループ活動① ※ アイスブレイク (1 人ずつ自己紹介) [20 分]	A: 松山 B: 李 (永井) C: ダマソ
18:10	全体	教員レクチャー① [10 分] 事前配布資料の確認、『赤い鳥』のティップス・読解ガイド	李
18:20	グループ	グループ活動② [15 分] ※ 感想の共有 ※ Padlet に記入した内容やレクチャーをふまえた内容	A: 松山 B: 李 (永井) C: ダマソ
18:35	全体	各グループの感想の共有 [5 分] ※ 簡単に聞く	畑
18:40	全体	教員レクチャー② [15 分] 「日本文学のなかの近代文学」	ダマソ
18:55	グループ	グループ活動③ [10 分] レクチャーの内容の共有・確認	A: 松山 B: 李 (永井) C: ダマソ
19:05	全体	各グループの感想の共有 [5 分]	畑
19:10	全体	「日本の大正時代の教育が目指したものは — 『赤い鳥』を例として—」 第 2 回: 大正時代・児童雑誌・『赤い鳥』・作品について知る 第 3 回: テーマ「『赤い鳥』における“理想の子ども”とはどのようなものでしょうか?」について、グループ発表 先行研究の配布	畑・永井
19:15	グループ	グループ活動④ [10 分] ※ 予定の確認、グループ活動の連絡ツール確認、リーダーほか役割決め ※ 課題について情報共有、感想の再検討、発表の見直し決め ※ 今後のグループ活動計画 (先行研究を読む)	A: 松山 B: 李 (永井) C: ダマソ
19:25	全体	セミナーまとめ ※ 各グループの計画を簡単に聞く ※ 感想用 Padlet の記入連絡 (次回までに) ※ 次回予告	畑
19:30		終了 → PPT データ・先行研究・感想 Padlet の URL をメール送信	松山

教員は終了後 20:00 まで次回のミーティング

図 3 第 2 回 広島大学 国際交流を通じた日本文学セミナー (2023) 1 回目授業のスケジュール

2023 年の参加人数は、前年と比較すると増えており、15 名も集まった。中国、スペイン、日本のほかにロシア 1 名、韓国 1 名、インドネシア 1 名という結果となった。



図4 Padlet 自己紹介の例

ICT ツールは2022年と同様である。前述したように、2023年は『赤い鳥』をテーマとして設定したことから、それにあたってプログラムの目的も変更する必要が生じた。また、そのテーマに合わせて、大正時代における教育論と子ども観を探求することを目的とした。扱う作品は雑誌『赤い鳥』に掲載された有島武郎の「一房の葡萄」と、林芙美子の「かえる」とした。

左に示す図4は、2023年のPadletの例である。Padletの自己紹介はこういった形で投稿される。画像には教員全員の自己紹介が写っている。学生も同じく投稿しているが、個人情報保護のため、ここではお見せしない。また学生には、各セッション後に、Padletにおいて感想文を投稿する指示もしている。

以上、文学を中心とした国際コミュニケーションを促すプロジェクトとして2022年と2023年に行った取り組みについて紹介してきた。説明が長くなったにもかかわらず清聴いただきましたことにつき、皆様に感謝申し上げたい。

## 参考文献

- C. E. Hmelo-Silver. "Problem-Based Learning: What and How Do Students Learn?" *Educational Psychology Review* 16:3 (2004), pp.235–266.
- W. Hung, D. H. Jonassen, and R. Liu. "Problem-Based Learning." In *Handbook of Research on Educational Communications and Technology* (3rd ed.), edited by J. M. Spector, J. G. van Merriënboer, M. D. Merrill, and M. Driscoll. Lawrence Erlbaum Associates, 2008.

広島大学人材育成推進室『PBL体験プログラム（ファシリテータガイドおよびファシリテータノートつき）学習者ガイド（平成24年9月改訂版）』非公刊、2012年。

溝上慎一「アクティブラーニングとしてのPBL・探求的な学習の理論」、溝上慎一・成田秀夫編『アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習』（東信堂、2016年）。

永井敦、松山由布子、フェレイロ・ダマソ、畑有紀「ICTツールを活用した国際日本学教育の実践——芥川龍之介「鼻」にみる近代化をテーマにしたPBL型授業」『広島大学留学生教育』第26号、2022年。

湯浅且敏、大島純、大島律子「PBLデザインの特徴とその効果の検討」『静岡大学情報学研究』第16巻、2011年。

## 使節団の多角化

——現代の国際日本研究の新たな流れ

ニコラス・ランブレクト

私の専門分野は日本近現代文学で、とりわけ第二次世界大戦後の日本への引揚げに関する文学的表象について研究している。また、大阪大学では、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」という大学院等高度副プログラムで、国際日本研究に関する英語科目を担当している。ここでは、私の研究と教育の両方についてお話ししながら、現在の国際日本研究の新たな流れについて意見を述べさせていただきたい。

まず本稿の構成について説明しておく、最初に「引揚げ文学」というジャンルの歴史と先行研究について紹介したうえで、日本人ではない「引揚者」という、これまでの研究のなかで盲点となることが多かった問題について言及する。そこから焦点を現在の高等教育に移し、大阪大学の「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムに見られる現象、具体的には、どのような学生がどのような動機で国際日本研究を学ぼうとしているのか、また、彼らの意識は国際日本研究を学ぶなかでどのように変化しているのかを見ていく。そして最後に、国際日本研究のこれからの展開について考えてみることにしたい。

ところで、「岩倉使節団 150 周年」を記念するこのイベントで、「戦後の引揚げ文学」を取り上げる理由はどこにあるのだろうか。それは、岩倉使節団の時代から、日本の文化、社会、政治も、そして東アジアやより広い地域における日本の役割も、日本への人流と、日本からの人流によって、絶えず形成されてきたからである。岩倉使節団以降、そのような人流が最も大規模なかたちで現れたのは、帝国日本の侵略的な領土拡大にもなう人の大量移動と、帝国崩壊後の大量帰還であった。

日本帝国崩壊後の大量の人の移動は、世界史的観点からも最大級のマイグレーションであり、その移動の重要性は、近年、戦後日本に引揚げてきた数百万人の日本人に焦点を当てた多くの研究により浮き彫りにされている。人文学分野においては、影響力のある文学作品がどのように引揚げを描き、その文学作品は戦後の大衆意識のなかの引揚げ概念をいかに変容させてきたかについてあらためて注目する研究が盛んになってきているといえる。

では、このような引揚げ文学研究は、どのように展開してきたのだろうか。引揚げ文

学作品のうち、最も代表的なものは、1949年に藤原ていが発表した小説『流れる星は生きている』である。作家藤原ていの実体験に基づいたこの小説は、満州で終戦を迎えた母が、幼い子供を連れ、満州から北朝鮮へ逃げ、長い冬を北朝鮮で過ごしたのち、必死に南朝鮮を目指し、さまざまな悲惨な体験を経て、一年後によく日本への引揚げに成功するという物語である。この小説はベストセラーになり、映画化もされ、朝鮮戦争の前にすでに朝鮮語に翻訳されて、朝鮮半島でもベストセラーになった。

その後も引揚げを扱う文学作品は数多く登場した。そのなかには、宮尾登美子の『朱夏』（1980～1985年連載）のように作家自身の満州引揚げ体験を小説化したものや、安部公房の小説『けものたちは故郷をめざす』（1957年）のように作家自身が引揚者でありながらかなり虚構性の高い作品もある。昨日の牛村圭報告のなかで触れられていた竹山道雄の『ビルマの豎琴』（1946年）も、竹山自身は引揚者ではなかったが、見方によっては引揚げ文学に含めることができるかもしれない。また、なかにし礼の『赤い月』（1999～2000年連載）のように、21世紀に入っても引揚げに関する文学作品は絶えることなく書き継がれている。

そのような状況のもと、引揚げ体験を扱う作品の分析に挑んだ優れた研究は、ずいぶん以前から生み出されてきた。特に日本近現代史の視点から作家たちの引揚げ体験を分析した研究が重要な蓄積としてあり、また文学の研究においても、1970年代からすでに、引揚げ経験を持つ作家たちが「外地引揚派」と呼ばれて分析されることがしばしばあった（詳しくは原佑介「『引揚者』文学から世界植民者文学へ——小林勝、アルベール・カミュ、植民地喪失」『立命館言語文化研究』24巻4号、2013年の137～138頁を参照すべし）。しかし、初めて「引揚げ文学」という言葉を用いてジャンルを定義しようとした研究が現れたのは、2000年代の後半に至ってからのことであった。

「引揚げ文学」というカテゴリーの意義を最も強く主張した研究は、朴裕河『引揚げ文学論序説』（人文書院、2016年）であるが、同書の著者は2009年の論文においてすでに、「日本の戦後文学に引揚げ体験および引揚げ体験の後遺症とでも呼ぶべき素材を取り扱った表現者たちが多数存在したことを改めて指摘し、彼らの試みを《引揚げ文学》と命名しておきたい」と述べている（朴裕河2009、123頁）。朴裕河は、それまでの日本文学研究が「引揚げ文学」という対象の把握の仕方を欠いていたことに違和感を抱き、このような欠如に戦後日本の脱植民地化の抱える問題を見出した。

北米では、ちょうど同じ時期に、歴史家のローリー・ワット (Lori Watt) が、*When Empire Comes Home: Repatriation and Reintegration in Postwar Japan* (Harvard University Asia Center, 2009) を出版した。この著書では、引揚げの表象が大きく取り上げられており、戦後日本の社会構造を考えるうえで重要な要素であることが指摘されている。ワットは、たとえば次のように述べている。

As if to challenge the bureaucratic and social attempts to contain, neutralize, and perhaps move

beyond the history of the end of the colonies, repatriation-related short stories and novels, songs, and films embraced that history and explored many of the issues that had been censored, suppressed, or elided by other accounts of the process. (Watt 2009, p. 139)

ワットもまた、朴裕河と同じ時期に、検閲などにより見えなくされていた歴史的経験を捉えなおす手がかりとなりうるものとして、引揚げ文学に注目していたわけである。この分析は、近年の英語圏の日本研究において重要な成果の一つだといえるだろう。

現在、日本の引揚げ文学に関するこのような研究は、戦後日本文学のカノンを捉えなおすための重要な視角の一つとなっている。より広い文脈では、このような研究は、戦後の人の移動と未完の脱植民地化が現代日本の形成に果たした役割を理解しようとするときに、不可欠なものである。日本国内で行われてきた文学研究があったからこそ、朴裕河やワットの研究が可能となったことはいうまでもないが、日本内外両方の経験を持ち、活躍している研究者だからこそ、「引揚げ文学」のような、陰に隠されたものを照らし出しうる新たな研究対象を立てることができたともいえるだろう。ここにこそ、国際日本研究の重要性と必要性があるといえる。昨日コメンテーターを務めた五十嵐恵邦は、米国を拠点として英語と日本語で研究活動を行っており、復員兵への言及も含む著書『敗戦と戦後のあいだで——遅れて帰りし者たち』の日本語版（筑摩書房、2012年）と英語版（*Homecomings: The Belated Return of Japan's Lost Soldiers*, Columbia University Press, 2016）との両方を自身で執筆しているが、国際日本研究の実践としてはそのようなかたちが一番効果的なのではないだろうか。

ただし、現在の引揚げ研究も引揚げ文学研究も、日本の歴史だけあるいは日本の文明だけを理解するために行われているわけではないはずである。戦後日本への引揚げに関する研究は、別の場所で今も発生しているディアスポラ問題や難民問題を理解するための示唆を含むものでなければならない。そのためには、歴史的事実をナショナルな枠組みで分析する傾向から脱却する必要があると私は考える。

たとえば、最近の英語圏では、同じ船を使ってなされた、戦後日本への引揚げと朝鮮半島への送還を合わせて扱う研究が現れ始めている。マシュー・オーガスティン（Matthew Augustine）の“The Limits of Decolonization”（*International Journal of Korean History*, 2017）やジョナサン・ブルとスティーブン・アイビンス（Jonathan Bull and Steven Ivings）の“Korean Repatriation and Historical Memory in Postwar Japan”（*The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, 2020）がその例である。オーガスティン論文はSCAPの朝鮮人送還対策を分析したものであり、ブルとアイビンス論文は舞鶴湾で起きた数百人のコリアンの人びとが亡くなった浮島丸事件の記憶についてのものである。これらの論文は両方とも英語のrepatriationという言葉を使用し、朝鮮半島への送還を分析しているが、このrepatriationという単語は「引揚げ」の英訳にもなっている。つまり、これらの研究は、「日本からの送還」と「日本への引揚げ」を同じ言葉で捉えることで、しばしば日本独特の歴史として語られる「引揚げ」を、よ

り広い人の移動の文脈に置き換えて可視化することを可能にし始めているのである。

こうしたテーマと関わって、最近日本語で刊行された学術書としては、『帝国のはざまを生きる——交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（みずき書林、2022年）がある。本書は、日文研の国際共同研究の成果として刊行された論文集で、ここには、在日コリアン作家李恢成の樺太から「内地」への移動を「引揚げ」と解釈して論じた拙稿が収録されている。日本人ではない作家李恢成が、日本人と同じように「外地から内地へ引揚げる体験」について書いた作品は、引揚げがはらむ多様性を示している。このような研究プロジェクトを、日文研と「国際日本研究」コンソーシアムが支援の対象に選定したのは、とても意義の大きいことであったと考える。

そして、今後この種の研究は、より多様な方向へと発展していくだろう。先述したように、日本の引揚げ文学をアジアやそのほかの地域の文学と合わせて研究することによってのみ、戦後の日本への引揚げを、戦後の大規模な海外移住、旧植民地間の移住、その後の冷戦に強く影響された国際的な人の移動の文脈のなかで適切かつ正確に捉えることができるようになる。つまり、日本の引揚げ文学の研究の現状は、国際日本研究の必要性、とりわけそれが多角的に展開される必要性を示しているといえるだろう。

そのような国際日本研究が展開されるようにするためには、その担い手となるべき研究者を育成することのできる教育プログラムの役割が極めて重要となる。多くの機関で「国際日本研究」が掲げられ、「国際日本研究」コンソーシアムが結成されるに至った背景には、このような問題意識があるといつてよい。筆者が勤務している大阪大学大学院人文学研究科の大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」(GJSプログラム)の発展を紹介しておく、図1に示したように、このプログラムの登録者数は順調に増加しており、なおかつ、図2のように、英語で受講するGJSプログラム上級科目の履修者数も、プログラム外からの履修者も含め、ここ数年大幅に増加している。

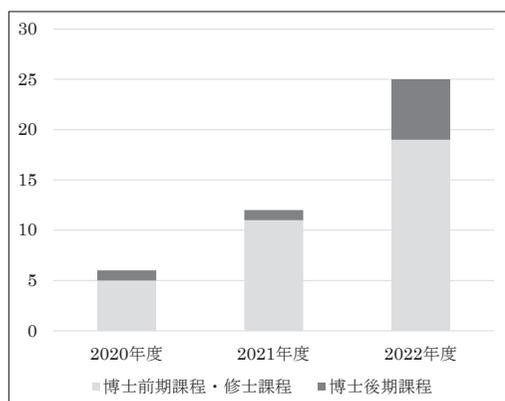


図1 GJSプログラムの登録者数

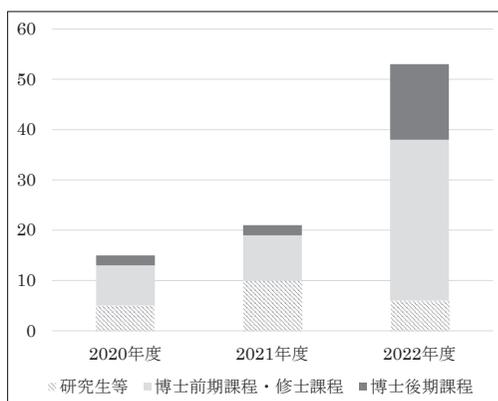


図2 英語で受講するGJSプログラム上級科目の履修者数の増加

これらの科目がどのような内容のものか簡単に紹介しておく、大まかにいって、三つに分けることができる。まず一つめは、学生が自分の専門的な研究内容を英語で発信するスキルを身につけるための科目である。日本で行われている新たな研究を海外のオーディエンスに向けて発信できる人材は、今の時代にどうしても必要であるだけでなく、日本語以外の言葉で自分の研究を考えなおすことで、日本語で書いている時に無意識に働いている偏見、思い込み、もしくは不完全な前提に気づくという効果もある。二つめは、逆に、海外で行われている日本研究を学ぶための科目である。幅広いトピックスを扱う海外の論文を授業内で講読することにより、日本国内の研究とは異なる観点から問題を捉えなおす機会を得ることができる。そして三つめは、翻訳関連の科目や、日本研究の境界を再考する科目である。かなり専門性の高い内容であるが、このような科目の受講生が特に増加している。このなかには、私が教えている引揚げ文学に関する授業も含まれている。

ではなぜ、このように受講者が増えていったのだろうか。最後に、その背景について、簡単に記しておきたい。

まず、日本の高等教育機関で学ぶ学生たちの国際的な流動性の高まりにその一因を求めることができるだろう。履修者の多くが、そのような流動性の一端を担っている。よくも悪くも、世界各国から日本へ学びにきた学生は、今まで日本でのみ過ごしてきた学生よりも、英語が使用言語となっている授業を積極的に履修するため、海外からの学生が増えれば増えるほど、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」科目の履修生も増えていくだろう。また、日本人の学生にそのニーズを感じられる環境を作らないかぎり、彼らは現在起きている国際日本研究ブームに置いていかれるおそれがあるため、国際日本研究の必要性を日本人学生にも分かりやすく示す必要がある。

また、国際的な流動性が高まりつつあるなか、日本研究は、それ自体を目的とするのではなく、グローバルな理論的枠組みの批判的検証に貢献する有用なケーススタディとして機能する必要があると認識されるようになってきた。特に、国際日本研究の領域において3言語、4言語を使用することは、研究の視点を刷新する上で、極めて重要であることが意識されつつある。とりわけ私が専門とする文学研究の領域では、多言語で活躍できる人材こそがこれまでになかった視点を獲得していくことは間違いない。

この新たな研究の視点は、日本を単に中心化したり脱中心化したりするのではなく、多角的な視座のもと日本を適切に位置づけることを可能にする。このような視座を方法化していくことこそが、今後の国際日本研究には必要であるだろう。「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムの担当者として、私自身もそのような方法化に貢献していきたいと考えている。

## 参考文献

- 蘭信三・松田利彦・李洪章・原佑介・坂部晶子・八尾祥平編『帝国のはざまを生きる——交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（みずき書林、2022年）。
- 五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで——遅れて帰りし者たち』（筑摩選書、2012年）。
- 朴裕河『引揚げ文学論序説——新たなポストコロニアルへ』（人文書院、2016年）。
- 朴裕河「引揚げ文学論序説——戦後文学のわすれもの」『日本學報』第81号、2009年。
- 原佑介「「引揚者」文学から世界植民者文学へ——小林勝、アルベール・カミュ、植民地喪失」『立命館言語文化研究』24巻4号、2013年。
- Augustine, Matthew. “The Limits of Decolonization: American Occupiers and the ‘Korean Problem’ in Japan, 1945–1948.” *International Journal of Korean History* 22:1 (2017), pp. 43–75.
- Bull, Jonathan and Steven Iving. “Korean Repatriation and Historical Memory in Postwar Japan: Remembering the Ukishima-maru Incident at Maizuru and Shimokita.” *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus* 18:21:5 (2020), pp. 1–21.
- Igarashi, Yoshikuni. *Homecomings: The Belated Return of Japan’s Lost Soldiers*. Columbia University Press, 2016.
- Watt, Lori. *When Empire Comes Home: Repatriation and Reintegration in Postwar Japan*. Harvard University Asia Center, 2009.

## 奪衣婆信仰の展開

### ——境界と衣服

坂 知尋

私は、日本の地獄イメージの展開、その中でも特に女性の表象に興味を持っている。日本の地獄風景には、男性の亡者と共に女性の亡者も描かれ、女性だけが落ちるとされる地獄もある。例えば、女性が血の池地獄に落ちることについて、女性は出産時や月経時の出血で大地や水を汚し、結果的に穢れた水が仏菩薩などに備えられるためと説かれる。また、石女地獄（あるいは不産女地獄）に落ちる理由として、子どもを産まなかったためという理由が挙げられる。このほかにも、嫉妬心から女性の姿が蛇に変わり、嫉妬の苦しみにとらわれ続ける両婦地獄があったり、女性が嬰兒を殺したことが地獄に落ちる原因と説明されたりもする。

地獄で苛まれる存在として女性に焦点が当たる一方、亡者を裁いたり罰したりする役割は閻魔や十王、筋骨隆々とした獄卒など、基本的には男性の登場人物が担うことが多い。獄卒の中にはまれに女の獄卒がいたり、男性の性欲の象徴としての女性が現れたりする。しかし、彼女たちに個別の名前や特定の性格が与えられているわけではない。その中で奪衣婆は、独自の名前と個性、役割を持った唯一の存在といえる。

奪衣婆は、人が死後に渡るとされる三途の川のほとりに現れ、死者の衣を剥ぎ取る役割を担う。彼女は11～12世紀頃から宗教書や経典に現れ始め、時代と共に性格や役割、他の神仏との関係性、利益などが変化していった。江戸時代には、閻魔の相棒、女性の救済者、子どもの守り神、安産、病氣平癒や裁縫上達など様々な現世利益の神として信仰されるようになった。

博士論文の指導教員で卒業後もサポートし続けてくださっているパトリシア・フィスター先生はじめ、多くの方々にご協力いただき、これまでの奪衣婆研究をまとめた英語書籍『Datsueba the Clothes Snatcher: The Evolution of a Japanese Folk Deity from Hell Figure to Popular Savior』（坂 2022）を刊行することができた。今回はその内容を簡単に紹介した後、書籍化に向けて取り組む間に感じたことなどを、「国際日本研究の課題と方法」というテーマに結びつけてみたい。

まず、第1章ではアジアにおける地獄の概念の展開について触れ、章の後半ではインド神話や仏教経典、道教経典に現れる女神たちと奪衣婆を比較検討した。特に道教の十

王経典に現れる孟婆という女神との類似点には興味をそそられた。

奪衣婆は日本版の十王経典『地藏十王経』の中に現れる。経典によると、人は死後、閻魔を含む10人の王により生前の行いを取り調べられるという。奪衣婆は2番目の王の宮殿の前を流れる三途の川のほとりで死者の衣を剥ぎ取る。

一方、道教版の十王経典ともいえる『玉歴』『玉歴至宝鈔』などでは1番目と10番目の王が裁判官の役割を担い、その他の王は様々な地獄の管理者として登場する。孟婆は10番目の王の宮殿のそばで、これから生まれ変わる人々の記憶を消すために特別な飲み物を与えるという。

奪衣婆と孟婆の記述や表象、役割、登場するタイミングは異なるが、どちらも十王信仰が展開する中で登場してきた老女であるということ、またこの二人が奪う衣服や記憶は、個人のアイデンティティと密接に関わっており、彼女たちがそれらを奪い去る役割を果たすのは大変興味深い。

第2章では、宗教説話や仏教経典、御伽草子などの文学作品に登場する奪衣婆の記述を整理した。

第3章では、主に地獄の絵画表現の中の奪衣婆を追いかけ、奪衣婆の視覚表現の基本的な要素について考察した。奪衣婆の描かれ方にはかなり幅があり、視覚表現の多様さは、おそらく、奪衣婆の容姿についての経典や宗教書の記述が漠然としているからであると考えられる。

とはいえ、奪衣婆が視覚化される際には、恐ろしげな老女であることや、川や樹木、衣服あるいは布といった要素が含まれることが多い(図1)。この要素は江戸時代の仏教図像集『仏像図彙』や『増補仏像図彙』にも採用されている(図2)。



図1 8枚組ポストカード『地獄極楽』のうち奪衣婆が描かれたもの(執筆者蔵)

一例だけではあるが、若くて美しい奪衣婆の事例にも遭遇した。『志度寺縁起』や『志度寺縁起絵』に登場する奪衣婆は、20歳くらいの美しい女官として登場し、一般的な奪衣婆のイメージとはある意味真逆の姿をしている。しかし、香川県の志度寺に実際に祀られる奪衣婆は、恐ろしげな老女像である。

第4章では、参詣曼荼羅中に現れる奪衣婆の姿を考察した。参詣曼荼羅には、寺社や霊山の風景、参拝する人々の様子、関連する伝説や物語、習俗などが描かれる。そこに奪衣婆が描かれたとき、宗教空間に隠された意味や物語を伝える役割を果たすことを示した。

第5章では、特に奪衣婆信仰における儀式や宗教実践に注目した。個人的に興味をかきたてられたのは、奪衣婆信仰の中で布や衣服の意味や役割が再解釈されていく点だ。経典において奪衣婆が剥ぎ取る衣は罪人の衣であり、死者の罪を象徴している。しかし、実際の奪衣婆信仰においては布の役割や機能、象徴するものは様々で、経典の記述の範囲内に収まるものではない。例えば、奪衣婆の彫像に死装束や僧侶の衣装を着せて祀ることがある。ここには、死後に奪衣婆に剥ぎ取られないように生前に衣服を納めておこうという意図や、僧侶の衣装によって救済者としての性格を強調しようとする意図がうかがわれる。また、儀式で使われる布や衣服がこの世とあの世を仲介する役割を果たしたり、救済を保証する装置として機能したりする。さらに、奪衣婆と布の関係が大胆に解釈され、奪衣婆が裁縫上達の神として設定される事例もある。

このように布や衣服が様々に解釈されることで、奪衣婆は本来の地獄の鬼婆という性格に加え、救済の神、あるいは多種多様な現世利益の神であるという性格をも獲得した。とはいえ奪衣婆本来の性格が忘れられたわけではなく、その時々に応じて三途の川のほとりの鬼婆としての面が強調されたり、そのほかの性格に焦点が当てられたりと奪衣婆信仰は豊かな広がりを見せている。

以上、書籍の内容について簡潔に述べたが、出版に向けて取り組む過程でいただいた助言や、それらに基づいた変更点などは、「国際日本研究の課題と方法」というテーマと関わるところがあるように思う。

出版の流れとしては、まず初めに出版社 Brill の編集者にご連絡し、Brill が学会に出展



図2 葬頭河婆 (奪衣婆)

出典：土佐秀信画『仏像図彙』三  
武田伝右衛門 明治33。  
国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/id/3442143>(参照2023-05-18)

した機会に合わせてご相談した。後日、出版社から送られてきた質問表に回答する形で、原稿の内容、読者層、また原稿の査読者としてふさわしいと思われる研究者等について記述した。書籍化に向けての変更点を説明する項目もあった。ここでは、より広い層に受け入れられやすくするため、先行研究についての言及を簡潔にすることや、地獄の展開について古代インドからまとめた部分を簡潔にすることを提案した。さらに、日本語や中国語などの知識がない読者に配慮し、日本語と中国語の表記を本文から抜き、代わりに用語リストを付けることについても言及した。

その後、質問票で述べた変更点に沿って修正した原稿を提出し、外部の査読者からの評価と出版委員会の評価に基づいた追加の助言を受け取った。特に外部査読者が修正点を具体的に示してくださったことにはとても感謝している。

そして、受け取った評価や指摘を考慮し修正しつつ、編集作業に入った。この段階で強く感じたのはエディターの重要性だった。Brill からエディター候補者として数名を勧められたが、最終的には日本文化や日本美術についての学術書籍の翻訳・編集の経験が豊富な井元智香子氏にお願いすることにした。井元氏に丁寧に目を配っていただいたおかげで、効果的な文章になったと思う。特に、表現を洗練させ、話の流れを円滑にし、議論に引き込むような構造にさせていただけたことには大変感謝している。経験豊富かつ日本文化や日本美術史の分野に詳しいエディターに出会えたことは私にとって大変幸運だった。

編集作業と並行し、絵画や文献のタイトルに英訳を付けていく作業も行った。本文から日本語表記を抜いたため、資料の内容が分からなくなるのを防ぐためであったが、複数の言語を行き来することによって、より丁寧に資料を扱えるという発見につながった。

さて、このような書籍刊行の体験を「国際日本研究の課題と方法」と結びつけるため、2017年に日文研で開催された国際シンポジウムの報告書『なぜ国際日本研究なのか——「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』（松田ほか編 2018）をヒントにした。この報告書では、日本研究という分野が現れた背景、国際日本研究の普及について、国際的に日本を研究するということはどういうことなのか、どんな利点や困難があるのか、など多岐にわたって議論をされており、とても勉強になった。

報告書の中で特に考えさせられたのは、宇野田尚哉氏のご論文「『日本学』の30年——1980年代と2010年代のあいだ」（宇野田 2018）だった。宇野田氏は、2010年代の日本の日本研究が置かれている状況について、日本の日本研究のガラパゴス化や海外の日本研究のジャパンバッシングという点について議論している。そして、後者の点に関連して、日本研究者ならばほとんどの人が日本語を使用するのだから、日本研究は日本語ですればよいという考え方もあるとしながらも、この立場を取ると研究成果がより広い研究の文脈で参照される可能性が制限されると指摘する。また、近い将来、世界の日本研究の中で日本語によってなされる日本研究は、ネイティブインフォーマントの役割を果たすにすぎなくなってしまうのではないかと、日本語の論文は研究業績として認められにくく

なってしまうのではないかという懸念を示してもいる（宇野田 2018、55-56 頁）。

宇野田氏によって指摘されたことは、漠然とではあるが私も感じていた。日本研究は日本語だけですればいいとは思わない。しかし、ほとんどの日本研究者は日本語を使用するので、わざわざ自分の苦手なほうの言語で書かなくてもいいのではないかと思うこともたまにはある。とはいえ、私の研究テーマは仏教学や仏教美術史とも関わるものであり、これらの領域には日本語を使用しない研究者も多くいるため、英語で発信したほうが可能性が広がるというのは本当にそのとおりだと考えている。

例えば、奪衣婆に関連してこれから模索していきたいと個人的に思っているテーマとして、インドや中国の神話や伝説、宗教書に描かれる女神との比較がある。このような研究をする場合には、多言語で発信するほうが効果的だろう。ただ、私は日本語と英語しか使えないので、日本語圏外に発信しようとするとう英語になる。

多言語で、私の場合は英語で発信することの重要さを感じている一方で、研究者に限らなければ、私の研究テーマに興味を示してくれるのは日本語を第一言語とする人たちのほうが多いようにも思う。また、調査を行うにあたり、資料閲覧、儀式見学、画像使用など、寺院や地域の方々にご協力をいただいている。成果を報告すると喜んでくださるが、「日本語じゃないとよく分からない」とおっしゃられることもあり、きちんと報告できていないことについては心苦しく思っている。今後は自分の可能な範囲で、日本語と英語の両方で発信するように努めていきたい。

## 参考文献

- 宇野田尚哉「『日本学』の30年——1980年代と2010年代のあいだ」松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和編『なぜ国際日本研究なのか——「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』（晃洋書房、2018年）。
- 松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和編『なぜ国際日本研究なのか——「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』（晃洋書房、2018年）。
- Saka Chihiro. *Datsueba the Clothes Snatcher: The Evolution of a Japanese Folk Deity from Hell Figure to Popular Savior*. Brill, 2022.

# 新たな国際秩序と日本の役割

田中明彦

私はもともと国際政治の理論と実証分析を行ってきた研究者だが、現在は JICA の理事長として、どこの国にどれだけ、どういう技術協力をやるかとか、どれだけの円借款でどういうプロジェクトをつくるかという事業に取り組んでいる。今回はこの場を借りて、新たな国際秩序、すなわち、いまの世界をどのように解釈し、その中で日本がどのようなことをしなければならないかということについて、私なりの考えを述べることにする。

あえて「岩倉使節団 150 周年」ということに関連させて言えば、およそ岩倉使節団が欧米に行った頃と比べて、いま地球地表面の気温は 1 度ほど高くなっていることにまず注目すべきであろう。現在の世界は、この気候変動という、地球物理システムと社会システムとの相互作用によって起こる現象に大きく影響を受けている。

さらに、この気候変動という状況の中で、またもう一つ社会システムと地球の生態システムとの相互作用が大きな影響をもたらしている。新型コロナウイルス感染症のパンデミックがその劇的な現れだ。気候変動というような物理システムの現象と、新型コロナウイルス感染症という生命システムの現象と、人間と人間が織りなす社会システムが複雑に相互作用して、現在危機的とも言うべき状況に世界はある。

人間と人間が相互作用する社会システムの現象の中で、最も衝撃的だったのは、昨年 2 月、ちょうど 1 年前ぐらいのロシアのウクライナ侵攻である。いま世界は気候変動という物理システム、それから新型コロナウイルス感染症という生命システム、それからロシアのウクライナ侵攻を初めとする、あるいは米中対立を初めとする社会システム、この三つが複雑に絡まり合った複合的危機の中にある。

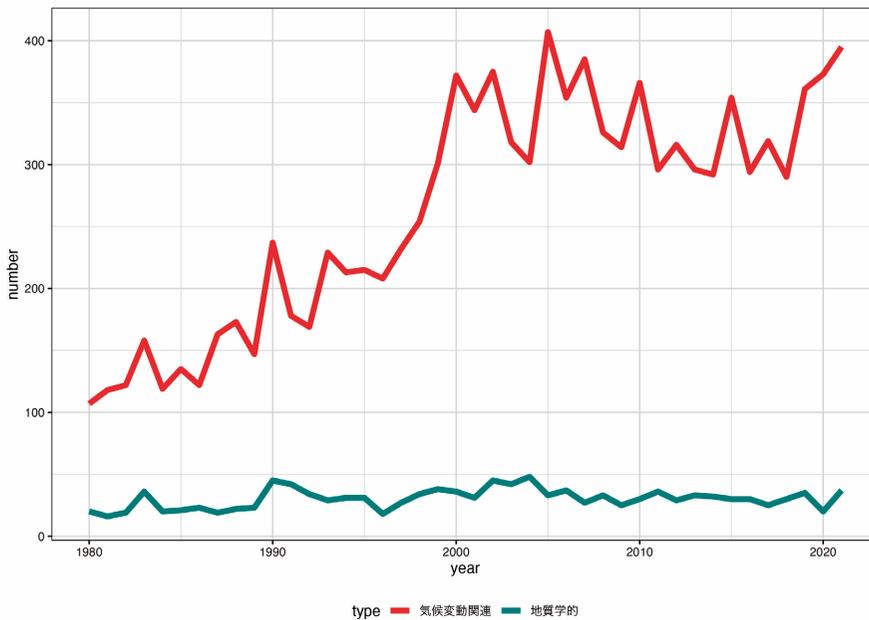
まず気候変動で言えば、これはまさに 19 世紀の産業化以前と比べて、いまの気候変動で地球の温暖化が進んでいる。具体的には、気候変動とは多くの場合、自然災害という形になって現れる（図表 1）。このグラフは、ルーバン・カトリック大学の災害研究センター（CRED）の EM-DAT という網羅的な災害データから筆者がグラフ化したものである<sup>1</sup>。赤線は、20 世紀末から 21 世紀にかけての気候変動由来の自然災害、つまり集中豪雨とか台風とか干ばつとか、あるいは森林災害である。そして、こちらの水色の線は、地質学的な自然災害、つまり地震や津波などの災害のグラフである。これを比較してみ

---

1 <https://www.emdat.be/>

ると、地質学的な自然災害はそれほど変化がなく、同じような頻度で起こっているのに対して、気候変動由来の自然災害は 20 世紀末にかなり急上昇して、高い頻度で起きていることがわかる。

これは、日本でも集中豪雨等がこの 21 世紀に入ってからかなり頻繁に起きていることから明らかである。そして世界を見渡すと、オーストラリアでもアメリカのカリフォルニアでも、森林の火災が非常に多くなっている。それから、アフリカで言えばソマリアなどは、このところずっと干ばつが続いている。現状我々は、気候変動由来の大きな影響を大きく受けているのである。



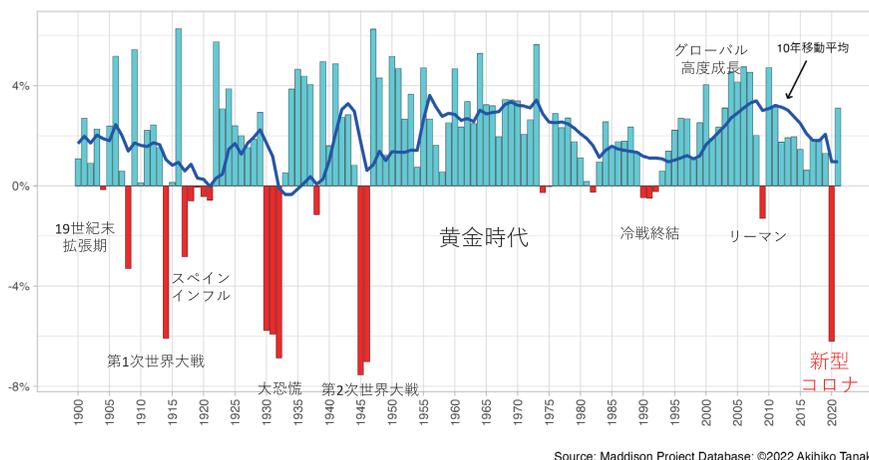
Source: EMDAT, ©2022 Akihiko Tanaka

図表 1 自然災害の数：気候変動関連と地質学的

次のグラフは、20 世紀の間の経済を示した図で、これは経済史の大家の故アンガス・マディソン教授が開発し、現在後継者たちが継続している一人当たり GDP の推計データを利用し、世界全体の一人当たり GDP（一人当たりの世界総生産）の成長率を筆者が計算し、20 世紀初めから現在に至るまでの成長率をグラフにしたものである（図表 2）<sup>2</sup>。赤

2 データは、Maddison Project Database, version 2018. Bolt, Jutta, Robert Inklaar, Herman de Jong and Jan Luiten van Zanden (2018), "Rebasing 'Maddison': new income comparisons and the shape of long-run economic development," Maddison Project Working paper 10; <https://www.rug.nl/ggdc/historicaldevelopment/maddison/data/mpd2018.xlsx> によるものであるが、2019 年以降は、世界銀行の World Development Indicators のデータの世界全体の一人当たり GDP（PPP）のデー

がマイナス成長、青がプラス成長である。世界全体として、マイナス5%とか6%になる 때가時々起こってきたのが20世紀である。まず赤の部分が目立つのが、1915年から1920年前後にかけてである。このマイナス成長の原因は、第一次世界大戦及びスペインインフルエンザの影響とみられる。



図表2 一人当たり世界総生産成長率

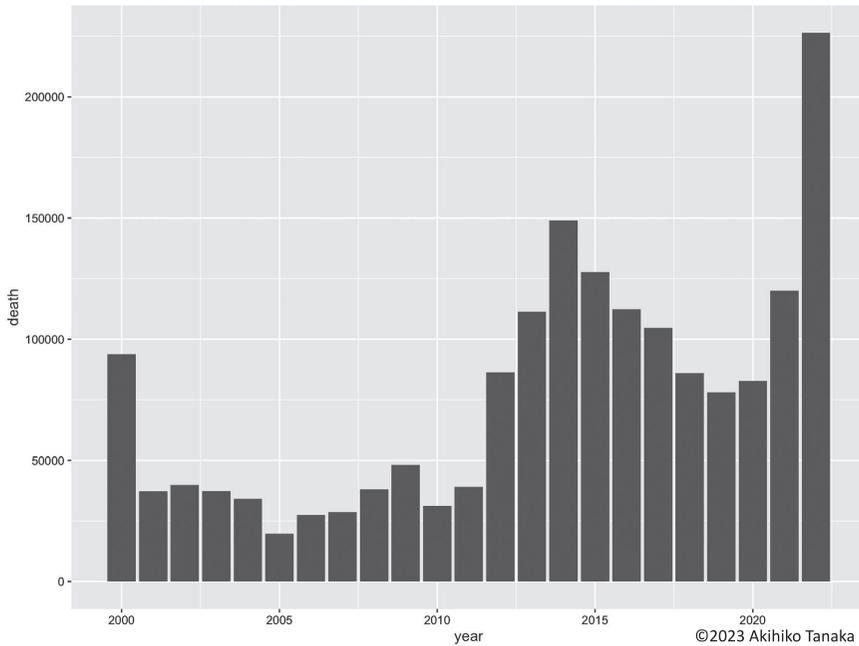
これとまさに比較可能なのが、現在の2020年以降の新型コロナウイルス感染症による影響が引き起こしたマイナス成長である。生命システムと社会システムの相互作用もたらしたパンデミックが、20世紀の前半にひきつづいて21世紀前半にも世界経済に打撃を与えたのである。

1930年代の大恐慌や第二次世界大戦も大変なマイナス成長をもたらした。1973年前後の石油危機、冷戦終結またリーマンブラザースの破綻に端を発する世界金融危機も世界全体にマイナス成長をもたらした。

そして現在、気候変動でいろいろな災害が増え、1世紀に1回の大パンデミックが起きるさなかで発生したのが、社会システム内の現象であるところのウクライナ戦争だった。ここでは、世界の国際紛争を体系的に収録しているスウェーデンのウプサラ大学のデータベース(UCDP)から21世紀に入ってからの戦死者のグラフを作成した(図表3)<sup>3</sup>。2000年にはエチオピアとエリトリアの戦争では、7~8万人の犠牲者が出たが、その後、21世紀に入ってしばらく低い水準で続いていた。それが2012年~2015年にかけて、シリアの内戦で犠牲者が増加した。2015年ぐらいからシリア内戦も徐々に烈度は低下して

タから成長率を計算した。 <https://datatopics.worldbank.org/world-development-indicators/>

3 [https://ucdp.uu.se/downloads/index.html#ged\\_global](https://ucdp.uu.se/downloads/index.html#ged_global)



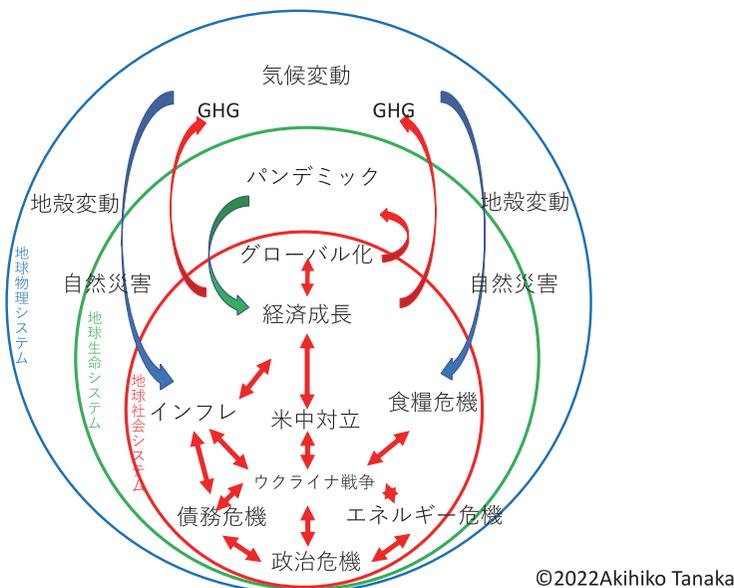
図表 3 国際紛争による死者数

いて、2020年あたりに至るわけであるが、その後またエチオピアの内戦とかアフガニスタンの不安定化が続いた後、2022年にはウクライナ戦争が起きてしまい、21世紀に入って最大の軍事紛争の犠牲者が現在生じているという状況である。

これまで検討してきた現在の世界における状況を、地球物理システム、地球生命システム、地球社会システムの三つのシステムの関連という形で図表4のように表すことができる。

気候変動問題は、まさに人間の社会システムが生み出す産業化、工業化の結果、温室効果ガス、GHGが地球上に増えていった結果発生した現象だ。その気候変動が様々な気候変動由来の災害をもたらし、自然災害を生命システムに与え、それから社会システムにも影響を及ぼすというフィードバックが働いてしまっている。

地球生命システムでは、人間に感染するウイルスがある種の確率で発生する。その一つがCOVID-19であって、2019年の末に発生して、2020年の3月ぐらいには世界中のパンデミックになった。これは社会システム全体がグローバル化しているということなしには考えにくいことである。21世紀の初め頃と比べても、2019年の段階の国際的な人の移動というのは相当大きくなっていて、それがまさにパンデミックが拡散する要因となり、先ほど示したようなマイナス成長を生み出してしまったのである。



図表 4 三つのシステムからの複合危機

ただ、社会システムはそれ自体として非常に複雑な相互作用を持っている。20世紀から21世紀にかけての時代は、世界全体で見ると大変な経済成長の時代であった。これも先ほどのグラフ（図表2）に戻れば、第二次世界大戦後、おおむね世界の経済成長率はずっとプラスで続いているわけであり、しばしば世界経済の「黄金時代」と言われた。一旦冷戦終結のところで下がったが、2008年のリーマンショックぐらいまでは再び大変な高度成長を遂げている。日本は冷戦後、経済が停滞したのでこの時代を高度成長の時代とは感じにくいですが、世界全体で見ると、この冷戦が終わってから21世紀にかけての時代というのは、大変な高度成長の時代であったと言える。

この高度成長が社会システムの中で何をもたらしたかと言えば、これは世界の中の経済力の強い国々の成長が不均等に発展するということによって、国力のバランスが大きく変化するという事態をもたらした。まさにそれが、後述するように、米中対立の背景にあるわけである。

すでに述べたように、物理システムや生命システムによって起こる干ばつや洪水、そしてパンデミックなど自然災害によって、世界各地では食糧危機が起きていた。そこにウクライナ戦争が起きたため、戦争の結果、食糧危機はさらに深刻化し、さらにエネルギー危機をもたらし、そのエネルギー危機がまたインフレの原因になる。インフレになると、これをなんとか制御しようとする有力国の中央銀行が金利を上げるため、金利を上げることによって為替レートが変動する。金利上昇と為替変動の結果、開発途上国の中で、かなり借金を増やしていた国に債務危機を引き起こすという現象が起き、この債務危機は、去年のスリランカであったように政治危機ももたらすのである。このように、

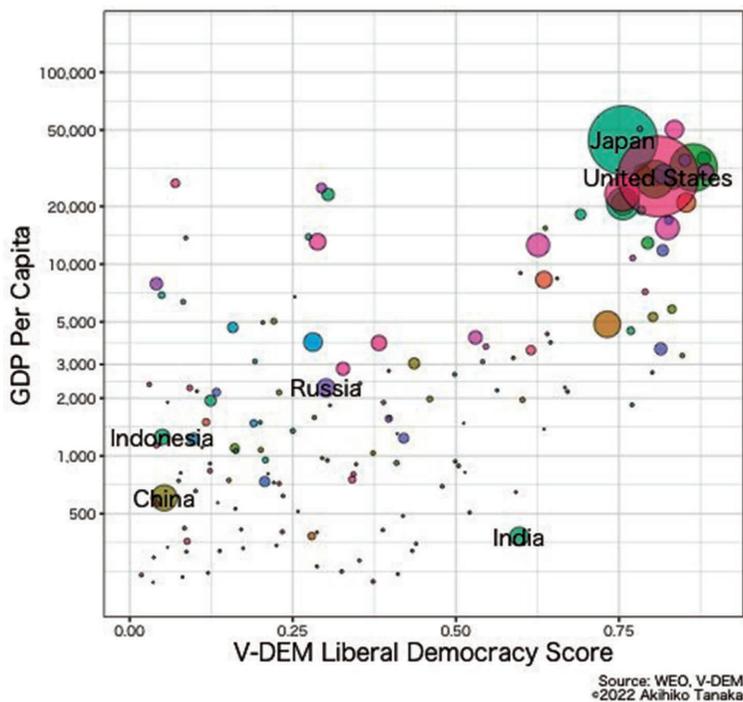
いま、ありとあらゆる危機が次から次へと起こっているという状況にあるのではないかとと思われるのである。

その中で、こうした危機をどのようにマネージするかということこそが国際関係の課題となっている。世界にはさまざまな主体があるが、依然として最大の資源を意図的に動員できるのは国家である。そして国家の中でも、もっとも国力のある国がどう行動するかが、複合的危機への対処において決定的となるのである。現段階で最も国力のある国と言えば、アメリカと中国という二つの大国であり、その他西欧や日本などの経済大国ということになろう。これらの有力国の協力によってのみ、多くの危機への対処が可能となる。しかし、世界的課題の困難なことは、これらの有力国の間の関係自体が危機を悪化させる可能性もあることなのである。

以下では、有力国の中でも最大の米中関係の展開を、データと図でもって少し検討してみたい（図表5、6）。図表5は1995年の段階で、縦軸に一人当たりの国内総生産、つまり生活水準を示している。上に行けば行くほど生活水準が高くて、下に行くと生活水準が低い。横軸は、これはスウェーデンのヨーテボリ大学にあるV-Dem研究所という、世界各国の自由主義的な民主主義度を計測する作業をしている研究所が発表しているリベラルデモクラシスコアである。0が最も専制的で1が最も自由主義的で民主的ということになる。

そして国ごとに円の大きさとGDPを表している。縦軸は一人当たりのGDPで生活水準であるが、円は全体としての経済規模を示している。一番右上のほうにUnited Statesと書いてあるピンク色の丸があり、その隣に日本があり、この当時はアメリカが世界第1位の経済大国で、日本はアメリカに次いで2番目の経済大国だったということが示されている。

1995年、つまり冷戦が終わって少し経った時点で、全体の分布を俯瞰してみると、右上に豊かな民主主義国が位置しており、左下のほうに、貧しく民主主義的でない国が位置し、多くの国が左下から右上に向かう線上に分布している。かつて1950年代頃から、「近代化論」と言われた考え方が提示され、それによると、経済発展により国が豊かになれば政治体制も民主主義的になるという傾向があると言われてきた。1995年のこの図は、まさに左下から右上に国々が分布しており、現在左下にある国々も徐々に右上に向かっていくのではないかと期待されたのである。実際、韓国とか台湾は1980年代ぐらいから権威主義体制の中で経済発展をしたが、1990年代になって民主化・自由化が進んだ。まさに近代化論が指し示すような経路を韓国や台湾は指し示した。

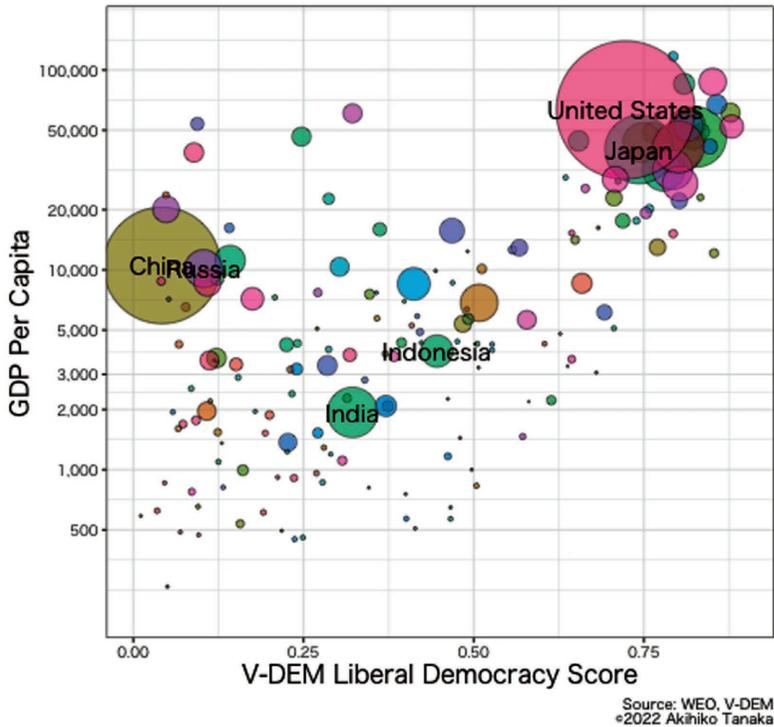


図表 5 Liberty, Well-being, Power: 1995

ここで焦点となったのが中国である。中国は1995年の時点で言うと、一人当たりGDPは1,000ドルに達せず、政治体制は民主主義度が非常に低い。インドネシアもそのぐらいの位置にある。この中国に対して、アメリカのクリントン政権は、封じ込めや敵対政策でなく、関与政策（engagement policy）という政策をとった。中国との関係を増大させ、国際社会に引き入れた。典型的にはWTO加盟を実現し、世界経済の中核に中国を招き入れた。この政策の背景の一つには、中国が国際システムに参入して経済発展すれば、中国もいずれは自由主義的な方向に向かうであろうという期待があったからである。

実際にどうなったか。図表6に同じグラフの2020年の分布を示してある。中国は、経済規模は拡大し2010年にはGDPで日本を抜いて世界第二の経済大国になり、一人当たりGDPも上昇する。しかし、自由主義度は全く上がらず、図表6では、左下から左上に向かったことが示される。

対比的に言えば、1995年には中国と似たような位置にあったインドネシアは、2020年には右上の方向に位置している。一方ロシアは冷戦が終わって、自由主義度が向上し、1995年には中国やインドネシアより右上にあった。その後プーチン時代になって、生活水準は向上したが、全体の動きとしては左上のほうに斜めに上がっていくというパターンを示した。



図表 6 Liberty, Well-being, Power: 2020

結局、2020年の段階のこの配置を見て、どのようなことが言えるか。右上のほうにいわゆる民主主義的な諸国が固まっている。これは1995年とほとんど変わらない。しかし、それからかなりの国が経済成長を遂げているので、インドにしてもインドネシアにしてもかなり円が大きくなっているということが言える。

ただし、1995年と比べて圧倒的に違うのは、左上のほぼ同じぐらいの位置に、ロシアと中国という巨大な存在が登場しているということである。ロシア経済の規模自体は大して大きくないが、一方で中国はまさにアメリカに匹敵しそうな段階になっているのである。この情勢を見て、アメリカは関与政策を放棄することになった。トランプ政権からバイデン政権になっても、この中国に対する認識についてはほとんど変化しなかった。2020年10月に発表されたアメリカの国家安全保障戦略では、ロシアは自由で開かれた国際秩序の直近のさしせまった脅威だと述べた上で、それに対して中国は「国際秩序をつくり変えようとする意図を持って、そのため経済的、外向的、軍事的な力を増大させつつある唯一の競争者」だと語り、「冷戦後の時代は完全に終わり、次の展開をめぐる主要国の競争が進行している」。そして、インド・太平洋が世界の経済成長を牽引していると語るとともに、20世紀の地政学の中心地であるという言い方をしているのである。

ここで出てくるインド・太平洋という言葉も、21世紀になってから使われるように

なった地域概念である。インド洋と太平洋を両方合わせた二つのオーシャンの周辺領域のことをインド・パシフィックと言うようになり、21世紀に入ってしばらくしてから使う人が登場した。けれども、一番この単語を世界中に広める上で大きな影響力を持ったのは、日本の安倍元総理である。日本は1993年以来、アフリカ諸国や国際機関と一緒にアフリカ開発会議（TICAD）を開催してきたが、2016年にケニアのナイロビで開かれたこの会議で安倍元総理は、「自由で開かれた二つの大洋」ということを語った。これを日本の外務省が「自由で開かれたインド太平洋」という標語でまとめて日本外交のビジョンだとしてきた。そして安倍元総理の発言以降、多くの国が同じような言い方で、インド太平洋が大事だということを述べるようになった。

このインド太平洋が重要になったという時代背景には、まず超長期の経済面での変化がある。つまり、19世紀が北大西洋を中心とする経済成長の時代だったとすれば、20世紀後半、アジア太平洋地域が経済発展の中心になった。これが21世紀に入って、インドやバングラデシュなどの南アジアも経済発展し、そして中東、それからアフリカ諸国も経済発展するということになって、世界全体の経済の重心が、アジア太平洋というよりは、よりインド洋のほうに寄ったところに移ってきたという、そういう超長期の趨勢を物語っているのである。

ただ、これに加えて、このインド太平洋地域という経済ダイナミズムの中心にどのような国々が影響力を持つのかということで、2010年代後半以降、関心が強まってきた。とりわけ中国の習近平氏が、2013年から「一帯一路」という考え方で、中国の経済進出をこのインド太平洋、それからユーラシアで行うようになって、これらの地域で中国の影響力が大きくなるという傾向が出てきたわけである。

まさにそのときにアメリカが、中国は唯一の競争者であると認識することになった。その結果、インド太平洋という地域が世界経済を牽引しているとともに、21世紀の地政学、geopoliticsの中心地であるという話になるのである。このようなgeopoliticsの構図というのは、さらにウクライナで戦争が起きているという現象を同時に考えたときに、どのような国際政治の構造、配置図になっているのかということが問題になる。

やや単純化し過ぎかもしれないが、私は次のように考えている。すなわち、いまの米中対立について、これを新しい冷戦と呼ぶか呼ばないかというのはなかなか政策担当者によっても違ふし、それから現状分析をしている人間によっても異なるが、特にバイデン氏は昨日の新聞でも、アメリカは新しい冷戦を望まないと言っているので、新しい冷戦という言葉は使いたくないという気持ちがあると思われる。

ただし、かつての冷戦の特徴の一つは、政治経済体制をめぐる対立、イデオロギー対立であるとともに、軍事力、経済力の対立という側面が強かったわけで、その面で言えば、現在の米中対立というのでも、政治経済体制の競争、それから経済力、軍事力の競争という側面があるので、冷戦的な部分がないとは言えない。

それで、図表7では1950年と2022年の対比をしてみた。1950年の昔の冷戦のときは、

米ソはベルリンを挟んで対決していた。ヨーロッパ正面が決定的な舞台とみなされ、ここでもって双方が最大の軍事的・経済的な資源を投入して対峙していた。

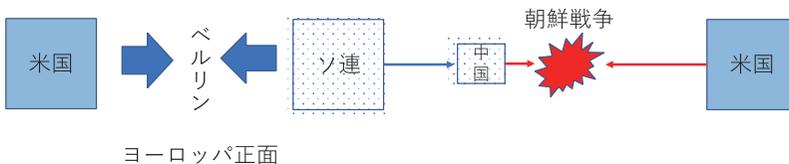
ただ、このヨーロッパ正面での対決の最中に、1950年の6月に東アジアで朝鮮戦争が起きた。この朝鮮戦争は第二次世界大戦後、最初の大規模な、通常戦力による古典的な戦争であり、たまたまソ連が安保理事会を欠席していたので、拒否権を使うことなく、国連安保理決議で北朝鮮は侵略者だと認定されて、国連軍が編成され、実際に朝鮮半島で戦争が行われた。そして、アメリカが直ちに介入して、当初劣勢だったものが、1950年9月以降、仁川から上陸したアメリカ軍が北へ上っていくと、1950年の暮れには中国が介入するという形で、当時としてみても巨大な戦争になった。

この朝鮮戦争は、ソ連が直接には介入しないという建前をとったため、米ソの全面戦争にはならなかった。大変犠牲の大きい戦争であったけれども、言わば地域を限定した戦争であった。つまり1950年の構図は、米ソはヨーロッパ正面でベルリンを挟んで対決している中で、地域限定的な戦争が朝鮮半島で起きたという構図である。

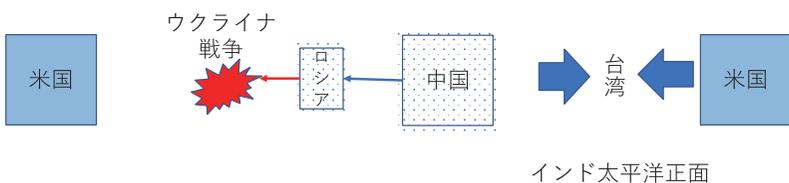
他方2022年はどうかという、先ほど来のアメリカの国家安全保障戦略に出ているような考え方からすると、アメリカにとって最大の競争相手は中国であって、アメリカと中国はインド太平洋正面で対峙している。この対決の争点は台湾であり、台湾海峡で戦争が起きれば、第三次世界大戦になってしまうかもしれないという、そういう状況の中で、ロシアがウクライナに攻めていったということである。

このロシアのウクライナ侵攻に対して、アメリカをはじめとしてヨーロッパ諸国がウクライナを支援していることは当然であるけれども、アメリカのバイデン政権もそしてヨーロッパ諸国も、それでは米欧はロシアと戦争するかという、ロシアと戦争する気

## 1950年



## 2022年



図表7 対立の構図：1950年と2022年

はないと主張は一貫している。その意味で、ウクライナ戦争はやはり、現在の米中対立の中での全面的な軍事紛争になっているわけではない。中国もロシアをそれほど積極的に目に見える形で支援しているわけではない。

そのため、ウクライナ戦争は、米中対立を全面的にシンボライズする戦争になっているかという点、そのように見なすことはできない。1950年の朝鮮戦争のように、現在のウクライナ戦争は地域を限定して戦われており、最大の対決国同士の戦争になっているわけではない。そういう構図がいまの国際政治、あるいは地政学の特徴ではないかと思われるのである。

これまでの議論をまとめてみると、地球物理システム、地球生命システムが地球社会システムと相互作用して、世界的な複合的危機のもとにあるが、その中で、危機を管理すべき国際関係の最大の特徴は、冷戦時代を彷彿させるような米中対立の下ウクライナで地域限定的な戦争が起きるという状態にあるということになる。この状態をさらに言い換えるとどのようなようになるか。

第一は、米中対立と言いつつ表してきた競争の側面がある。しかしそれに加えて、人間と自然との関係、気候変動とか、それからパンデミックとかを考えると、人間が協力しなければならないという課題が存在する。

競争の側面で言えば、まず何と言ってもいま、実際起きているウクライナ戦争が問題になる。これはどちらが優勢になるのかということが、今後の国際秩序に非常に大きな影響を与える。さらに、インド・太平洋での地政学的対立がある。この世界経済の中心地に今後なっていくであろう地域で、どのような国々が有力な地位に着くのかということも、今後の国際秩序を評価する上で大事な点になると思われる。

また図表6で示した、右側のほうの自由主義的な民主制の国々と、左側の非民主主義的な権威主義の国々、この間の競争がどのようなようになるのかということも大きなテーマになるであろう。

パンデミックが起こって最初の1年とか2年は、民主主義の危機と言われることが多かった。パンデミックへの対応について多くの民主主義諸国が、なかなかうまく対応できず、犠牲者を増やしたというようなこともあり、その中でアメリカ合衆国のトランプ大統領のように、選挙の結果を認めないで、支持者が議会で乱入するというようなことが起きたりしたこともあった。それから、それなりに民主化に向かうのではないかと期待されたような、ミャンマーのような国でクーデターが起こって、民主化への移行が挫折するということがあった。民主主義が後退していると言われたのである。

しかしながら、直近の過去1年ぐらいのところを振り返ってみると、それなりに民主主義の強靱さを示す事例もでてくるようになった。アメリカではバイデン政権が誕生し、ブラジルも選挙結果を認めない人たちが議会を占拠したけれども、それでも最後には選挙の結果を受けて新しい政権が成立している。それ以外の世界の国々でも、いろいろなところで選挙が行われ、波乱はあれど最終的に選挙結果を認めるという形で政権交代が

実現しており、かつて危機的と言われた状態よりは、民主主義もそれなりに強靱性があるのではないかと言える状態でもある。

それからもう一つ。以上のウクライナ戦争、インド・太平洋の地政学的対立とか政治体制と並んで、最近非常に強調されているのが経済安全保障である。経済の動向が安全保障にどのような影響を与えるかという観点から物事を見た場合、対立する相手側陣営に過度に経済的に依存してしまうと、安全保障面でも弱点が生まれることになる。そのため、アメリカで見られるように最先端の半導体の生産については、中国には技術を提供しない、流出させないようにしており、サプライチェーンの再編ということも課題になってきている。

しかしながら、こうした競争的側面を無視することはできないが、それだけが現在の世界の危機的状況を表しているわけではない。1950年の冷戦のときには、それほど認識されることのなかった状況が、21世紀には相当強く現れてきているからである。それは、繰返しになるが、物理システムと生命システムと社会システムが複合して危機を生み出しているという現実である。まず、気候変動の問題であり、パンデミックを経験した世界においては、グローバルヘルスの問題を考えないわけにはいかない。途上国を大変苦しめている債務問題も考えないわけにはいかない。いま途上国にとって最大の債権国は中国であるので、その中国とそれ以外の債権国が協力しないと債務問題は解決しないわけである。

さらにインド・太平洋というのが経済のダイナミズムの中心であるといっても、ここで対立ばかりしていたら、せっかく経済成長の可能性のある地域をうまく成長させることができないということもある。そのため、今後の国際秩序に関して見ると、競争の側面と協調の必要性が非常に強く望まれるようになってきているのである。

果たして日本はどのような役割を果たすことができるのか。日本の役割を考えてみても、やはり競争の側面と協調の必要性の両面を考えなければならない。中国が強大化し、ロシアが戦争を仕掛けるという、権威主義体制台頭への対処が求められているのである。

まず、ウクライナ戦争に関連して言えば、これは第二次世界大戦後の紛争解決手段としての武力行使は禁止するという国際連合憲章の規範を無視したものである。戦争違法化秩序、戦争は違法なものであるという秩序を維持しようとするれば、ロシアが勝利するということがあるはずなので、その手段を考えなければならない。日本は軍事支援をするわけではないので、経済制裁を続けるとともに、ウクライナに対する民生面での支援を継続するということになるかと思われる。そして、戦争が仮に早く終わるといふこと、あるいは戦争が終わらなくても、それなりにウクライナのかなりの地域で復興ということができれば、その復興に対する支援をしていかなければならないということであろう。

最近少しメディアで報道していただいたことであるけれども、JICAは、かなり長い間カンボジアで地雷除去の援助を実施してきたので、ウクライナについても、できるだけ

早い機会に地雷探知システムと地雷除去の機具を提供して、地雷除去に貢献し、さらには瓦礫の処理、そして必要なインフラ整備への協力を現在企画している。そういうことを日本としても進める必要があると思われる。

それから、インド・太平洋に関連して言えば、やはり最大の焦点は台湾海峡の平和である。冷戦がコールドなままで終結に至ったのは、人類にとって大変幸いなことで、それはひとえにベルリンを焦点とした米ソ戦争が起きなかったからである。いまの米中対立も世界全体に決定的な悪影響を与えないためには、台湾海峡で軍事衝突が起きないようにするということが一番重要である。そのためにはもちろん中国との外交的な話し合いは重要であるが、これまでの中国の言動から見ると、やはりバイデン政権が言うような総合的抑止力、中国が台湾海峡で戦争を計画しても、中国側が短時間で勝利することはできないのみならず、中国の被る損害が莫大なものとなるという状況をつくっていくことが必要だと思われる。

インド・太平洋全体では、自由で開かれた秩序を維持するための外交努力が重要である。これまでも、アジア太平洋を中心に様々な枠組みがある。例えば、APECや東アジア首脳会議、CTPPPとかRCEPとか、今度バイデン氏が始めたIPEF、ASEANを中心とした枠組み、日本、アメリカ、オーストラリア、インドのQUADと言われる枠組み、それからヨーロッパ諸国との連携、こういうものを活用した外交を推し進めていく必要があるかと思われる。それから、これもJICAが行っていることではあるけれども、この地域の海上で自由な航行ができるようになるための海上保安能力、コーストガードの能力を向上させるということが必要であろう。

他に大事なこととしては、やはり民主主義諸国との協調ということである。先ほどのグラフ(図表6)をご覧になっていただくと、右下のほうには結構民主主義度が進んでいるけれども、経済成長が非常に低い国はまだ存在している。権威主義でないと経済成長ができないという考え方に対抗するためには、やはり自由主義的な民主主義国が経済成長できる、あるいは様々な問題解決ができるということを示していくことが必要だと思われる。そのための協調、あるいは支援というのを日本は行っていくべきではないであろうか。

経済安全保障のための協調的な枠組みも必要であろう。全ての経済安全保障上、重要なものを全部国産化するというのは、現実的に言うと非常に困難で、効率も悪い。友好諸国との間で、先端的なものについてはサプライチェーンを再構築する必要が出てくるのではないかと思われる。

また、やや標語的であるが、SDGs、持続可能な開発目標、とりわけ日本政府がここ20年ぐらいずっと強調してきた「人間の安全保障」という考え方、これらのための活動を行うべきでもあろう。気候変動について言えば、まずもって第三の経済大国である日本は、自らが言ったコミットメントを果たすという必要がある。2050年までにカーボンニュートラルを達成するというのを、着実に実施していく必要があるのである。それ

に加えて、途上国支援ということで、開発途上国での再生可能エネルギーの利用、省エネのインフラ、これは主に大都市の鉄道であったり地下鉄であったり、自動車に頼らないで公共交通網を使って移動できるという形にしていくということが、やはりエネルギーの排出を減らすためにも必要であろう。

気候変動によってほぼ必然的に発生する自然災害に対する防災対策についても、支援していかなければならない。大災害が起きると、直ちに人道的支援をしなければならないわけであるけれども、人道的支援だけで終わりにしてしまうと、またその次の大災害が起きたときに、同じことの繰り返しになってしまう。日本では阪神・淡路大震災、東日本大震災以来、「創造的復興」ということが言われているが、JICAでは対外的にはビルド・バック・ベターと言って、大災害の後には、やはり再建する以上は、次の大きな災害が来ても、耐えられるような投資を考えていかなければならないだろうということを強調しているところである。

グローバルヘルスも重要である。日本はG7のサミットの中で、常に保健について重視してきている。エイズとかマラリアとか結核の対策のためのグローバルファンドがいまかなり活躍しているが、これを一番最初につくるためにリードしたのは、日本であった。今後もこういうことをやっていかなければならない。

債務問題も、今後の開発途上国の状況を考えると、中国に協力してもらわなければ本当に何もできない。外交的に中国に強く働きかける必要が出てくる。また、インド太平洋は地政学的に大事ではあるけれども、やはりその背景として、長期の経済成長、を達成することで、この地域にまだかなりの程度で残っている極度の貧困層を減らすことが必要である。それには地域の連結性強化、とりわけアフリカなどでは農業支援が大事である。さらに、そうしたベーシックな支援と並んで、いまアフリカのかんりの地域では、ITに関する知識の向上とともにスタートアップをつくらうという熱意が非常に強くなっている。日本でスタートアップをつくらうとしている人たちとも一緒になって、スタートアップ企業をつくって経済成長につなげていければよいのではないだろうか。

人間の安全保障の最も難しいところは、紛争継続地域の紛争を何とか終結に持っていくことである。日本は直接軍事行使をするわけではないが、JICAでも紛争後の地域への社会経済開発を行って、平和の配当を多くの人々の目に見える形にすることによって平和の定着状態をつくらうとしている。最近で言えば、フィリピンのミンダナオとか、それから南スーダンなどでは、そのような社会経済開発が、平和の定着に効果を現し始めたのではないかとと言えるような傾向が続いている。

この百年に一度とも言えるような複合的な危機の中で、一国がなし得ることは大変限られている。ここに日本の役割ということで幾つか列挙したが、日本だけで取り組んでも実現の可能性はそれほど高くはない。できる限り多くの国やNGOなどを巻き込んで、現在の混沌とした国際状況に、いささかでも貢献することができればよいのではないかと考える次第である。



## 第3部

### 日本文明の再構築

——文明多極化時代の国際日本研究／国際日本学



## グローバル関係学から見た「国際日本学」の役割

酒井啓子

私の専門は、イラクの地域研究、特に現代政治である。一方で、学部では国際関係論を専攻していた。これまで、方法論的にどっちつかずではっきりしていない、といった批判を受けてきたが、言い方を変えれば地域研究と国際関係論の長所と短所両方を見てきたともいえるのではと考えている。そこから、地域研究と国際関係論のいいところ、悪いところを見ながら、それを何とか長所だけを集めて別の視座をつくれなかなどと考えて、このグローバル関係学という発想が生まれたのである。

まず私が実施してきた「グローバル関係学」のプロジェクトを説明したい。2016年から5年間にわたり、科学研究費補助金新学術領域研究に採択されて、2021年まで、「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立」という題目の研究事業を行ってきた。その略称が「グローバル関係学」である。正確に言えば、英語では Relational Studies on Global Crises (グローバル危機を分析する関係性学)で、グローバルな危機が起こったときに、それを関係性の視点から分析していくのだという学問、ということになり、グローバル関係学という略称だとややニュアンスが違ってしまっているので、あまり適切ではないのだが。

その学術的な成果は、2020～2021年に七巻本の「グローバル関係学」というシリーズとして岩波書店から出版した。プロジェクトには40人近い研究者が関与し、中でも社会科学が中心ではあるが、文化人類学、歴史、文学といったような分野の研究者も多く参加した。

その七巻本の冒頭に「マニフェスト」を掲げて、何を目指してこのグローバル関係学を立ち上げたかについて、説明している。長くなるが、下に引用する。

二一世紀に入り、戦争や内戦、ISなどの武装勢力の台頭、各国での路上抗議行動の広がりなど、世界各地で動乱が多発している。その結果難民など大規模な人の移動が発生し、特に欧米では反動で排外主義が進行している。二〇二〇年初頭から世界で爆発的な流行を見せた新型コロナウイルス感染症の蔓延は、まさに「グローバルな危機」を体現したものに他ならない。

現代の「グローバルな危機」は、広範な波及性や連鎖性、唐突さといった点で、従来の危機と異なる新しい側面を持つ。その多くが、特に非欧米の非国家主体など、

これまでの学問では十分に「見え」なかった要素によって起こされており、それゆえに、特に欧米の国家主体を主に分析対象としてきた既存の学問分野では、十分に解明できない。それは、既存の学問分野が「主語」のある、主体の明確な出来事しか分析対象とせず、伝統的、古典的な主体中心主義の視座を取っているからである。

それに対して、本叢書が提唱する「グローバル関係学」は、主体よりもその間で交錯するさまざまな「関係性」を分析することに重きを置く。そこでは、さまざまな関係性が双方向、複方向的に交錯し連鎖するなかで出来事が起きると考え、そしてそうした関係性の網のなかにこそ、澱や瘤のように「主体」が浮き彫りになると考えるのである。

「グローバル関係学」とは、狭い範囲の地域共同体から超領域的グローバルなネットワークまで、非欧米世界を含めた世界を総体として把握する視座を確立し、主体中心的視座で「見えなかった／見なかった」ものを、関係中心的視座から「見える」ようにすることを目的とする（酒井 2020、v 頁）。

具体的には、近年、特に 21 世紀になってグローバルに拡散する危機、つまりグローバルな危機ともいうべき事態が多く発生していることを問題視するところから、問題意識は始まっている。今でこそ、米中関係、あるいはウクライナ・ロシア関係という国家間戦争が再び発生しているので、若干、何を今さらと言われかねない部分があるかもしれないが、このプロジェクトを立ち上げたときに、国際政治の中で最も焦点が当たっていたのは非国家主体による紛争、衝突であった。つまり 9.11 であり、その後のイラク戦争やアフガニスタン戦争などの対テロ戦争で、欧米諸国が直面するグローバルなテロ、その中でも「イスラーム国」の登場といったような現象が喫緊の課題であった。いわゆるメアリー・カルドーなどが言った非国家主体による非正規戦争、つまり国家間戦争ではない非国家主体による戦争といったようなものが 21 世紀に増えているが、これをどう捉えるかという問題に直面していたといえる（カルドー 2003）。

さらには、2010～2011 年の「アラブの春」、その後の香港の雨傘運動やオキュパイ・ウォール・ストリートなどの形で、グローバルな運動の展開が、国家主体ではなくて非国家主体によって担われている。こうした出来事の多くは、国際関係、国際政治学の研究者も地域研究者も予想ができなかった。研究者の仕事は予想することではないが、その世界を読み解けなかったということは、研究者として反省が必要なのではないかと考えたのである。

そこで、国家であれ非国家であれ、明確に目に見えている主体の動きにばかり光を当てるのではなく、その主体の背後にある様々な動態、流れ、日本的に言うと空気といったものに目を向けることが必要なのではないか、と思い至ったのである。そうした主体の背景にある流れの変化を捉えないことには、グローバルに拡散するような危機がなぜ、どのように発生するのかは見えないのではないか。これを問うてみたいと考えたのである。

その「主体の背景にある流れ」といったものを、ここでは関係性という言葉で呼んでいる。まず主体ありきではなく、そもそもいろいろなアクターの関係がまず変化することによって、そこから主体が生まれてくる、あるいは主語として呼ばれるようなものが生まれてくる。このように、見方をちょっと変えてみたらどうだろうかというのが、私のこのグローバル関係学の提案であった。

言い換えれば、アメリカはどう動く、日本はどう動く、イラクはどう動く、クウェートはどう動くといったような、国家主体だけを見ては見えなかったことが様々にあることは事実で、その見えなかったものをどうやって見るかということが、今、人文社会科学が直面している課題で、このグローバル関係学の最大の目的なのである。日文研が掲げる国際日本学の、接合域と多面性に焦点を絞って国際日本学を進めていく、という主張、また地域を固定し閉じた統一体として捉えるのではなく、それが内包する様々な異質さを掘り起こし、それらの葛藤と交流を経て文化が形成されるダイナミズムを考察するものである、という主張もまた、グローバル関係学が目指す視点であると考えられるのではないか。

さて、このグローバル関係学の考え方について、もう少し詳しく説明していきたい。上記のマニフェストで取り上げたように、21世紀におけるグローバルな危機を見ることができなかつたのはなぜか、それが起こった原因となる物事の本質が見えていなかったのはなぜかという点について、振り返る。9.11やアラブの春などを見通せなかつた21世紀の国際政治学者は一体何をやっていたのだろうと、自分自身がまずは反省しなければならない。今、発生しているロシアのウクライナ侵攻もまた、ほぼ誰も予測していなかつた。こうした予測不能性が21世紀の紛争の特徴の一つだと考える。

我々の目が曇っているわけではないとして、これまでの国際関係論に基づく分析がなぜ十分でなかつたのか、物事の本質を見るができなかつたのかということを見ると、そこには三つの問題が考えられる。

第一の問題は、国際関係論（IR）、あるいは国際政治学の学問的な由来に問題があり、見てこなかつたということだ。IRは、基本的には国家間の関係を見る学問である。さらに、IRは戦後の欧米諸国で発展した、二度の世界大戦に対応して生まれてきた学問である。そのため、学問の出発点として、欧米先進国としてこの世界の政治をどう把握するか、という視点があるのは明確である。現在はグローバルIRであるとか批判的IRであるとか、欧米先進国に機軸を置いたIRではない様々な試みがなされているが、基本的には欧米先進国が非欧米諸国や敵国に対してどう対処するかを論ずる学問なのである。

図1は、IRが視野にいれている世界を表したものである。図の下部は網がかかって見えなくなっているが、実際にはそこには「第三世界」、あるいは最近の表現では「グローバルサウス」があり、それぞれにグローバルサウスの社会レベル、村落共同体やエスニシティ、宗教・宗派などの細かいコミュニティが位置している。しかし、IRが見ているのは図の上部のみ、超国家主体か国家主体を対象にするだけである。第三世界でも国家

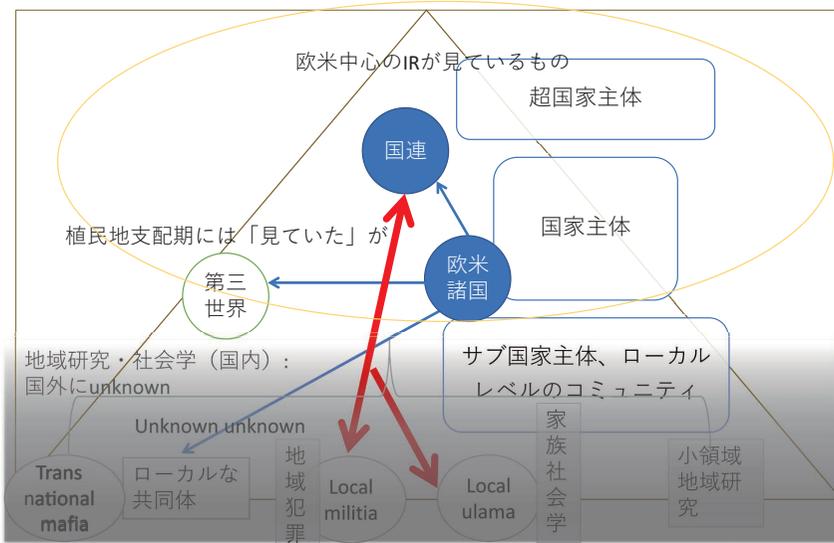


図1 非国家主体レベルを「見ない」IRの視界を図示してみる（著者作成、以下同）

主体として台頭してきた国（中国やインドなど）は視野に入るけれども、その下、「グローバルサウス」の社会内部で何が起きているかというところまでは、なかなか見ないのがIRの学問的な限界なのだと考えられる。

問題は、この下の部分が欧米先進国に見えないまま、どのように扱われているかということである。それは欧米先進国、あるいはその一部の大国の国家主体の行動の客体として扱われているのである。欧米先進国の政策の客体であり、支配や監督の対象であり、どう動かすかという相手であって、反対にグローバルサウスが欧米先進国の国家主体にどのような行為を仕掛けてくるか、どのように反応するかということは、あまり想定されていない。

そうしたIRの欧米中心主義的な視点の問題については、国際学会などでも最近しばしば指摘される。アメリカでのIR、あるいは中東政治研究の学会などに行くと、必ずといっていいほど、アメリカで教鞭をとっている中東出身の研究者たちによるセッションが生まれ、既存のIRに対する批判があげられる。これは、自分たちが欧米のIR研究の下請けでしかなく、ただデータの提供だけを求められることに対する批判である。つまり、エジプト出身だったらエジプトの、イラク出身だったらイラクのデータを提供しろ、分析は先進国の研究者に任せろ、というスタンスが非常にはっきりしていることへの批判なのである。

こうした役割分担は、確かに言語能力の問題からいっても現地調査のやりやすさの面からいっても、効率的であることは確かである。しかしながら、それはまさに欧米先進国の研究者が非欧米諸国を客体研究の対象、材料としてしか扱っていないことを表している。

これに対して非欧米世界の学者たちは、「多くの欧米研究者たちはデータに現れないような現地社会の特質などを見ていない。彼らには見えておらず、自分たちこそが見えているものがたくさんあるのに、自分たちがそれを発言する場、研究する場がない。自分たちなりの研究方法を確立していけばいいのか、まさに今、模索中だ」などと発言することが多い。こうした背景が、グローバル IR の模索や批判的 IR の展開の出発点にあるのだろう。

第一の問題は、IR の学問のあり方としての問題だったが、第二は地域研究、エリアスタディーズの問題である。ある意味では IR が抱える問題と並行することではあるが、欧米で展開されている地域研究は、イギリス、ヨーロッパのオリエンタリズムの流れを汲んでいることから分かるように、基本的には異国社会を理解するための学問というよりは、異国社会に関する知識を獲得したうえで、それを植民地支配や帝国主義支配のツールにするための学問であった（図2）。このことは、いずれの先進国も共通している。特に19世紀の終わりから20世紀半ばまでの植民地政策、さらに冷戦期の敵国研究という形で展開されたという点では、いずれの先進国の地域研究も同様のスタンスをとった。これもまた、研究の対象である非欧米諸国がツールでしかない、材料あるいは客体でしかない、という点で、IR と同様の問題を持つ。

地域研究者、エリアスタディーズの仕事は、ある意味で取扱説明書を書く仕事に過ぎなかったのではないかと反省する。イギリスがイラクをどう支配するかというときに、イラクをどう取り扱うかという「取説」を書くために、当時のオリエンタリストたちの膨大な研究が存在した。そして結局、「取説」の部分だけが政策に取り上げられて利用さ

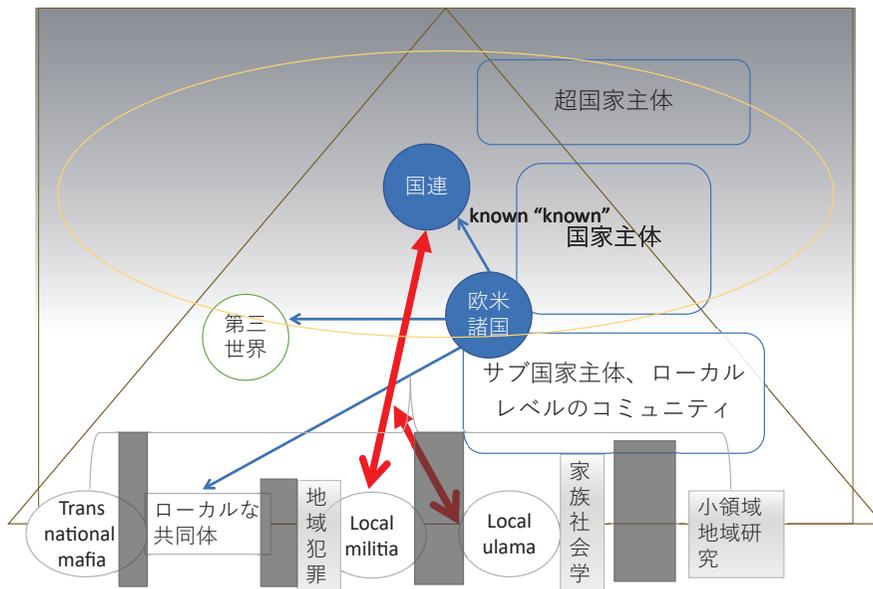


図2 視野を第三世界に映して見えるものを、先進国の視座で「固定化」する

れていったのである。

そこで、私が問題だと考えるのは、地域研究者がその現地社会で「発見」したことを、外部からの観点で名づけ、固定化してしまう、ということだ。地域研究者は地域の細かいところに欧米社会とは違う様々な「異質」なものを発見する。特に中東などでは、イスラーム世界という、欧米先進国では理解できないような社会、特に宗派、シーア派とかスンナ派とかいろいろな宗派があるようだと、外部の研究者が「発見」する。「部族」という概念もそうである。

欧米先進国の研究者は、自分の社会の中にない違う社会、要素を海外の社会に見つけたときに、とりあえず名前をつけることが一般的である。「部族」というタームはその好例で、中東の、特にアラブ社会では、〇〇一族とか××家などが存在するのだが、それを大きくまとめた抽象概念としての「部族」概念が、確固として永続的に存続しているわけでは決してない。ある意味では、そこでの部族社会は日本の「イエ」制度、「イエ」社会に近いものだと考えられるが、名づけの方法によって、制度的には全く異なるアフリカの「部族」と同じ名前がアラブ社会での「部族」につけられる。オリエンタリスト研究者には、非常に優秀な学者がイギリスなどにいるのだが、彼らが最初に中東の家族・部族的紐帯関係の重要性を発見したときに、とりあえずその関係性に「tribe」という名前をつけた。しかし同様に、アフリカではエスニック集団に対して「tribe」という用語があてはめられる。パキスタンでは、イギリスの帝国支配の及ばない地域がtribal landと名づけられる。このように、地域研究者が名づけた言葉が一人歩きし、とりあえず分かりやすい「取説」として流布してしまう。だが、そのことによって、本来は異なるものが類似した存在のように理解されてしまい、たとえば別の用語で「イエ」と呼ばれる概念との類似性は見逃されてしまう。

欧米先進国にとって「取説」として便利なので、とりあえずの名称、「取説」を使っていこうという発想は、現代においても顕著である。例えば、9.11を起こしたのはイスラーム教徒で、特にサウジアラビアの国籍の人たちが多かったので、サウジのワッハーブ派がテロリスト思想の根源なのだ、というような短絡的思考、わかりやすい理解体系の中に落とし込まれていってしまうという問題がある。

第三の「見えなさ」として挙げておきたいのが、主体、自分たちが自己認識しているものと、他者が認識するものとのギャップである。自分が考えている自分自身と、他者が考えている自分は、当然違ってくることが一般的だ。こうした自己認識と他者による認識とのギャップは、社会全体にもあてはまると考えられる。相手の社会がどのようなトラウマを抱えた社会なのか、どのような憎悪や連帯意識や恐怖といった感情を社会全体として蓄積させてきたのか、といったことを見ないまま、ただわかりやすい取説の枠組みで相手を扱うことによって、その自己認識と他者による認識とのギャップがそのまま対面的関係のずれとなって現れてしまう。相手社会に対する誤解、誤認識による外交

政策の失敗といった問題は、実際しばしば発生している。

この感情を国際政治の中でどのように扱うかについては、「グローバル関係学」のプロジェクト中でも一番頭を悩ませてきた。今現在もまだ解決ができていない、社会科学にとって悩ましい問題である。現代社会科学は、欧米型のいわゆる統計分析、量的分析に大きく依存した分析手法が主流であるが、その中でも感情や記憶も扱わなければ、という動きが出てきている。しかしまだまだ、解決となる方法論は見つかっていない。

グローバル関係学において私が提唱したのは、関係性に注目した場合、対面的な関係と感情レベルでの関係性という二つの関係性が並行して存在し、その相互関係や作用・反作用によって、対面的な関係がゆがむのではないか、という点である。それを私は「埋め込まれた関係性」と呼んだ（酒井 2020、40～65頁）。

つまり、対面的、即時的な関係と、認識の中に組み込まれた——個人であれ社会であれ——外からは知ることのできない不可知な関係性というものがある。それは本人にも、あるいはその社会にも自覚できていないかもしれないが、何らかの形で記憶や慣習や歴史認識のなかに埋め込まれている、そのような関係性がある。その二重の関係が平行して存在し、特に「埋め込まれた関係性」のほうは、平時において表面化することはまれだが、危機的な状況になると、埋め込まれた意識が掘り起こされ、対面的な関係に作用しながら関係を変えていく。そのように考えてみたらどうだろうというのが、このグローバル関係学の中での私の提案であった。このことを具体的に説明しよう。一番分かりやすいのは、歴史的・空間的な記憶に基づいた関係性と、実際に対面したときとの関係性とのギャップであろう。

これは東アジアなどでの歴史認識問題で一番の大きな問題なのだが、中東の場合でも同様のことがいえる。ヨーロッパ、アメリカと中東の関係には、歴史認識が大きく反映されているのだ。例えば9.11やイラク戦争を例に取ってみよう（図3）。

イラク建国時（1921年）の英植民地支配の歴史的な記憶を喚起  
ブッシュ政権の発言の背景に見え隠れする「十字軍」という米の認識

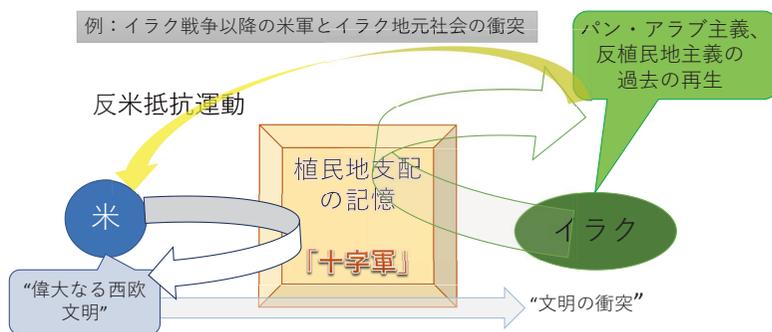


図3 埋め込まれた関係1：空間的、歴史的な記憶を背景にもつ関係

イラク戦争は、アメリカの9.11へのある意味で単純な対応の一環として、イラクのサダム・フセイン体制を、民主的ではないとみなして政権を転覆するに至ったという、短期的、即自的な関係で起こった戦争である。ところが、戦争が起こってみると、戦争を様々に解釈し、その中に歴史的・空間的な記憶をどんどんつぎ込んで、別の性質を持つものにしてしまうというメカニズムが発生した。その最も大きな要素が、植民地時代の記憶である。イラク戦争が起こった途端、イラクに限らず中東全体がイギリスによる中東植民地化の過程を思い出し、それになぞらえてアメリカのイラク戦争を論ずることとなった。一方で、アメリカもまた、「十字軍」といった歴史上のメタファーを安易に用いてしまった。

そのように、直接のつながりがなくとも、現在進行中の対面的な関係の中に、記憶の中の関係性が掘り起こされる。中東の人々においては、植民地期の経験、記憶というものが常に頭の中にあるわけでは決してない。しかし、何らかの形でそれが掘り起こされて、対面関係に影響するという、これが即ち、私が呼ぶところの空間的・歴史的な記憶を背景に持つ埋め込まれた関係ということである。

もう一つは、社会的・文化的な特殊性を纏った、他者に対する視座ということなのだが、これは先ほど指摘した「取説」の問題性である(図4)。アメリカは、中東あるいはイラクのことを文化的に遅れ、伝統的で後進的な社会で、しかもイスラームという宗教の中に拘泥した社会であるというように、分かりやすく認識している。

一方で、イラク社会の中でアメリカの行為は、西欧の野蛮、人道性の欠如といった西洋文明の枠組みの中で理解される。ここで「ヘビメタ」と指摘したのは、イラク国内でテロ掃討作戦をアメリカが展開するときに、兵士がヘビメタを聴いて士気高揚して戦闘に出かけていく、といった鼓舞行動があったことを示唆している。こうした西洋文明のステレオタイプ——女性が裸同然の姿で歩き回り、ヘビメタを聴いて若者はフリーセツ

関係する両者の行動様式の中に、社会的、文化的特殊性を表象するシンボルが浮かび上がり、シンボルの背景にあると想像される別の主体や関係性が、実際に向き合っている二者の関係を単純な二者間関係以上のものにする

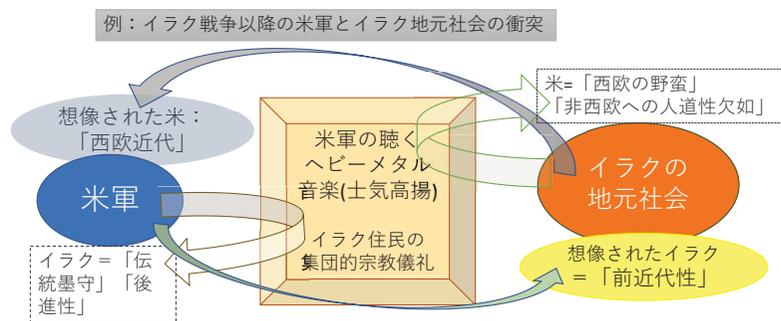


図4 埋め込まれた関係2：社会的、文化的な特殊性を纏った他者に対する視座

クスに明け暮れている、みたいな——典型的なイメージがある。つまり、お互いにそのような「取説」的なものを相手に対して持っているのである。

しかしながら、実際に現場で起こっているイラク社会の対米抵抗運動は、基地によって土地を接収されたとか、米軍の置いた武器によって、地元の小学生が怪我をしたとか、地雷を踏んでしまって亡くなったとか、非常に対面的な、即時的な問題から派生している。しかし、一旦衝突が起これると、こうした取説に基づいた相手に対する誤解によって問題が、戦闘がゆがんでいくのである。

最後に、三つ目の埋め込まれた関係性として指摘したいのが、自己認識と他者による期待とのギャップであり、私はこの点に一番注目している。つまり、他者からのまなざしを自覚する、自分たちがつくり上げた対他関係である（図5）。

これもまたイラクの事例であるが、イラク戦争が起こったときにアメリカは、「イラク人は花を持ってアメリカ兵を迎えてくれる」と思っていた。確かに、海外に亡命していた当時のイラクの亡命知識人たちが、サダム・フセイン政権の非道さ、独裁政権にイラク国民が苦しんでいるということを言い続けてきた。さらにその前の湾岸戦争のときには、イラク人の多くはアメリカが自分たちを救ってくれるものだと思ったのに、アメリカは実際には湾岸戦争でサダム・フセインを倒さなかった、と考えていたことは、事実である。そのため、湾岸戦争時代のイラク人が訴えていた、アメリカが何もしてくれなかったことに対する「恨み節」を、アメリカは記憶しており、その気持ちに込めるために、13年後にイラク戦争を実践したのだともいえる。アメリカは、13年前の記憶、対イラク人認識にとどまっていたので、イラク人が花束を持って迎えてくれるはずだろうと考えたのである。

言い換えれば、「イラク人はこう自分たちを見ている」というまなざしの中で、アメリ

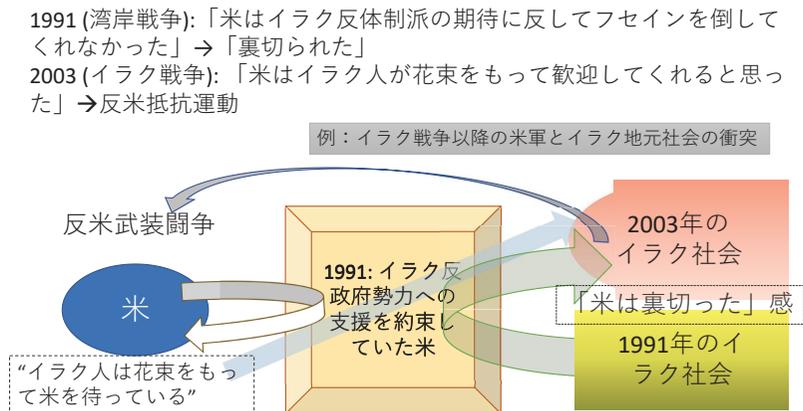


図5 埋め込まれた関係3：他者からのまなざしを自覚する主体の、内的な関係性

かはイラク・アメリカ関係を自身の認識枠組みの中、想像の中で作り上げていたのである。一方で、イラク人はイラク人で、湾岸戦争のときアメリカが、クウェートまでは解放したけれども、イラクのサダム・フセインまでは攻撃しなかったということから、アメリカはイラク人をサダム・フセインの暴挙から救ってくれるはずだったのに救ってくれなかったという恨み節を抱き、ひいては、「アメリカはイラクを裏切った」という意識につながった。そして、イラク人の中にはそのように、アメリカは何もしてくれない、どうせ何もしない国なのだというイメージが作り上げられた。そのことが、アメリカに対する不信と、イラクのことはイラク人で決めるしかない、という意識を強めていく。実際、イラク社会の中でフセイン政権に対抗するような様々な社会運動が、90年代に生まれていたのだ。だが、そうした展開は、アメリカの目には見えていなかったのである。

そうした、自分たちの中で作り上げた想像の関係性というものと、実際の関係性とがずれることによって、誤解に基づく紛争が起きる。イラクで起こった反米武装抵抗運動のほとんどは、そのズレが起因して起きたものだと私は考えている。

このように、アメリカがどうしたとか、イラクがどうしたとか、シーア派や部族がどうしたとかいうように、何か紛争が生じたときにとりあえず「主語」を設定し、「主語＝主体」から分析していくのではなく、むしろ関係性に注目することで、より物事が見えることになるのではないか。お互いの様々な関係性が錯綜し、しかも非即自的、非対面的な関係が意識下に埋め込まれていて、それがどのように掘り起こされ、浮き上がってくるのかを分析することによって、より国際社会の動態的なものが見えてくるのではないかと考える。それが、私が考えるグローバル関係学というものである。

一方、これまで論じてきたことは、国際日本学にも通ずるところがあるのではないだろうか。21世紀に入り、世界で生起しているのは歴史の復活であり、そこで核になっているのは、冷戦時代のイデオロギーに変わって民族、宗教、文化に根ざした共通の歴史的記憶である。まさに歴史的な記憶というものが、どう掘り起こされるか、どのように解釈して、どのように再度用いられるか、その過程で、それにまつわる感情とか眼差しといったものが、研究の焦点になっていく。その意味では、国際日本学と相通ずるものがあるのではと思えるのである。

さて、最後に、グローバル関係学を土台に、地域研究の役割について、もう少し説明したい。IRやエアスタディーズを見直そうという発想に基づけば、日本独自の地域研究、エアスタディーズという外国由来の学問ではなく、日本で独自の展開を遂げた地域研究に再度注目できるのではないか。ここで、日本の地域研究がどのような展開をたどってきたのか、なぜそれが独自なのかを説明したい。

日本の地域研究がいつ、どのように始まったのかについて、定説があるわけではない。過去の先行研究の中から言えることは、地域研究というよりは外国研究、海外事情研究がどこから始まったかということ、江戸末期から明治初期の欧米諸国への使節団の派遣に

端を発するということである。初めて「外国から学ぶ」と考える視線が、特に西欧に向けられたのが、江戸末期から明治初期だったといえよう。

そこで注目すべき点は、日本の場合、明確に学ぶべき異文化接触の相手は欧米だった、ということである。一方で、非欧米に対しては、学ぶべき対象として見てはいなかった。

例として、福沢諭吉による文久の遣欧使節団のエピソードを取り上げよう。福沢はヨーロッパにエジプト経由で行っているのだが、その航海の様子を記した「西航記」で彼は以下のように述べている。

——人口五十万、貧人多く、市街繁盛ならず。人物頑陋怠惰、生業を勉めず。法律も亦極て厳酷なり（『福沢諭吉全集』第19巻、16頁）。

つまり、エジプトがいかに貧しいか、街中は繁栄してなくて、人物が怠け者で、仕事もろくにしないし、イスラーム法が過酷だ、と指摘しているのである。ここに、「学んではいけないアジア・アフリカ」という福沢諭吉の認識を見ることができよう<sup>1</sup>。このように、ある意味では、その後、国際関係論として発展していく欧米研究、欧米中心の国際政治学と、アジア・アフリカを見る地域研究に分かれたのだと考えられる。

ちなみに、イスラーム圏に関する知識は、日本がヨーロッパに向かうことで初めて接したということではない。イスラームに関する知識は、江戸末期までは中国経由で日本にもたらされていた。かつて日本ではイスラーム教を回教と呼んでいたが、それは中国の「回」族がイスラーム教徒だったからで、日本のイスラーム理解が中国ルートで入ってきていたということがよくわかるだろう。それが、江戸末期以降、欧米ルートで入ってくる情報に切り替わっていくのである。

その後、日本の地域研究はどうなったか。「アジア・アフリカは学ぶべきものではない」という福沢の時代から時を経て、日清戦争後ぐらいからは、帝国版図拡大のターゲットにアジアがなっていく。つまり、日本の地域研究——実際はアジア研究——は、この時期からまさにオリエンタリズム的な様相を呈していった。イギリスのオリエンタリズムがたどったような植民地研究に展開したのである。

特にその中でも中東研究、イスラーム研究は、渦中におかれたといってもよかろう。1930年代後半には大日本回教協会、回教圏研究所など、国策研究所が次々に設立される。大日本回教協会は林銑十郎が会長を務め、回教圏研究所は善隣協会に吸収されていくという形で、戦前の日本のイスラーム研究は、植民地支配のツールとして使われてきたのである。東京モスクが設立されたときの設立記念式典には、頭山満が出席している。

1 福沢諭吉のこのエジプト観に対して、しばしば対比的に指摘されるのが、東海散士の「佳人之奇遇」である。この小説ではエジプトのウラービーの乱について触れられており、ある種のアジア・アフリカに対する反植民地的連帯に通ずる日本人の感情が反映されているとみる研究者は少なくない（竹内2014、47～81頁）。

現在の中東研究、イスラーム研究は、その戦前のトラウマを抱えている。つまり、日本の戦後の地域研究、中東研究は、まさに戦前の国策研究化の反省から出発したと言っても過言ではない。そうした戦前の反省に立って、日本の地域研究が戦後展開するのだが、そこには連続性と断絶性があった。連続性としてはアジア経済研究所が、満鉄調査部を継承したということがいえるが、原罪とも言うべき発祥から出発したアジア経済研究所は、日本における地域研究はどうあるべきか、という問題が常に問われる場となっていた。

中でも、そのアジア経済研究所に長く務めた末廣昭が、岩波書店「日本の学知」シリーズ本の中で、「地域研究としてのアジア」の巻を編集したときに、植民地研究への反省がなされなければならないこと、戦前の政治経済社会に対する十分な理解を欠いた自己中心的な事情研究の方法というものが批判されなければならないことを書いている（末廣2006、1～62頁）。こうした戦前の自己中心的な事情研究を乗り越えて、自分達はどのように地域研究を立ち上げていくのかということをやっと模索し続けてきたのが、日本の地域研究の特徴だといえよう。

そして、それは60年代から80年代に地域研究を母体にした学会が次々に設立されていくことへとつながっていった。地域研究がアメリカで政策と密接に結びついて生まれたことを認めつつ、それをそのまま輸入するのではなく、社会科学的方法論に立脚した学術研究として確立していかなければならない、そのように考えた地域研究者が、こうした地域研究学会で積極的な役割を果たした。その中で主要な研究者として、京都大学の矢野暢や立本成文、東京大学の板垣雄三などが挙げられる（矢野1987）（立本1996）（板垣1992）。一人一人の業績についてここで個別に論じる紙幅の余裕はないが、こうした研究者たちが主張してきたのは、独自の地域研究を日本は構築しなければならないということだった。とりわけ、現地語や現地の歴史に関する知識の習得や、現地社会との直接の接触を重んじ、研究対象を「客体」にはしない、という精神が貫かれていた。そうした姿勢のもとに、実際に現地調査を行う中で直接社会を知るのだ、というやり方を強調した。それが今でも引き継がれている日本の地域研究の特質である。

特に、中東研究やスラブ研究などの間で一般的なのは、地域自体——areaであれregionであれ——も、固定したものとして考えるのではない、という見方である。そもそも「中東」、つまりmiddle eastという地域名称は、第一次世界大戦直前にアメリカの海洋戦略研究者であるマハンが、当時のイギリスのアジア進出戦略の対象地域を総称して「中東」と名づけたことに起因している。つまり、西欧帝国主義の戦略的な過程の中で生まれてきた名前が、今でも使用されているわけだが、その言葉を使うこと自体が、地域研究の欧米中心主義史観をそのまま反映させているという矛盾を自認していたうえでの、地域研究なのだ。それゆえ、「中東」とは一体どこで、何を指しているのかということから疑問、批判的に見ていくことこそが、地域研究者の出発点なのである。ユーラシア研究もまた、旧ソ連圏という過去の地域概念から、どのように新たな地域名称に展開してい

くかということが、地域認識として問われているのである。

さて、こうした地域研究のスタンスを国際日本学と照らし合わせてみると、どうであろうか。そもそも、日本研究を日本に関する地域研究だと、地域研究の枠組みで位置づけることができるのか、という問題がある。上述のように、地域そのものが流動的、融通無碍で、境界も固定していないとの観点で考えるべきであるとする、どうも日本社会研究は、「日本」という地域の存在を閉鎖的な存在と考えがちに、本質主義的にみなしがちなのではないか。日本文明の可能性、文明間の自由で開かれた対話と相互理解を触媒としての日本文明といったことが指摘されるが、果たしてそれは、常に開かれたものであったのかどうか。日本文明が本来どうであったのか、といった問題の立て方は、少々留保が必要なのではないかと、中東地域研究からすると、疑問に思えるのである。本質主義に陥らずに、日本社会、日本文明というものを見ていくために、どのような視点が必要なのかということ、日本研究と海外の地域研究者との間での対話の中で模索していくことが求められるのではないだろうか。

最後に、再び日本独自の地域研究との側面に戻りたい。いや、地域研究に限らず、国際関係論へと展開した「外国研究」全体における、日本の独自性についてである。日本の戦後の「外国研究」の基盤は、敗戦経験を持った国の地域研究、国際関係論だという点にあり、それこそが日本の独自性ではないか。

欧米中心で成立した国際関係論は、基本的に欧米の大国が世界をどう見るかという、ある意味で「勝ち組」が世界戦略をどう考えるかという議論として始まった。地域研究は、そのための材料を提供するための学問として始まった。最近では、欧米中心主義から脱却するために、中国やインドでの独自の IR に注目が集まっている。だが、これは私から言わせれば、今後「勝ち組」になるかもしれない国による IR であり、「世界を見る視点の基軸」をある国から国へと移動させるだけにとどまっている。特に、中国の IR は、欧米文明をそのまま中国文明に移し替えたような形になっていて、構造自体は変わっていない。

反面、日本の場合はそうではなく、「敗戦」を経験した国が、戦前に欧米式の「勝ち組」のための IR、地域研究を追究してきたのが一旦否定されたところから、戦後立ち上げ直している。そのうえで、どのような IR や地域研究を確立できるのか、という問題に直面せざるを得なかった。そこが日本の独自性ではないだろうか。

そして、地域研究については、「勝ち組」がその国家利益の対象について「取説」を書くことではなく、アジアの中にある日本という位置づけを踏まえて、アジアと欧米の接点として日本の独自の地域研究をどう確立できるかが課題になる。それは、日本が戦前にアジアを支配してきたという「帝国主義」側の位置づけと、戦後の被占領の立場という、被支配と支配の両方を体験した国としての立ち位置からくる独自性だ。IR であれ地域研究であれ、「勝ち組」の学問を捨てなければならなかった日本だからこそ、外国研究

において何らかの普遍的な視点というものを、非欧米諸国に対して打ち出していくことにつながるのではないか。

## 参考文献

- 家田修編『講座スラブ・ユーラシア学 1 開かれた地域研究へ——中域圏と地球化』（講談社、2008年）。
- 板垣雄三『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』（岩波書店、1992年）。
- 酒井啓子編『グローバル関係学とは何か』（岩波書店、2020年）。
- 末廣昭編『地域研究としてのアジア』（岩波書店、2006年）。
- 竹内加奈「「敗者」のナショナリズム——東海散士『佳人之奇遇』を通じて」『社会科学』第43巻第4号、2014年。
- 立本成文『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み』（京都大学学術出版会、1996年）。
- 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第19巻（岩波書店、1962年）。
- メアリー・カルドー、山本武彦、渡部正樹訳『新戦争論——グローバル時代の組織的暴力』（岩波書店、2003年）。
- 矢野暢編『講座政治学 4 地域研究』（三嶺書房、1987年）。

## 座談会〈抄録〉

# 日文研が語ってきた文明／語っていくべき文明

### ●劉建輝（司会）

3日間大変お疲れさまでした。今回は「岩倉使節団 150 周年に寄せて」というサブタイトルがついているので、いわば歴史の節目を押さえた、とてもタイムリーな国際会議ではないかと思う。実は先日の学術講演会で関野先生がおっしゃっていたように、今年はまた日本が旧暦から新暦へ、つまり洋暦へ改暦した 150 周年でもある。私は全然気づかなかったのだが、それを伺ったとき、これは今回の冒頭に使えるなあと思った次第である。岩倉使節団と改暦、二つとも重大な歴史的イベントだったと言っていいと思う。レベルは違うが、やはり大変象徴的な出来事で、まさにこの時点から日本はいわゆる旧文明を揚棄し、新しい文明を迎えたという、いわゆる文明の再構築の転換点だったと、私は再認識させられた。

ただ、今回の会議は、その二つだけではなく、もう一つ大きな歴史的結節点においても非常にタイムリーではないかと思う。これは初日に竹村民郎先生がいろいろご発言されたけれども、我々が今 20 世紀の数々の戦争や冷戦等々を経て、21 世紀に入ってからようやく地球規模の大同団結とも言えるグローバル化を迎えたかと思いきや、その反動としてナショナリズムも非常に進んでおり、世界各地でさまざまな紛争が起こっている。

またそんな中で、かつて 19 世紀の初頭において、世界の GDP の 3 分の 1 を占めていた中国は、約 200 年ぶりに世界に再登場して、いろいろな形で 200 年来の欧米を中心とする世界秩序に挑戦しようとしている。そのような意味において、このいわゆる再構築以来 150 年後の今日こそ従来の日本の立ち位置、日本の近代文明、ひいては近代文明そのものをもう一度考え直すという時期に差しかかっているのではないかと思う。

実際、今回のテーマは「日本文明の再構築」となっており、その起点とも言える 150 年前の岩倉使節団に焦点を当てている。先ほどの酒井先生のご講演、またこの 3 日間の議論をお聞きになれば分かると思うが、多くの場面において、既に現実的な問題、つまり、文明、ひいては近代文明とは何か、その行方はどうなっているのかという話に及んでいる。

これも実は先ほど申し上げた理由で、きわめて大事な課題だと思う。日文研は小さな所帯のため、その全部に挑戦することはできないが、やはりこのようなコンソーシアム、あるいはその他の形で海外、また国内の学者と一緒にこの問題を考えざるを得ないのではないかと感じた。ある意味では、ここの再構築という言葉は 150 年前の再構築だけで

はなくて、今後への再構築という意味も含意しているのではないかと私は理解している。

さて、このセッションのテーマは「日文研が語ってきた文明、語っていくべき文明」となっている。これは実は瀧井先生からいただいたタイトルであるが、私は絶妙なお案だと思っている。つまり、今年は日文研ができてちょうど36年目を迎えるが、この激動の時期において、日本文明の再構築、言い換えれば近代への転換以前の文明、またそれ以降の文明について、日文研という研究集団は、これまで一体どのようなスタンスで研究してきたのか、また今後どのような方向に向かっていくのかという点は非常に大事であり、そしてそれをめぐって岩倉使節団から150年経ち、また日文研の創立から30数年経ったこの時点で検証するという事は、とても重要な事業の一つではないかと私は思う。

先ほど瀧井先生も触れておられたけれども、文明については、日文研は実はかなり重点的に研究してきている。まずここで想起するのは、90年代後半、日文研が京セラの援助を受けて、長江文明の探求というプロジェクトを立ち上げて、中国と協力しながらいろいろ研究を進めていた時のことである。私はその時通訳などを務めていたので、今でも覚えているのだが、98年に開催された「長江文明の探求」という公開講演会に梅原猛先生と北京大学の嚴文明先生が登壇され、その時、梅原猛先生がまさに「文明の発見」というタイトルでご講演なされたのである。

そしてその後、つまり2000年以降になるけれども、日文研はもう一度文明研究プロジェクトを立ち上げていた。それは科研という形で、山折哲雄先生、安田喜憲先生、そして川勝平太先生が中心となって進めておられた。ただ、長江文明の時もそうだったけれども、このプロジェクトではやはり日本の稲作文化、特に森の文化、または水の文化等々を強調していたように私は思う。それはまさに遊牧文化対稲作文化、つまり西洋文化に対抗するために日本文化のいわば独自性を追求していたわけである。

そして、この文明研究プロジェクトの一環として、当時はまた海洋文明、海洋文化というものを盛んに論じていた。それはつまり日本を海洋国家として、従来大陸との関係を、ある意味では断ち切った形で日本の特殊性、独自性を強調していたと思われる。

ここでもう一つ、日文研が文明に関して取り組んできたことを紹介しよう。これは今まで開催された共同研究を見れば一番分かりやすい。皆さんのお手元に日文研の歴年の共同研究のタイトルを記しているパンフレットがあると思うが、これを開くと、私たちがやってきた共同研究会の全てが一覧できる。ここでは2017年で切っているが、実は今数えると今年まで大体200ぐらいの共同研究が行われた。

このタイトルの一覧で分かるのは、やはり前半では日本文明や日本文化の特徴を探求するものが多いということである。つまりキーワードとして、日本または日本人の何々というものが多い。日本型モデル、日本型システム、日本文化の基本構造、日本文化の深層、日本の自然観、日本の創造力、日本の科学と文明、日本人の自我意識、日本の絵画、日本人の身体感覚、日本文明史の再建などなどである。やや私が意図的に選んだきらいがあるかもしれないが、日本という存在をかなり前面に出しているように感じる。

もちろんその中に批判的な、あるいは比較的な視点もあるだろうが、どこかで本質論的なものになっているのではないかと私は思う。ただこれらのすべてに私が参加していたわけではないので、これについては後でまた当事者の井上先生からいろいろご発言があるだろう。

そして、さすがに後半、つまり21世紀に入ってから、エリアスタディーズ、またはカルチュラルスタディーズ、コロニアリズム研究などの影響もあって、多くの共同研究において周辺諸国や欧米などとの関連性の中で日本を捉え直すという傾向が増えてきている。

特にこの外部との関連性から言うと、実は昨年末、日文研の主催による海外日本研究機関責任者会議を国際日本研究コンソーシアムの枠で開いたが、この中でも多くの海外研究者からは、やはり日本研究に対して日本特殊論を超えるべきで、より地域的な、あるいはより広いグローバルな視野の中で日本を捉えるべきだというご意見がたくさん寄せられた。このようなことも踏まえて、まず前半の日文研が語ってきた文明については、これに一番詳しい井上所長からいろいろご発言をお願いしたい。次にまさに外部からの視点ということで、スクリーチ先生が長年にわたる日文研との付き合いの中でいろいろ感じられたものがあるかと思うので、ぜひ先生からコメントを頂きたい。そして、後半の日文研が語っていきべき文明に関しては、日文研は、小さな所帯なのでそれについての指針をすぐ全面的に出せるわけではないと思う。ただし、一つの研究集団として、やはり日文研としてのスタンス、またこれから探求していききたいテーマみたいなもの、あるいは研究活動を進める上の注意点みたいなものを、ぜひご参会の先生方それぞれのご立場から語っていただければ大変ありがたい。どうぞよろしくお願いします。

## ●井上章一

私は若い頃は建築の勉強をした。酒井啓子先生のお話を伺って思い出したことがある。明治の中頃に鹿鳴館という施設ができた。この建物にはインドのイスラム様式が大幅に取り入れられている。たとえば、2階のベランダはインドのマハラジャの宮殿をコピーしていた。設計をしたのはジョサイア・コンダー（コンドル）というイギリス人である。イギリスのコンダーは、日本の建築教育にインドやイスラムの意匠を持ち込んでいる。これはドミナントな潮流にならなかった。しかし、日本の建築教育におけるサブドミナントな潮流としてインドやイスラムの意匠はある。

大正時代の京都にあった大丸百貨店は、イスラムのスタイルでできている。関東大震災を迎えたときの国技館、大相撲のスタジアムはイスラムの様式でできていた。現存するものを挙げれば、東京の築地本願寺辺りがインド的なイスラムの形をとどめている。

日本の建築家たちは今、世界に羽ばたいている。おそらくニューデリー工科大学でも、イスタンブール工科大学でも、安藤忠雄や隈研吾の名前は広く知られているはずである。日本の建築家たちを最初に世界へ羽ばたかせたのは、間違いなくサウジアラビアなどで

ある。産油国の仕事を背景に彼らは世界へ羽ばたいていった。

同じくサウジアラビアで仕事をした建築家に、日系のアメリカ人であるが、ミノル・ヤマサキという人がいる。ヤマサキはサウジアラビアのダーラン空港を設計した。そのダーラン空港はサウジアラビアで紙幣のイラストにも使われている。その後、ヤマサキはアメリカで大きな仕事を獲得するようになる。いちばん大きい仕事は間違いなくニューヨークのワールドトレードセンターである。その低層階に、ヤマサキはイスラムの様式を取り入れた。それがイスラム原理主義者たちによるテロの標的になったのである。建築は虚しいなと思う。

おそらくエリアスタディーズの場で、建築が話題に上ることはほとんどないのだろう。日本におけるイスラムイメージを振り返るさいにも、言及されないのだと思う。そのことに文句を言っているわけではない。建築畑の人も、自分たちの仕事はその程度にしか評価されていないとわきまえるべきなのだ。少なくとも、人文社会諸学は暗々裡にそうとらえているのだと、かみしめる次第である。

私は建築や風俗の歴史を調べてきた。日本文明などという大きいことを考えたことはない。ただ、そんな私の耳にも届いてくる議論はあった。それらを記憶に残っている範囲で語らせてもらう。

やはりいちばん印象に残っているのは、日文研が行った長江文明プロジェクトである。世界の四大文明として、教科書的に語られる文明は四つある。ナイル川のエジプト文明、ティグリス・ユーフラテス川のメソポタミア文明、インダス川のインド文明、そして黄河流域の黄河文明。日文研は、中国の協力者もいたのだが、黄河の南側、揚子江（長江）にも偉大な文明はあったと言い出した。

発掘されて明らかになった長江の様々な生活様式を眺めていると、現在の雲南や貴州にも間違いなくそれらは届いていることがうかがえる。あるいは東南アジアの山間部や、島嶼部、そして日本列島にもその影は及んでいると思う。

日本と中国の関係を語るときに、伝統的には二つのタイプがあった。日本を中華文明、東洋文明の一角に組み込む議論である。もっと大きく広げれば岡倉天心のようにアジアは一つだというふうにとらえる見方があると思う。その一方、日本と中国の間に深い溝を見だし、日本文明を孤立的に位置づける人たちもいた。この二つとくらべて、日文研が提唱した長江文明論には、新しい構図もある。

黄河と日本列島の間には溝があったかもしれない。だけど、長江と日本列島の間には一体的なつながりがあった。そんな新機軸になったような気がする。つまり、日本と中国の関係を考える際に、別にそれを目指したわけではないのだろうが、日中をつなげる新しい橋渡しの見取図を提示していたのかなと私は思っている。

でも、これは文明論と言いながら、結局は文化論でもある。少なくとも文明と文化をはっきり分けてはいなかったと思う。その点で、いちばん両者をくっきり分けていたのは梅棹忠夫だった。日文研の人ではない。だが、日文研をつくる際に重要な役割をになっ

た人物の一人ではあった。梅棹忠夫は、ユーラシアの中で日本とヨーロッパだけが特殊だという議論をくりひろげる。ともに封建制を経て資本制に至る。こういう歩みをたどったのは日本とヨーロッパだけだと。すなわち日本文明はヨーロッパ型なのだと。

日本文化に対する梅棹の見方はこうであった。文化的には中国の要素を多く含んでいる。でも、それはたかが文化だ。見た目の形でしかない。日本の文明的な骨組みは違う。文明の骨組みはヨーロッパ型だと。梅棹は面白い比喩を使った。鯨の外見は魚に見える。だが、その内実は哺乳類だ。魚のように見える哺乳類があるのと同じで、日本文明はヨーロッパ型なのだと、そう喝破した。その当否はわからない。とりあえず、日文研及びその周辺で語られた文明論として、私が思い出せる立論を披露させていただいた。

私はブラジルのリオデジャネイロで3か月ほど授業をしたことがある。そのとき、私のことをリオデジャネイロ州立大学の文学部長に紹介してくれた先生は、井上の自慢話をしてくれた。「この人はたくさん本を書いている。日本ではすごく有名なんだ」と。私はこの紹介ぶりに、堪忍してほしいなと思った。文学部長は私にこう尋ねた。「あなたはそんなに有名なのか」と。私は「とんでもない。私は本を書きますが、読者の数は大したことありません」と答えた。すると、部長は「You are modest」とまとめてくれました。

ところが、私を紹介してくれた先生は、後で怒り出した。「なぜ自分は有名だと言ってくれないんだ。紹介者の自分はメンツが立たなくなる。いや、それだけではない。日本人は大体ひきょうだ。ああいうときは引っ込み思案に振る舞えばそれですむと思っている。それは良くない」。「じゃあブラジル人なら、そういうときはどう言うのですか」こう尋ねると、「確かに私は有名だ。日本では谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、井上章一と並び称されている」と。本当にブラジル人がそういうふうに言うのかどうかは知らない。しかし、とても私にはできないと思った。

それと同時に、反省させられることがある。私たちは何か人に贈り物をするとき、「粗品ですが」、「つまらないものですが」と言う。なるべく自分をちっぽけに見せることですごく神経を使う。いつ頃からこういう習わしができたのか、誰か調べてほしいものだ。

ハンチントン日本文明を「引っ込み思案な、自閉的な文明だ」と言った。そう今日は教わった。理由の一つにあの控えめな自己表現があるのだろうなと思った。でも、それを私は、悪いことだと思っていない。

日文研に海外から来られる日本研究者の方々を見ていると、概ね謙虚で、引っ込み思案だ。「俺の研究はすごいんだ」と言う人とは、あまり出会わない。そういう引っ込み思案な方に、居心地のよい環境を用意することが、今後の日本では、もてなしの課題になるのではないかと私は考えることがある。

一方で、建築である。今さっき、私は日本人のことを引っ込み思案だと言った。だが、河原町通りを見てほしい。隣のビルにデザインを合わせようとしているビルは一つもない。居並ぶビルは、みな自己主張の塊である。こんどは、ロンドンのリージェントストリートを想いうかべてみよう。同じ繁華街であるが、似たような形の建物が並んでいる。

非常に没个性的で、集団主義に埋没している。

銀座の街並みも、河原町とつうじあう。銀座も「俺が」「私が」というビル街である。シャンゼリゼ通りにあんな風景はない。でも、あの「俺が」「私が」という自己主張でできた日本の街並みが、世界に羽ばたく建築家を生んでいる。それはいいことなのかどうか。羽ばたいてることを良しとする人びともいよう。しかし、私は切ないと思う。パーソナリティは引っ込み思案で、謙虚をよそおいたがる。だが、ひとたび地権者となれば、ヨーロッパでもありえないエゴを発揮する。その分裂的な様相じたいは興味深い。まあ、個人的には、それほど強く自己主張できないが、それでも何かコツコツ研究しているという人たちの楽園に、日文研をできればいいなと思っている。

### ●タイモン・スクリーチ

“グローバル・ジャパニーズ・スタディーズ”という表現は、実は日文研に来る前にはほとんど聞いたことがなかったように思う。私は日文研に来て1年半しかたっていないが、その前に1年間ほど、東京の外国語大学に籍を置いていたことがある。そこでも、“グローバル・ジャパニーズ・スタディーズ”という表現を時々聞いたけれども、初耳であったので、どのように定義していますかと何回も聞いた。しかし、検討中という返事が多かった。私がこれまでこの表現を聞いたことがなかった理由は、我々外国人が日本語、日本のことを勉強するときには外からの目線で研究するので、グローバルだというのは当たり前だったからであると思う。私がロンドン大学にいた頃は、ヨーロッパ、中近東、アメリカ、北米、南米と世界中から留学生がやってきていたので、同じ教室の中に国連があるようなものだった。そうした国際的な環境で日本語を用いて研究していたから、自動的にグローバル・ジャパニーズ・スタディーズになっていたのではないかと思われる。

二つ簡単にコメントしたいと思う。一つは、日本における学問の強さについてである。私が東洋アフリカ研究学院に籍を置いていた期間は約30年間であったけれども、同僚にはインド研究、アフリカ研究、中近東研究が多かった。それぞれの地域を研究している先生たちは、ほとんどの場合、共通語が英語であった。あるいは英語でなければフランス語かスペイン語、あるいはロシア語を使っていた。つまり、研究対象がアジア、アフリカでも、記録と文献がヨーロッパの言語で書かれており、あるいはその地域出身の人たちであっても、学問の世界に入るためには英語かフランス語かスペイン語を使わなければならないと考えられていたので、本当にネオコロニアルという感じであった。いろいろな違和感があったけれども、日本の場合は、ヨーロッパの言語ではなく、自国の言語で研究していたのである。

おそらく韓国学も中国学もそうではないのであるが、私の世代では韓国学はまだ非常に小さな分野で、中国には行けないし、自由な国ではなかった。その点、日本は非常に例外的で、日本のことを勉強し理解したければ、必ず日本に行って、日本の研究者の下

で研究しなければならなかったのであった。

それはもちろん学問的によいことである。それだけではなく、経験としても非常に楽しかった。私は3年間ほど東京の学習院大学で、江戸美術研究の第一人者である小林忠先生、今でもお元気な方ですけれども、その下でいろいろなことを勉強した。小林先生の下では、美術品の現物ももちろん研究したけれども、自身に足りなかった知恵を増やただけではなく、どのように日本人が自国の歴史、自国の美術史を研究しているかということも直に教わることができた。それは私の研究者人生にとって非常に重要なことであった。

先ほど申し上げたように、学問の世界では、日本はややユニークな立場だと思われる。その影響として、帰国してもそのまま日本の研究者の問題意識とか研究のやり方を守ろうとする先生もいる。欧米で活躍しても、日本で教わった研究のやり方をそのまま続けているのである。

ただし、そうした方のことを私は尊敬するけれども、帰国するとやはり欧米の生徒に教えなければならないので、どのように西洋の学問と日本の学問の間に架け橋をつくるかということが難しい。それこそがグローバル・ジャパニーズ・スタディーズの定義かもしれない。日本で情報をもって西洋の分析方法に当てはめるのではなくて、日本の文献と日本の歴史と日本人の研究のやり方と、西洋人の物の見方を合流することが、人によってやり方が違うけれども、そのコンビネーションがグローバル・ジャパニーズ・スタディーズの一番大きな定義の一つではないかと思われる。

二つ目のポイントは、日本の歴史上では当たり前のことであるけれども、比較的、外国から鎖ざされた時期があったということである。もちろん鎖国という言葉は非常に大きな表現で、この間私は別のイベントで発言したのであるけれども、鎖国という言葉は日本語ではなく、オランダ語からの訳語である。だから、鎖国では決してなかったけれども、それにもかかわらず自由交易でもなかったのである。

私はイギリス人であるから、イギリスの立場から考えると、イギリスから泳いで外国に行くことは不可能ではない。クレインス先生の母国であるベルギーであれば、歩いてもあつという間に外国に行くことができる。ところが、四方を日本海と太平洋に囲まれた日本にはそうした感覚がない。だから、その感覚のなさをどのように話題にするべきかということが一つのポイントだと思われる。

つまり、グローバル・ジャパニーズ・スタディーズの、「グローバル」の側面を重視するためには、国際的交流が活発であった時代をメインの研究対象にすべきではないかということである。例えば蘭学が盛んだった江戸時代とか、南蛮文化が栄えた織豊期とか、あるいは明治とか幕末など、そうした時期は非常に国際的に活発な交流があった。そのような時代をメインにすべきではないかということである。そうすると、自動的に国際的な研究になる。ただしその場合、比較的海外との交流が少ない時期をどうするかということが課題になる。そこは避けるのか。国際関係が少ない時代をどのように扱うかと

いうことは、もう一つ考えなければならないポイントがあるかもしれない。

特に西洋人、外国人のパースペクティブとしては、なぜ向こうの若い人が日本のことを勉強したいかという、西洋と違うからである。それはもちろん半分偏見で、まだ知恵がないから雑に考えているかもしれないけれども、戦国時代などがそうである。戦国時代はある意味で国際的な時期であったけれども、いずれにしてもそうした自分の文化の中で見えないものを海外で見て、ちょっとその方向に行って勉強したいという動機があるから、おそらく日本人が考えるグローバル・ジャパニーズ・スタディーズと西洋人が考えるグローバル・ジャパニーズ・スタディーズは多少違うかもしれない。それも踏まえつつ、一つの架け橋をどのようにつくるかということが大事である。

少しまとまりがない話であるが、つまり、最近よく聞くグローバル・ジャパニーズ・スタディーズという言葉には、まだきちんとした定義がないと言える。そのため、日文研を一つのベースとして、あちこちでこのようなことを一緒に考えながら、分野としての発展が進むとよいと考えている。

## ●安井真奈美

ただいまグローバル・ジャパニーズ・スタディーズ、あるいは国際日本研究のテーマの設定について話題になったことを受け、自身の研究を振り返りながら意見を述べてみたい。

私は、日本民俗学や文化人類学の立場から、それぞれの文化でお産がどのように行われてきたのかについて研究を進めてきた。自分が生まれ育った日本と、異文化のミクロネシア・パラオ共和国——かつて日本が南洋群島として統治していた地域——を選び、フィールドワークを続けながら、産むこと、産まないことについての歴史の変遷と現状を伝える民族誌の作成を目指してきた。その間、私は日本の大学、大学院で学び、その後、日本の大学に就職して、20年あまり民俗学を教えてきた。またフランスやハンガリーにて、短期間、日本文化について教える機会にも恵まれた。その際、日本文化を知らない人に、いかにわかりやすく伝えるかを考えることとなった。日本文化の諸現象を、日本での呼び方——民俗語彙やフォークタームではなく、誰にでも伝わる分析用語を用いて説明することは、文化人類学の分野では常に求められる点である。たとえば日本の村落には、村の人々が里山や共有地を維持し、利用する慣習があった。それを説明するとき、「入会」という言葉ではわかりにくい<sup>いりあい</sup>が、共有財産を示す「コモンズ commons」という用語であれば、日本に限定せずに説明することができる。

用語の問題に加えて、どの社会、どの文化にも必ず生じる現象——たとえば命の誕生や死に関わる慣習や人々の意識についても関心を持ち続けている。私の場合、これらを研究テーマにすることで、日本の現象を他の文化と比較し、世界の中に位置づけようと試みて来た。

出産——広い意味でのリプロダクションを、近世から近代の流れの中で、また現代も

視野に含めて見てみると、人口学的な視点から国家政策の中で打ち出されてきた家族計画や、その背景にあった優生思想なども重要となってくる。国家の権力構造や医学の知識体系の中で、命の誕生や女性の身体が捉えられ、またそこに家族や地域、社会が関わっていく様子を描き出し、様々な地域との比較を試みたいと考えてきた。

現在、アメリカでは中絶の問題は大変大きな話題となり、政治的、宗教的なものの方の中で論じられている。日本は、必ずしもそのような状況ではないが、翻訳の問題に関連させて言えば、例えば墮胎を abortion と訳し、マビキを嬰兒殺しにあたる infanticide と訳す場合にも、その歴史的、文化的な背景を十分に考慮する必要があるだろう。日本では、近代の法制度の中で墮胎罪が制定され、1970年代のフェミニズム運動の高まりや、旧優性保護法が改正されて母体保護法となるなど、リプロダクションと女性の身体をめぐる歴史を踏まえておくことが必須となる。

その上で、命の誕生と中絶、また命の終焉である死について、改めて死生学的な研究を視野に入れて取り組んでいきたいと考えている。これまで日文研の共同研究会でも、死生学についてはさまざまな研究成果が蓄積され、重要な知見が盛り込まれてきた。私自身は2018年から2021年に「身体イメージの想像と展開——医療・美術・民間信仰の狭間で」という共同研究会を開催し、共同代表者のローレンス・マルソー氏とともに、昨年12月に『想像する身体(上) 身体イメージの変容』、『想像する身体(下) 身体未来へ』の2巻を上梓した。身体イメージについてのこの共同研究から、次は誕生と死について解明する共同研究を始めたいと考えている。

前日のシンポジウム「令和の岩倉使節団——自由で開かれた国際社会への貢献」では、越智郁乃さんが「動く墓」という興味深い捉え方で、死がどのように儀礼の中で演出されてきたのかをお話しされた。死の演出が常に創造され続けているという点は、出産の場においても同じようにあてはまる。出産の場には医療が大きく関わってくるが、そのような過程についても見ていきたい。

さらに、国際日本研究というグローバルな立場で研究を進めていくときに、文化人類学の分野において、日本の文化人類学者と欧米の文化人類学者の間に乖離があったことは事実である。しかし、それがだんだんと解消され、単に情報提供者として日本研究を進めたり、地域研究に留まったりすることは無くなりつつある。つねに開かれた研究として、日本文化の研究をわかりやすく発信し、理論の構築に寄与できるのが望ましい。それは一人で成し遂げることはできないので、日文研の共同研究会という、叡知が結集される機会を利用して、死生観の解明という新しい研究テーマで進めていきたいと考えている。

翻訳や理論化の問題については、共同研究会とはまた別の機会を用意して取り組んでいる。私は日文研に赴任する以前から、小松和彦日文研名誉教授が進めてこられた妖怪や怪異に関する共同研究会に参加してきた。研究会が立ち上がった当初は、「妖怪は、研究対象になるのですか」と、よく尋ねられたことを小松名誉教授が話しておられた。美術、文学、歴史、芸能史の分野などで独自に妖怪や怪談の研究を進めてこられた研究者

が集まり、共同研究会がスタートし、その末席に私も入れていただいた。

何度目かの「妖怪ブーム」が訪れ、日本のポップカルチャーの中でもたいへんな人気となり、現在、妖怪は世界から注目を集めるようになってきている。その間、日文研の妖怪プロジェクト室では、怪異・妖怪伝承データベースや怪異・妖怪画像データベースなどを制作して公開し、根強い人気を誇っている。日文研では妖怪の絵巻も収集しながら、デジタル化して公開することで、妖怪文化の世界への発信にも寄与してきた。

現在、日本の妖怪に興味を持っている海外の若者や研究者は数多い。昨年、日文研にて日中妖怪研究会を中国語と日本語の同時通訳で、オンライン併用のもとで開催した。その告知をした日に予約が殺到し、たいへんな人気であることを改めて知った。中国の研究者と、妖怪や怪異に関する研究を進める上で難しいのは、「妖怪」や「靈魂」という同じ漢字を使っても、表現している内容が異なっている、という点である。

また、日本の妖怪や怪異に興味を持った人々が、自分の文化を振り返ったときに、同じく妖怪に匹敵するものが存在していることに気づき、興味を持つこともある。妖怪を、たとえば supernatural や monster と訳してしまうと誤解を生み、yōkai という用語を用いれば、現代日本のポピュラーカルチャーに限定されてしまう恐れもある。日本の妖怪に匹敵する存在は、どの文化にも存在しているだろうが、それを包括する用語を用いて、理論化することが必要となる。それを経た上で、これまでの日本の妖怪研究を東アジア文化圏の中で捉え、妖怪に関する比較研究を進めていくことができるのだろう。

これまで幾度か「妖怪ブーム」が訪れたが、それほど何度も訪れるブームは、もはや妖怪が文化として定着したと言えるのかもしれない。日本の妖怪を基軸にして、東アジア文化圏にて、また世界各地において、妖怪に匹敵するものと比較を進めていく——ここに、グローバル・ジャパニーズ・スタディーズとしての一つの可能性があると考え。妖怪や怪異を描いた、日文研所蔵のさまざまな絵画資料は、これからの日本研究のグローバルな展開を後押ししてくれると確信している。

最後に人類学の立場から文明を捉えれば、扱う時代のスパンはより広くなる。また近年の「人新世」という捉え方のように、人類が地球に与えた影響を考慮し、人間中心の視点からは脱却した視点が打ち出されている。そうした視点を活かして、改めて命の誕生や死、そして妖怪なるものについて考えていきたいと思う。

#### 参照文献：

荻野美穂『「家族計画」への道——近代日本の生殖をめぐる政治』（岩波書店、2008年）。

越智郁乃『動く墓——沖縄の都市移住者と祖先祭祀』（森話社、2018年）。

小松和彦・安井眞奈美・南郷晃子編『妖怪文化研究の新時代』（せりか書房、2022年）。

安井眞奈美、ローレンス・マルソー編『想像する身体(上) 身体イメージの変容』、『想像する身体(下) 身体の未来へ』（臨川書店、2022年）。

## ●戦暁梅

日文研の戦です。昨年(2019年)の10月に日文研に着任しました。日文研の専任教員としては新米ですが、前任校に就職するまで、総研大院生に続き、中核的研究機関研究員、学術振興会の外国人研究員の身分で計7年半ぐらい日文研に在籍しておりました。今日は久しぶりに日文研に戻ってきた感想も含めて、以下の二点、発言させていただきます。

### 1. 日文研が中国の日本研究に果たした役割

「日文研が語ってきた文明」について、劉先生が共同研究のテーマなどで示してくださった通りだが、私はその立場を少しずらして、その共同研究の数々、また日文研という学術交流の場が世界的に果たしてきた役割について若干補足させていただきたい。

日文研の創立20周年の際に国際シンポジウム「日本文化研究の過去・現在・未来——新たな地平を開くために」が行われ、その報告書に当時天津師範大学の王暁平先生が寄稿した「中国学と日本学との握手」の一文がある。そのなかで、中国で80年代に入ってから日中比較文化の研究が盛んになったことについて触れられていた。なかでも中国で出版された開拓的な著書『比較文化、中国と日本』(吉林大学出版社、1996)を挙げられているが、その著者六名(嚴紹盪、王家驊、馬興国、王暁平、王勇、劉建輝)は、改革開放後の中国における日本文化研究の先駆者の方々と、それぞれのご専門の立場から日本研究という学問の基礎を中国で築いた。また、劉先生も含めてすべて「日文研」の経験者だったことも王暁平先生は指摘している。つまり、改革開放後の中国における日本研究という研究分野の形成に、研究の視野から方法にわたり、日文研はすでに重要な一翼を担っていた。この中国の例からうかがえるように、日文研は創設当初から国際的日本研究のプラットフォームとして、よく機能してきていることが言える。

その後1990年代、2000年代頃から今に至って、中国の新世代の研究者の日本に対する関心の変化を常にかけている。今の中国の若者は、日本の漫画アニメを見て育った世代であり、日本語や日本文化についての翻訳書や情報が大変豊富で得やすい環境にいる。若手研究者の多くが早いうちに日本留学の経験を持っていることもあり、彼らの日本理解は自然に多元的になり、そして研究の関心も多様化、専門化してきている。そういった多様な日本理解や関心について、これから日文研がいろいろな事業を進めていくなかで、常にアンテナを立てて目を配る必要があるだろうと思っている。

### 2. 研究軸の変化に応じた貢献と研究資料の継続的な充実化

次に「日文研が語っていくべき文明」について、私が理解するには、研究内容の方向性の変化はそれぞれの分野の研究が進むなかで自然発生的に起きるべきもので、日文研がその動向を捉えつつ、様々な分野の研究者が個人でなかなかできないような研究活動

にどのように協力し、つなぎ役をしていけるか、ということを考えるのがとても大切である。その意味から、日文研が語っていくべき内容そのものよりも、日文研が今後に向けての「語り方」について少し考えたことを申し上げたい。

一つは、研究軸の変化に応じて、日本との関わりについての他文化の研究への貢献。

中国の近代美術史研究の例の一つ挙げたい。数年前に前任校で国際交流基金「日中知的交流強化事業 中国知識人・研究者招へい事業」に協力したことがあり、中国芸術研究院華天雪 (HUA Tianxue) 先生の受け入れ教員として在日中の研究調査活動のサポートをしたことがある。このプロジェクト自体は、日本語が堪能でない方、日本について予備知識がほとんどないような中国の研究者を対象とした支援プログラムであり、華天雪先生は長年、近代中国美術の代表的な画家・徐悲鴻 (XU Beihong) についての研究で知られている。徐悲鴻は、近代中国美術史のなかでフランス留学帰りの洋画家として語られているが、実際フランス留学に向かう前に、恋人と駆け落ちして半年ほど日本に滞在したことがある。だが、この半年の日本滞在のことはこれまでほとんど注目されてこなかった。しかし、徐悲鴻がこの短期滞在中に日本の「文展」で得た視覚体験がその後の代表的な歴史画創作に生かされていた可能性があったことを、華先生が日本で調査で気づいて、論文にまとめた。近代中国美術史の上では実に大きな発見だったと言える。こういった日本体験についての研究は、日本文化の特殊性を解明するというよりも、隣接する、あるいは関連する他文化の解明に貢献するものとなる。研究者に日本文化について深い理解があることがもちろん望ましいが、しかし現状では必ずしもそうではないことが多々ある。各分野の研究がグローバルな視野のもとで今後深まっていくにつれ、日本語や日本研究を専門としていない外国の先生方と共同研究したり、またその研究に協力したりすることも必然的に増えるだろう。このような研究の軸の変化に応じて、日文研の一員として心の準備をしなければならないと考えている。

もう一つは、研究資料の継続的な充実による貢献。

その意味で、非常にありがたいことに、日文研図書館はすでに大変包容力のある資料収集の仕方をしている。日文研に戻って図書館によく行くようにしているが、中国語の図書、資料について感心したのは、中国語圏の日本研究の成果の書籍だけではなく、近現代中国の新聞雑誌、地誌、档案 (中国の公文書) など、中国史研究のベースになるような資料が豊富に揃えられていることである。これは日中関係を専門とする研究者にとって非常に心強いことである。研究者はやはり研究資料が豊富にあるところ、利用しやすいところに大きな魅力を感じるのではないか。この点は今後もぜひ続けてもらいたいと願う次第である。

## 【まとめ】

## ●劉建輝

私は、もともと国文学の出身で、その後、比較文化、比較文学の分野に入ったけれども、実は自分の専門に対して、常にジレンマを抱えている。つまり国文の場合、おそらく国史もそうだと思うが、これまではまさに先ほど酒井先生がおっしゃったように固定され、また閉じられた世界であった。研究者はその狭い世界の中で競って問題だと思われるものを深く掘り下げていく。しかし、比較文学や比較文化の分野に入ってみると、こちらは実にオープンで、他文化との比較もできて、大変幅広いが、国文学の立場から見れば、やはりいろいろ掘り下げが不十分だと感じてしまう。もちろん逆に比較の立場から見ると、いわゆる国文、この場には国文出身の方がいらっしやるとちょっと失礼だが、やはり狭い世界で重箱の隅をつつくような研究をしているように見えて仕方ない。

そして、私はこのジレンマは、さきほどスクリーチ先生がおっしゃっていたグローバル・ジャパン・スタディーズの内包する矛盾とどこかで連動しているようにも思う。その拡大版はいわばグローバル・ジャパン・スタディーズの矛盾である。

また、先ほど井上先生がおっしゃっていた日本の特殊性の問題も、ある意味ではこれと関連しているのかもしれない。つまり、日本の内部だけを掘り下げていけば、当然いろいろな特殊な要素が出てくる。一方、それを国際的にまたは地域の中で考察すると、こちらも当然のように一種の関連性ないしは共通性が見えてくる。じゃあどちらに重点を置いてやるのか、私はそのどちらも大事だと思う。だからグローバルに重点を置くのか、ジャパン・スタディーズに重点を置くのかという二者択一ではなく、両方を同時に進めるのが不可欠だと認識すべきである。

日本の特殊性で言うと、私はだいぶ前に、これも日文研の先生からだったと思うが、世界地図を真ん中から折ると、その両サイドにイギリスと日本があって、この両国はいわゆる大陸文明、文化と違ってそれぞれ独自でしかも共通する文明、文化を持っているのだよと言われたことがある。そのときはすごく納得して、なるほどなと思った。たしかに双方とも島国で、それぞれヨーロッパとアジアの大陸文明に対峙する部分がある。その意味で考えれば、こういう文明論上の議論も当然無視することができず、私はやはりどう両者をバランスよくやっていくかが、むしろ今後の課題になるかと思う。つまりこの特殊性と普遍性の間で、私たち日文研が一種のパイプ役みたいなものとして、その役割を果たしていくべきではないかと感じている。

先ほどのご発言の中で、スクリーチ先生が日本の学問の強さという表現を使っておられたけれども、私も今、戦先生が挙げられた中国の例で言うと、それを強く感じている。実は最近、中国ではいわゆる日本学が非常に盛んで、そして、日本由来の学問の方法論も学界でかなり浸透している。日本に留学し、日本の学問を勉強して、中国に戻ってからそれを普及させようとする研究者も沢山いるし、中には日文研のスタイルを真似しよ

うとする学者グループさえある。

戦先生が例に挙げられた中国の90年代では、純粹の日本研究者も日中の比較をする研究者も、その大半は全部日文研の経験者である。まさに彼らが近代以来はじめて集団で中国の日本研究を立ち上げたのである。

このような事情で、いわゆる日本の学問的専門性というのはヨーロッパとはまた若干違う意味で、中国やその他の発展途上国にとって、やはり相当の強さを持っている。それを単純に弱体化させ、安易にグローバル化するだけでは大変もったいないと思う。

先ほどの安井先生のご発言から、私はそこに縦と横の二つの軸が存在するように感じた。つまり生命の誕生、また生と死などについて、自国の歴史的な変遷の中で探求する一方、同時に他文化との比較の中でそれを捉えることも大変重要だというふうに理解した。

特に先生が最後に言及された妖怪研究は、それ自体日本発祥の学問だったかもしれないが、それが中国に受け継がれて、今となっては日本よりも盛んなぐらいで、妖怪学会まで作られている。

このように、私は以上の4人のコメントを伺って、今後、私たちが常にこのような大きなネットワーク、あるいは大きな縦軸と横軸の中でそのジャパニーズ・スタディーズの部分とグローバルの部分、つまり日本的な部分と国際的な部分をバランスよくやらないといけないなということを強く感じた次第である。

そして最後、やはり日文研はその中でどのような役割を果たすべきかということも大いに再認識させられた。たとえば戦先生がおっしゃったように、日本研究者以外の学者に対してどうサービスしていくべきか。実はこれも非常に大事で、それこそジャパン・スタディーズを超えるより高度な学問体系を目指すために、私たちはこういう観点も常に視野に入れなければならないとつくづく思うようになった。

## 総 括

フレデリック・クレインス

まずは、発表者、コメンテーター、そして司会者の方々に感謝を述べたい。この3日間は本当に刺激的な発表とコメントがたくさん出され、そして、日文研の今後の方向性を考える上でも非常に有意義なディスカッションが行われたと思う。

総括をするようにとのことで、簡単に私の感想を述べたいと思う。

文明というのは、先ほど牛村先生からも少しご指摘があったが、非常に難しい言葉であり、この3日間、文明とは何なのかということについてかなり議論されたと思う。私がちょっと感銘を受けたのは、榎本先生の話で、明治維新期の留学生について、遣唐使と比較されるのに、中世の鎌倉、南北朝時代の留学生との比較がなされないのはなぜかというようなことをおっしゃっていた。これはこのシンポジウムの問題提起につながるものだったのではないか。

つまり、文明という言葉を使うときには、かなりの程度でその人の価値観や歴史認識が投影されている。ある人から見ると重要なものが、ほかの人にとっては重要ではなく、別のものが重要に見えるということがある。そこには価値観の違いが存在する。それでも、学問伝統上主流の西洋的価値観からは、やはり文明とはシヴィライゼーションであり、そこにはシヴィライズ礼賛という価値判断がすごく入っている。文明化された国と文明に追いついていない野蛮な国という区分けがなされる。牛村先生がお話しされていたことだと思うが、日本は40年ぐらい後れていると明治維新のときに計算されていたそうである。本当にそんな計算ができるのだろうかと少し驚きをもって聞いていた。

そうした偏った価値判断、つまり、ある種の優越感から暴力とか差別が生まれるのではないか。それに関連した話として、越智先生によるお墓の話では、琉球が日本化されたりアメリカ化されたりするというご指摘もあり、牛村先生のお話では、「文明の裁き」にまで至っている。そこには西洋文明至上主義とそれに対する疑問という意味合いも込められていることが強く感じられる。

実は、私も文明という言葉はあまり好きではなくて、文化という言葉のほうを好んで使っている。国際日本「文化」研究センターという名称でよかった。今後もぜひそのままにしていきたいと思いますと思う。

あと、牛村先生がご紹介されていた、文明一元論ではなく多元論という竹内好先生のご指摘については、文明がさまざまあるなかで、さらに一つの文明の中にも多様性が存

在するのだと気づかされた。古田島先生が、記録をするときにどの媒体を使うのかに着目して、和文を使うのか漢文を使うのか候文を使うのか、同じ文化、文明の中でもいろいろな選択肢があるということをおっしゃっていたが、このように、ひとことで文明と言っても決して単一的なもの、固定的なものではないということが、初日のご発表から分かった。

そして、太田先生も、異文化接触によって視野を広げたり、物事を別の視点で捉え直したりすることに関してご提言をされていた。そのご発言を読み解くと、文明・文化は絶えず変わっていく、変化していくということだと思う。さきほど劉先生もおっしゃっていたが、戦前の日本と今の日本はかなり違う。私が日本に来た平成元年と今の日本も、かなり違っていると感じている。文化は変わっていくものであり、そして、その変化とは、ほかの文化との接触によっても引き起こされていくわけなので、その現象を正確に捉えるのはなかなか難しいと思う。

そして、もう一度価値観の話に戻るが、私が非常に感銘を受けたのは、米欧亜回覧の会のお二方のご発表だった。小野先生は近年、西洋近代思想の普遍性に対して、やはり揺らぎが出てきているとおっしゃっており、もはや正解のない時代に突入しているのご指摘された。そして、その潮流に対しては漸進主義、そして稲盛和夫さんの利他思想が重要になるのではないかとおっしゃっていた。そしてさらに泉先生は、西洋的な「モアモア」の文明ではなく、「適適文明」を考え直さなければならぬとおっしゃっていた。この話を伺ったとき、京都の龍安寺にあるつくばいに「吾唯足知」という言葉が刻まれているが、すぐそれを思い起こした。

2日目には、今後の日本文化研究をどのように進めていくかについての幾つかのセッションがあった。特に田中先生からは、日本は積極的に外へ向かうべきだとの提言があった。そして、最終日である本日に酒井先生も同じようなことをおっしゃっていて、まず日本文化を客体としてではなくて、一つの主体として捉えるべきであるとともに、日本だけが主体なのではなくて、ほかにも多くの主体があるということを認めながら、それと付き合っていくという提言をされていたと思う。

そうした前提のもとで世界に発信していくべきだという提言を受けたのだが、その後のディスカッションのときに日本が外に出るだけでなく、交流が双方向でなければならないとの発言が追加されたと思う。

こうした提言を踏まえ、日文研が今後どのように進んでいくべきかということを考えると、やはりさらに世界への発信に力を注ぐとともに、もっと多元的な国際交流を増やしていくことが求められていると思った。どのようにそれを実現するかは今後の課題にしたい。

最後になったが、冒頭の瀧井先生のご発題として取り上げられたハンチントンの「文明の衝突」の再検討について触れておく。まず、ハンチントンは日本を単一的な文明として捉えていたが、このシンポジウムでの議論の成果を受けると、日本はほかの文明と

絶えず有機的に相互作用を起こしながら、常に変化を遂げてきた多様性に富む文明であるということが、結論としていえると思う。これはおのずからハンチントンの単一的文明説を否定するということにつながるであろう。

次に、日本が将来的に孤立するというハンチントンの予想については、やはり将来どうなるのか誰にも分からない。酒井先生が先ほど予想できなかったとおっしゃっていたが、歴史を刻みながら物事が日々どんどん移り変わっていくなかで、少し先の未来でも予想するのは不可能なことだと思うので、どうかご自分を責めないでいただきたい。学問というのは、今あるものと昔のものを実証的に研究したうえで、そこから将来に起こりうるいろいろな可能性を探究することではないかと思った。

仮にハンチントンの予想が奇跡的に当たって、日本が本当に孤立してしまったとしても、これもスクリーチ先生が先ほどおっしゃっていたことだが、江戸時代はほぼ鎖国していた。鎖国しているにもかかわらず、例えば出島という小さな人工島を通じて海外との非常に活発な学問的交流が続いていた。もちろん中国人とも交流が続いていた。国を鎖しながらも「四つの口」があったというぐらいであり、どんなに孤立したとしても鎖のあいだを通じた交流は保たれると思う。もしも孤立したならば、日文研が新たな出島的存在になって、交流の窓口としての役割を担えばよいと思う。

国際日本文化研究センター 第4期機関拠点型基幹研究プロジェクト  
「国際日本研究」コンソーシアムのグローバルな新展開—「国際日本研究」の先導と開拓—

## キックオフシンポジウム 「日本文明の再構築—岩倉使節団150周年に寄せて—」

開催日時：2023年2月17日(金)～2月19日(日)

会場：国際日本文化研究センター・第1共同研究室（傍聴はオンラインのみ）

主催：国際日本文化研究センター

共催：「国際日本研究」コンソーシアム

協力：米欧亜回覧の会

総合司会：瀧井一博（日文研）

### 2月17日(金) 「岩倉使節団研究の今」

10：30-10：40

挨拶：井上章一（日文研・所長）

10：40-12：10

- ① 基調講演：ピーター・コーニツキー（ケンブリッジ大学）「丁抹国撫蘭仙—明治初期の日本と小国デンマーク—」

司会：タイモン・スクリーチ（日文研）

コメンテーター：磯田道史（日文研）

13：30-14：00

- ② 発題：瀧井一博（日文研）「ハンチントン『文明の衝突』再読—岩倉使節団150年と日本文明の行方を考えるよすがに—」

14：00-15：30

- ③ 基調報告：泉三郎（米欧亜回覧の会）「岩倉使節団150年に寄せて—米欧亜回覧の会が取り組んできたこと—」

小野博正（米欧亜回覧の会）「岩倉使節団の意味を問う」

司会：瀧井一博（日文研）

15：45-17：45

- ④ パネルセッション「岩倉使節団再考」

司会：塚本弘（米欧亜回覧の会）

・柏原宏紀（関西大学）

・牛村圭（日文研）

・古田島洋介（明星大学）

コメンテーター：芳野健二（米欧亜回覧の会）、五十嵐恵邦（日文研）

**2月18日(土) 「令和の岩倉使節団—自由で開かれた国際社会への貢献—」**

10:30-12:00

⑤ パネルセッション「異文化接触と文化創造—古今東西からの岩倉使節団—」

司会：山田 奨 治 (日文研)

- 越 智 郁 乃 (東北大学)
- 榎 本 渉 (日文研)
- 太 田 昭 子 (慶應義塾大学)

コメンテーター：劉 序 楓 (日文研)

13:00-14:30

⑥ 若手研究者セッション「国際日本研究の課題と方法」

司会：エドワード・ボイル (日文研)

- ダマソ、フェレイロ・ポッセ (広島大学)
- ニコラス・ランプレクト (大阪大学)
- 坂 知 尋 (日文研)

コメンテーター：スティーブン・ハワード・ドッド (日文研)

15:00-16:30

⑦ 基調講演：田中明彦 (国際協力機構 (JICA)) 「新たな国際秩序と日本の役割」

司会：西村真彦 (日文研)

コメンテーター：楠 綾子 (日文研)

**2月19日(日) 「日本文明の再構築—文明多極化時代の国際日本研究／国際日本学—」**

10:00-11:30

⑧ 基調講演：酒井啓子 (千葉大学) 「グローバル関係学から見た「国際日本学」の役割」

司会：郭 佳 寧 (日文研)

コメンテーター：松田利彦 (日文研)

11:45-13:00

⑨ 座談会「日文研が語ってきた文明／語っていきべき文明」

司会：劉 建 輝 (日文研)

- 井上章一 (日文研)
- タイモン・スクリーチ (日文研)
- 安井真奈美 (日文研)
- 戦 暁 梅 (日文研)

⑩ 総括：フレデリック・クレインス (日文研・副所長)

## 執筆者一覧

### CONTRIBUTORS

瀧井 一博 TAKII Kazuhiro	国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授
ピーター・コーニツキー Peter KORNICKI	ケンブリッジ大学名誉教授
小野 博正 ONO Hiromasa	米欧亜回覧の会理事
泉 三郎 IZUMI Saburō	米欧亜回覧の会理事長
柏原 宏紀 KASHIHARA Hiroki	関西大学教授
牛村 圭 USHIMURA Kei	国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授
古田島洋介 KOTAJIMA Yōsuke	明星大学教授
越智 郁乃 OCHI Ikuno	東北大学大学院准教授
榎本 渉 ENOMOTO Wataru	国際日本文化研究センター准教授／総合研究大学院大学准教授
太田 昭子 OHTA Akiko	慶應義塾大学名誉教授
ダマソ、フェレイロ・ポッセ Damaso FERREIRO POSSE	広島大学特任学術研究員
ニコラス・ランブレクト Nicholas LAMBRECHT	大阪大学大学院助教
坂 知尋 SAKA Chihiro	国際日本文化研究センタープロジェクト研究員
田中 明彦 TANAKA Akihiko	国際協力機構（JICA）理事長
酒井 啓子 SAKAI Keiko	千葉大学教授
劉 建輝 LIU Jianhui	国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授
井上 章一 INOUE Shōichi	国際日本文化研究センター所長
タイモン・スクリーチ Timon SCREECH	国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授
安井 眞奈美 YASUI Manami	国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授
戦 暁梅 ZHAN Xiaomei	国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授
フレデリック・クレインス Frederik CRYNS	国際日本文化研究センター副所長／総合研究大学院大学教授

(所属はシンポジウム開催当時のもの)  
Affiliation as of the symposium date

## 国際シンポジウム 54

### 日本文明の再構築

岩倉使節団 150 周年に寄せて

(国際日本文化研究センター第4期機関拠点型基幹研究プロジェクト  
「国際日本研究」コンソーシアムのグローバルな新展開——「国際日本研究」の先導と開拓」キックオフシンポジウム)

非売品

発行日 2024年3月29日 初版第1刷発行

編者 瀧井一博

発行 大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3丁目2番地

電話 075-335-2222 (代表) fax 075-335-2091

ウェブ <https://www.nichibun.ac.jp/>

組版 株式会社 遊文舎

〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4丁目17-31

電話 06-6304-9325



Online edition : ISSN 2434-3145

INTERNATIONAL SYMPOSIUM 54

INTERNATIONAL  
RESEARCH CENTER  
FOR JAPANESE STUDIES

日本文明の再構築  
山石倉使節団150周年に寄せて

国際シンポジウム54

国際日本文化研究

センター